
もうひとつのソラ

ライヒ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もっぴとつのソラ

【Nコード】

N2197P

【作者名】

ライヒ

【あらすじ】

沢田桃風姫は意外とどこにでもいる中学生。そんな彼女の少しの心配は双子の兄がダメダメな事ぐらい。しかし、普通に暮らしていた彼女の元いきなり謎の赤ん坊がやってきて……！ツナ妹で主人公愛され。でもloveよりlike。ただいま日常編。

人物紹介（前書き）

ネタばれは極力減らしています。

人物紹介

名前

沢田さわだ 桃風姫とうふうひめ

説明

沢田綱吉さわだつなよしの双子の妹。

性格は一言でいえば不思議系。周りの人間からはなにを考えてるかよくわからないといわれる。

相手の考えている事、相手がこれから何をするか、などが若干わかる。要するに空気が読めるとも言える。

ツナとは以心伝心。もはやテレパシーの領域。

ほぼ全ての人に平等に接する。また子犬のような性格から、色々な人に好かれる。

体格はかなり小柄で、中学生というよりむしろランドセルが似合いそうなお年頃に見える。

本人は背が小さい事をそれほど気にしてはいないように見えるが、他人から指摘されると不機嫌になる。

滑舌が悪く、人の名前を呼ぶ時に平仮名になる。

例：綱吉 つな など。

相手によって態度が変わるが、それは差別というわけではなく相手のノリに合わせてると言える。

常に救急箱常備。いざという時には私の応急セットが火を噴くぜ。

手当の実力はかなりのもので、医学もちょっとかじっている様子。

好物は甘いもの。

苦手なものは悪い人。

極度の運動音痴で、ツナより体力がない。ドジというわけではない。

常におっとりぼーっとしているように見えるが、頭の中では色々考えてる。本人いわく「考えるのが私の仕事」

そのためピンチになっても意外と冷静に見えるが、実を言うと展開に身体がついて行っていないのと、半ば現実逃避をしているため冷静に見えるだけ。

人物紹介（後書き）

こんな感じの我が家の子。

リングとかボックスについては後々あとがきにでも。

第一話 前編「晴れ・今日はつなに家庭教師が出来ました。」（前書き）

これはREBORN!のオリキャラ物です。ツナに妹が出来ていきます。以外と誰からも好かれました。小説にするために少しセリフ回しなどに変化が生まれています。大丈夫という方はどうぞお読みください。

5月27日 題材にした回の題名を追加

『標的1 イタリアからやってきたアイツ』

第一話 前編「晴れ・今日はつな家庭教師が来ました。」

ここはイタリア。普段はきれいな風景で多くの観光客を集める観光名所。…問題と言えばスリや犯罪が少しだけ多く、治安の面で心配な所か。

そして、この国には裏の顔がある。

裏の社会に置いて絶大な力を持ち、時には国家さえも影から動かすことができるほどの組織、マフィア。イタリアはそのマフィアの総本山のような場所という、とてもデンジャラスな一面も併せ持っていた。

そのイタリアにて、事情を知る裏の人間達が集まる吹き溜まりのような場所に、一人の赤ん坊がやってきていた。

彼の名をリボン。

見た目は小さな赤ん坊だが驚くなけれ、こう見えても裏社会では一大マフィアのボスに一目置かれている存在である。

仕立てのいい黒いスーツに帽子、その上にはなぜかカメレオンが乗っている。そんな彼が店に入ってきた途端に、荒くれ者たちの視線が集中した。

「リボーンか…、またオヤジに呼び出されたようだな」

その中の一人がリボーンに話しかける。ちなみに、「オヤジ」とは簡単にいえばマフィアのボスの事。彼らの親しみと敬愛の念、そして忠誠心と信頼を込めた最上級の呼び名だ。

「ああ」

その男の問いかけにリボーンはそげなく返す。そしたらその男の隣の席に座っていた別の男が幾分かからかいの感情を含めて問いかけた。

「人気者はつれーなー。んで、今度はローマか？ ヴェネチアか？」

イタリアにある主要な都市の名前を羅列した男に、リボーンは一言。

ジャンボーネ
「日本だ」

「…!!」

ざわり、とその一言を口にした瞬間、周りの空気が総毛立つ。日本、彼が口にした言葉には、それ相応の重みがあった。

「なに…!!」

「オヤジの奴、とうとうハラ決めやがったのか…!!」

ざわ、ざわ、と波紋のように騒ぎは広まる。声は反響し、跳ね返り、満たしていく。

そして声の洪水の中、リボーンはポツリと。

「長い旅に、なりそうだ」

そう呟いた。

第一話 前編「晴れ・今日はつな家庭教師が来ました。」

「桃凧ー、パス行つたー！」

「え、あ、うん！」

ふわりと飛んできたボールをこれまた軽く味方に飛ばす。流石に選んで飛ばせるほど器用ではないので、かなり適当だ。

今は体育の時間、今日はバスケなのだが、男子と女子に分けてやるのは学校の恒例だろう。

彼女、沢田桃凧さわだとうひめ姫は運動が得意というわけではなく、むしろ苦手な部類に入る。そんな彼女にとってこの時間は正直言って退屈以外の何物でもなかった。

まあもつとも、あちらに比べたら失礼な話なのだろうが。

桃凧が見た先、そこには。

「ツナ！ パス行つたぞー！」

「え、え、ちよつと待って……！ ……ぶっ！」

ふわふわと逆立つた癖つ毛が特徴の琥珀色の髪の少年……彼女の双子の兄である沢田綱吉が、ボールを顔面でキャッチしている所だった。

勉強もダメ、運動もダメ。ついたあだ名が『ダメツナ』。

しかも本人がそれを自覚しているのに直そうとしない所がなお質が悪い。ゆえに周りの人間はどうにかしようかと奮闘するわけなのだが、桃凧は特にそういうことをしようとは思わなかった。

周りが何を言おうと、本人が変わろうと思わないうちは何をどうやってもダメなものはダメなのだ。ツナにしたってそう、自分で出来ないと思っっているうちは出来ない。

しかしだ、桃凧はこの状況をどうにかしたいと心の底では思っているのは事実で、しかし自分ではその方法が思いつかず。

たとえば、そう。

一度死ぬくらいのショックがあれば、変わるのではないかな。と思う。

「まったく、お前のせいで負けたんだからなーっ！」

「じっ、じめん…！」

体育の終わり、結局何の役にも立てないどころかむしる足を引っ張っていたツナに向かっての罵詈雑言。ツナもツナで反論できる理由が見当たらない。

「とゆーことで、お掃除頼める？」

「俺たち貴重な放課後は遊びたいからさー」

「えっっ！」

顔を上げたツナの目の前にはお掃除モップ。まさか一人でやれと。

「んじゃ頼んだぜー！」

「ファイトだダメツナー！」

「ちよっ、待ってよー！」

ツナの引き留めにも聞く耳持たず、いつしか体育館はツナ一人だけになってしまった。

それでも渋々とはいえ掃除を始めるツナ。掃除中の愚痴には終わりがない。

「ヘイヘイ、どーせ俺はバカで運動音痴ですよー」

そんなツナがなぜ学校に来ているか、その理由は一つ。

「えー、おかしいかなー？」

「もー、これだからこの子は……」

体育館の外から聞こえてきた無邪気な笑い声。それを耳にした途端にツナの顔が明るくなる。

ツナが学校に来ている理由はただ一つ。笹川京子が見られるからだ。

京子は簡単にいえばツナのクラスメイト。かわいらしい顔立ちと誰にでも向ける無邪気な笑顔。ツナの他にも密かに思いを抱いている人物もいるのではないだろうか。もっとも、本人はそれに全く気付いておらず、周りから言わせればその天然なところもイイ、のだから。

「あー……、やっぱりかわいいなー……」

「ちよいとそこのお兄さん」

「ほわぁっー！」

ほわほわとしていた所にいきなりの呼びかけ。思わずツナの口か

ら意味不明の叫び声が漏れ出る。

「誰見てたのー？」

「な、何だ……桃凧か…驚かせるなよなー」

後ろを見たツナの目に入ったのは自分の双子の妹。小さい頃はよく、妹の方がしっかりしていると言われたものだが。いや、それは今も変わらずか。

驚くツナの事は全く気にせず、桃凧は窓の外を見ると。

「ふむふむ、なるほどー。きょーこちゃん見てたんだ」

「そ、そうだけど……」

「きょーこちゃんいい子だもんねー？」

「そ、そうだね……。あのさ、桃凧」

「んっ」

いつの間に後ろに来たのかとか、その何か含んだ視線は何だとか、色々言いたいことはあるが、とりあえず一番言いたいことは一つ。

「……背、足りないんなら抱っこしてやるっか？」

「……ほっといてくれ。見えるんだから問題ないし」

実を言うところの妹、かなりのミニサイズだ。決して大柄とは言え

ないツナよりさらに頭一つ分小さい。多分小学生と言えば通ってしまうのではないだろうか。そしてそんな妹が窓の外をのぞき見るために目いっぱい背伸びしている光景は、正直言ってなんか痛ましく思えてくる。

「いやでも、結構足とか震えてるし」

「……あ！ ダレカキタミタイダヨ！」

見ていてわかるくらい思いつきり話を逸らされた。普段は「身長なんて気にしてるわけねーだろ」みたいに構えてはいるが、意外と気にはいたらしい。少なくとも、指摘されれば不機嫌になるくらいには。

ツナはしばらく胡乱げな目線で桃凧を見つめていたが、とりあえず窓の外に視線を移す。そこには。

「おまたせ京子！」

「あ、持田センパイ」

「それじゃ私行くねー。二人の邪魔したら悪いし？」

「む、もー花ったらー」

ちょうど京子の待ち人が来ていたらしい。一緒にいた子が含み笑いしながら離れていった所を見ると、どうやらそれっぽいあれなのだろうか。

「んーと、あの人剣道部の主将だっけ。なんなんだろ、付き合っ

んのかな。……つな？」

すぐそばで見ていたツナの方を振り返ると、何とというか、がつくりと言うかズーンというか、とにかくそんな効果音が見えそうなくらいに落ち込んでいた。

「つなー？」

「やっぱり剣道部主将とできてたんだ……」

桃凧の声もどこ吹く風。どうやら、かなり沈んでいるらしい。

やがてツナはふらふらと立ちあがるとそのままモップを放りだし、見ているこちらが不安になるようなおぼつかない足取りで歩いていく。

「つなー、つなー。掃除は？」

「いい…サボる…」

「学校はー？」

「サボる…」

失意のどん底にいる人間に何を言っても無駄、そのまま体育館をあとにしたツナ。残されたのは桃凧一人。

「……………、しよーがないよね、うん」

よし、と気合を入れなおすとモップを手に取る桃凧。このあと何

をするかは、言わなくても解るだろう。

彼女にとってこういう行動はさして珍しくもない。ツナが投げ出したりしたことを後からやってきて終わらせるのは、半ば彼女の義務と化していた。

と言っても、多分桃凧は他の人の分をやれと言われた場合は渋るだろう。ただの便利屋ではなく、彼女が動くのは、あくまでツナのためだ。

「……うむ、上出来」

数十分後、それなりに綺麗になった体育館の真ん中で汗を拭う仕事をやる桃凧。その言葉通りに、体育館は初めと比べてわずかに綺麗に見えるかもしれない。あくまでも、かもしれない、だが。

「……まあ、体育館なんてそんなに隅々まで見る人いないだろうし、……うん。問題ない」

軽く自己完結してから掃除道具を片づける。

さて、時間は放課後。特に部活などには入ってないためこのまま帰ってもいいが、まだ一つだけ仕事が残っている。ツナとは全く関係のない、しかしある意味どうしてもしなければならぬ仕事だ。

「うわぁ……」

教室に来て早々呟いたのがこれとは如何なものかと言われるかもしれないが、それは許して欲しい。

だって、あの広い体育館を一人で掃除してきた帰りにこんなものを見せられては、怒るか泣くか呆れるかぐらいしかすることはないだろう。というより、これで笑い出す人間がいたらそれはもう色々キマってるに違いない。具体的に何が、とは言わないが。

「今日もまた多いなあ……」

目の前には書類、書類、書類の山。机の耐荷重量は何キロだった？ と思いたくなるような枚数である。いや、もはや枚数ではなくセンチやメートルの単位で表した方が適切かもしれない。

言うておくが、この書類、別に桃尻が片づけるのではない。ある人物へ届けるためのものだ。

「これは紐とかで縛ってまとめた方がいいよね、途中でぶちまけたら洒落にならんし」

ちなみに、こうなることは半ば予想済みだったのでもう先生に頼んでビニール紐を貰ってきている。貰いに行った先生が何に使うのかといぶかしんでいたが、事情を説明すると真っ青になってよろしくお願いしますと頭を下げてきたので、正直反応に困った。

とりあえず目の前にある紙束をとりわけてまとめていく。結構な枚数だが、頑張れば運べるかもしれない。

「うん、いける。頑張れ私、いけるいける」

と自分に自分で自己暗示をかけながらも東を抱えると、やはり重い。桃風はあまり力がないからなおさらだ。

「んぐ…大丈夫…距離はそんなにないから…大丈夫…」

言いながらも足取りはまるで先程のツナのように。おぼつかないどころかいつ転ぶのかわからない。

それでもふらふらと歩きながら言った所は応接室前。普段はとある理由があつて通る人があまりいなく、もしいても早歩きで通り過ぎる場所だ。

応接室の扉の前に立つて、重大な事に気付いた。

「……………どうやって扉開ければいいんだこれ」

シミュレーション開始。

手・両手ともにふさがつていて不可能。

足・女の子として却下。

頭・そもそもどうやって？

体・体当たりの結果弾き飛ばされる未来しか予想できない。

結論、不可能。

「扉の前に置いたら怒られるかな…」

と、何やら不穏な事を呟く桃尻。ツナほどではないが、彼女も彼女で適当だ。

「いいかなー…？ いいよなー…？ わざわざこんな紙束に変な事する人なんていないと思うし…」

「……何やってんの？ 君」

桃尻の目の前でベルリンの壁の如き威圧感を持って佇んでいた扉がいつも簡単に開き、そこから学ランを着た黒髪の少年が。

「……あ、きよーや。お久しぶりです」

「昨日の放課後会ったばかりだけど」

彼の名は雲雀恭弥^{ひばりきょうや}。並盛中風紀委員長でありながら、不良の頂点に君臨する存在だ。

彼こそが実質的にこの並盛中を、というより並盛町全体を取り仕切っているといっても過言ではない。

その上『群れる』事が何よりも嫌いだと自分で豪語するだけあり、彼の目の前で少しでも『群れ』に値する行為をした者たちは例外なく潰されている。しかもこれで子供っぽい一面があり、気にいらなければ問答無用で『咬み殺される』。それゆえ、周りの人間からとてつもなく恐れられている。

桃尻に風紀委員への書類運びの仕事が回ってきているのも簡単だ。出来れば雲雀に近づきたくない、だから他の人に任せたい、でもそ

の人も怖がる。しかし書類が滞ってはいけない。その結果、特に雲雀を怖がらない桃凧にお鉢が回ってきたのだ。

桃凧は雲雀を怖がらない、というより気にしてない。そして雲雀も雲雀で桃凧の接近を許しているフシがある。何故かは解らないがある意味適任と言えるだろう。

「とりあえず、書類…」

「…君、前見えてないみたいだけど。そんな状態でよく来れたね」

「もう道を覚えてしまったからー」

雲雀に開けてもらった扉をくぐり応接室に入る桃凧。相も変わらず応接室には雲雀以外誰もいない。群れるのが嫌いな彼らしい部屋だ、と思う。

ふらふらと一番大きな机に近づいてゆっくりと書類を乗せる。その瞬間今まであった重りが消え去ったような感覚と共に、一気に体が軽くなった。

「ああ…私は今…自由を手に入れた気がする…！」

「何言ってるの君」

訳のわからない桃凧の一人言にも律義に突っ込みを入れながらも、雲雀は積み上げられた書類の数枚を手取る。

しかし見れば見るほど凄まじい書類の量だ。なぜ風紀委員会にここまで量の書類が集まるのか。いやまあ雲雀に常識など通用しな

いというのは百も承知だが。この間はバイクに乗っているの見たし、いいのか中学生。

というより、雲雀はちゃんと仕事をしていたのか。てつきり部下に全てまかせつきりで自分は悠々自適に屋上で昼寝とか…。その瞬間、背筋になにかざわりと悪寒が。発生源は……きよーや？

「……言いたいことがあったら、はっきり言ったらいいと思うよ」

「ん、ちゃんと仕事してたのかー、とって」

「……、」

普通の人間ならこれだけ殺気を浴びせられれば真っ青になって口をつぐむものを、あっさりすっぱり言いきった。気づいてないわけでもあるまいし、気にしてないというのが一番適切な言い方だろう。

「ん？ 何？」

「…いや、何でもないよ」

何かタイミングをずらされた雲雀が若干不機嫌そうにもう一度書類へ目を通す。その様子を見ていた桃凧が何を思ったか。

「手伝おーか？」

「僕は群れるのが嫌いだ」

今度は書類から目をそらさず言い放つと、桃凧は少しだけふむふむと考えた後。

「んー…」

書類を数枚だけ手に取ると応接室の一番隅っこにちよこん。

しかもそのまま書類を見つめ、なるほどなるほどそういつことかとペンを片手にさらさらさらり。

「……、」

流石にこれは疑問に思った雲雀、もう一度書類から顔上げる。

「……何やってるの？」

多分その言葉の中には、何を考えてるの？ と、人の話聞いてた？ の二つの意味が隠れているのだろうが、桃凧はそれを気にしない。気がつかないのではなく、気にしない。

質問すれば桃凧が顔を上げ。

「だって、群れるの嫌いらしいから」

それだけポツリと言った後にすぐに顔を書類に戻す。

「……」

いや、それだけで片付けられても困るのだが。

「……だったらなんで出ていかないの？」

「出ていく必要あるの?」

一応そういう意味で言ったのだが。

「詳しく説明すると、きよーやは群れるのが嫌い、でもきよーやの手伝いがしたい、距離を離してれば群れには値しないんじゃないかと思ってる?」

「ばーん、と明かされた知りたくもなかった新事実。当の桃風は褒めて褒めて」。と小動物の如きキラキラ目線。ちなみに、応接室はかなり広いので一応数メートルは離れている。

「……」

もはやここまでくれば怒りを通り越して呆れるしかない。なぜここまで天然なのか、屋上辺りから他の草食動物と群れてる姿を見た時はもう少し真面目そうな感じがしたのに。もしかしたら人によって接し方が違うのだろうか。

しかし、雲雀も雲雀で我が道を行く ミスター Mr. ゴイング going マイ my ウ way. 疑問は疑問のまま処理され、深くは考えない。

「はあ……」

まあいいか、困るわけではないし。と思いついた雲雀は再び書類に目を通し。なんかめんどくさくなってきた、草壁辺りに任そうかなどと委員長にあるまじき事を考えながらも仕事仕事。桃風も頼んでないのに手伝ってくれてるし、これなら今日中に終わると思われ

それに、二人なら群れではない、し。

結局かなり夕方になってしまった。

「やはり書類はすごい…結局全部終わらないままきよーやにまかせて出てきてしまった…」

そこまで暗いというわけではないが、いつも帰る時間よりはやはり暗い。

「…ま、いつか。きよーやの役にも立てたし」

思えば不思議な縁だったと思う。自分と彼は。

たまにだが、桃尻は一人でゆっくりしたくなる事があって、そういう日には散歩しながら適当に並盛で人の少ない所を探すのだが、…なぜか、いつも狙い澄ましたようにそこに雲雀がいるのだ。一人で居たい者同士、思考回路が似るのだろうか。

まあ最初は間の悪い時に来ちゃったなとか思ったが、そんなことでも繰り返し返せばいつしか慣れる。といっても、別に話しかけたりしたわけではなく、居るのがなんとなく予想出来るようになった、と言っただけだが。

そして並盛中に入って風紀委員会への書類運びを頼まれた時、初めて入った応接室にいたのには驚いた。あちらもあちらで自分がい

たのには少し驚いていたみたのだが。なんというか、世間って意外と狭いんだなーと思ったのを覚えている。

……なんで小学生がここに？ みたいなことも言われた気がするが、そういうことは覚えてるだけ無駄だと判断します。

「…………おや」

昔の事を考えていたらいつの間にか家の目の前に居た、ツナはもう帰ってきてるだろうか。

「ただいまー」

「あら桃風！ おかえりなさい」

「うん、ただいま」

玄関の扉を開けると、自分の母親の沢田奈々が迎えてくれた。ツナは結構鬱陶しがるときも多いが、自分にとってはいい母親だと思う。父がいないという環境でここまで二人を育て上げた手腕は尊敬しいものだ。

「あ、そうそう桃風」

「ん？」

「今日ね、ツナに家庭教師の先生が出来たのよー」

「ツナに？」

これはまた嫌がりそうだな。

「ツナの成績が上がるまで住み込みで暮らすことになったのよ」

「ほえ…住み込みとはまた珍しい」

ということは今二階にいるのだろうか。

そこはかたない興味をそそられた桃凧はいつもより速足で階段を上る。おそらくツナの部屋あたりだろう。そう考え扉を開けた桃凧の目の前には、

……なんか、この世の終わりかと言っぐらい混乱したツナがいた。

「…ちよつと、何があったん」

「と、ととと桃凧！ どうしよう…！」

なにやらいつもの数割増しの勢いで慌てるツナをなんとかなだめすかして事情を聞くと。

「笹川京子に………告白しちゃったああー！」

「……は？」

何故に？

「……あのヘタレつなが何でそんな無謀な事を……」

「オレのおかげだぞ」

「え…？」

第一話 前編「晴れ・今日はつなに家庭教師が出来ました。」（後書き）

この作品、もともとは友人に見せるために書いたものでした。

この作品を友人が見てくれることを、そしてそれ以上に多くの人の目に留まることを願います。そしてそれで幸せな気分になってくれたらとてもうれしいですね。

第一話 後編「晴れ・今日はつな家庭教師が来ました。」（前書き）

後編です。桃凧ちゃんほとんど出番なし。

5月27日 題材にした回の題名を追加

『標的1 イタリアからやってきたアイツ』

第一話 後編「晴れ・今日はつなに家庭教師が来ました。」

前回のあらすじ

クラスの人気者、笹川京子にハートがドツキユンだった沢田綱吉、しかし京子が剣道部の主将と一緒にいるのを双子の妹である沢田桃凧と一緒に目撃してしまった。

失意に沈むツナ、そんなツナの事を影から応援していた桃凧、一仕事終えて帰ってみればそこにいたのは灰と化したツナ。

いったい何があったのかと聞いてみれば、なんとツナ『あの』笹川京子に告白してしまったとのこと。呆然とする双子の前に現れた謎の影、彼は一体…！

第一話 後編「晴れ・今日はつなに家庭教師が来ました。」

「……誰？」

「オレはリボン、ツナの家庭教師だぞ」

「家庭教師……」

桃凧は絶句した。だって、リボンと言ったこの人物、見た目どう見ても赤ん坊なのだから。

いやまあ、二足歩行だが。黒いスーツ着てるが、頭にカメレオン乗っけてるが。それにしだって突飛すぎるだろう。

とりあえず、この子がツナの家庭教師であるということ仮定して、それでなぜ告白。

「このダメツナが京子への告白を渋っててな、だからオレの力を貸して告白させたんだぞ」

「そんな事誰も頼んでないだろ！！」

いままで灰となっていたツナが復活する。どうやら、告白は彼の意味と反した行為だったらしい。

「俺は告白する気なんてサラサラなかったのに……！」

「告白したくてもできなかつただけだろ？」

「う、う、うるさい……！」

ぶにーとツナがリボンの伸びのよさそうな頬を引っ張る。その

瞬間、リボーンの手がブレた。

「…?」

そして瞬きの後見たのは地面に倒れるツナとそのまま佇むリボーン。何が起きたのかは見えなかったが、なんとなくわかる。すなわち、あの赤ん坊はものすごく強いということ。

「あ、そうそう」

くるりとリボーンがこちらを振り向き、桃凧を見上げる。

「お前の名前は？ 俺はツナの家庭教師でもあるが、お前の家庭教師でもあるからな。生徒の名前を聞くのは当然だぞ」

「私？」

どうやら本当に家庭教師らしい。桃凧は仮定の話を実際に進化させると、ペタンと座り込みリボーンの顔を見る。目と目を合わせて、しばらく考えた後。

「…桃凧ももかぜ。沢田、桃凧姫だよ」

「桃凧か。よろしくな」

「うんよろしく。……せんせーって呼んでもいい？」

「好きにするといいぞ」

差し出された手を握り、お互いに笑みを浮かべる。

「んだよ…俺の時とはずいぶん態度違うよなー…」

「そりゃそうだぞ。マフィアは女には優しいからな」

(……、マフィア?)

「そういえばせんせー、なんでつながぎょーこちゃんに告白できたの?」

リポーンが手伝ったというのは解るが、あのツナが説得くらいでやるうと思うはずないし、もしそうだったらここまで後悔はしてないと思うし。

「簡単な話だ。オレがこれを撃ったんだ」

そうしてリポーンが取り出したのは一つの銃弾。…どうやら本物っぽい。

「それ何?」

「こいつは『死ぬ気弾』。こいつに撃たれた者は一度死んでから死ぬ気になって生き返る」

「へー…」

ん?

「せんせー…」

「何だ？」

「……………撃つたの？」

「撃つたぞ」

「……………拳銃で？」

「拳銃だな」

「……………つなを？」

「ダメツナをだな」

「……………」

とりあえず、言いたいことは。

「なんで拳銃なんて持つてるの？」

「オレは殺し屋ヒットマンだからな」

ヒットマン…と言うと、よく映画などに出てくる殺し屋の事か。
他にもスナイパーとか。

「そういえば、マフィアって？」

「マフィアと殺し屋には密接な関係があるんだぞ。今回オレがお前らの家庭教師になったのも、俺がお前らを立派なマフィアにするためだからな」

家庭教師で殺し屋でマフィア…ああだめだ、こんがらがってきた。

「マフィア…」

「！ そう、それだよ！」

あーとかうーとか唸っていたらツナがいきなり身を乗り出したため、下敷きにされる桃凧。ツナの体重では潰れるぐらい重いということはないが、やはり苦しい。

「死ぬ気弾って何だよ！？ そもそもマフィアとかさ…、聞いたこともないよー！」

「ちょ…つな…重い…苦しい…どいて…」

「死ぬ気弾はボンゴレファミリーに伝わる秘弾だ」

「「ボンゴレファミリー？」」

話の流れから見て、おそらく桃凧達をマフィアにしたがっているマフィアだろうか。

「オレはボンゴレファミリーのボス・ボンゴレ9世の依頼でツナをマフィアのボスに、桃凧をその補佐に教育するために日本へ来た」

聞けば聞くほど無茶苦茶な話だ。正直言っつて、容易には信じがたい。

だが、何処の世界に二足歩行で拳銃を持った赤ん坊がいるのだから

う？ しかも実弾だし。そう考えるとあながち嘘や冗談では片づけられない。

隣にいるツナの方を見るとこれまた微妙な表情をしていた。多分、色々悩んでいるんだろう。桃凧は見ていないので何とも言えないが、ツナはその身に死ぬ気弾を受けたみたいだし。

「ボンゴレ9世は高齢と言うこともありボスの座を10代目に引き渡すつもりだったんだ。だが、10代目最有力のエンリコが抗争の中撃たれた」

ぺらり、とりボーンが一枚の写真を取り出す。なんとというか、グロイ。隣でツナが軽く悲鳴を上げている。桃凧はちょっと見た後すぐに視線をそらしたのであまりダメージはなかったが、ツナはもろに見てしまったのだろう。

「若手No2のマッシーモは沈められ」

もう一枚ぺらり。

「秘蔵っ子のフェデリコはいつの間にか骨に」

さらにぺらり。

「い、いちいち見せなくてもいいから!!」

「うえ…」

とつとつ両手で顔を覆って拒否の姿勢をとるツナ。桃凧もおおむね同じ気持ちだった。

「それで、10代目候補として最後に残ったのがツナだけになっちまったんだ」

「はあ!? なんてそうなるんだよ!」

「せんせー、つなはごく普通の一般中学生で日本人だよ? マフィアとなんか関わりないし」

「そうでもないぞ」

「「え?」」

よくハモる双子だな。と思いながらもリボーンは話を続ける。

なんでも、ボンゴレファミリーの初代ボスは早々に引退し日本に渡ったんだとか。それが桃風達のひいひいひいお爺さん。つまり、血縁上桃風達は立派にボンゴレファミリーの血を受け継ぐれっきとしたボス候補。

「な、何言ってるんだよ! そんな話聞いたことねーぞ」

ツナの抗議にも耳を貸さず、リボーンは早々に寝る支度を始めてしまう。パジャマに着替えながら一言。

「心配すんな。オレが立派なマフィアのボスとその補佐にしてやる」

「「頼んでない!」」

またハモった。

「ちなみに、俺の眠りを妨げると死ぬぞ。気をつけるよ」

ベッドの近くにはおそらく手榴弾と思われる危険物がゴロゴロ。
しかもご丁寧にもう設置してある。

「家にトラップを仕掛けるなー！　つーかオレのベッドで寝るなー
！！」

「まあまあ…私の部屋で寝よ？」

ツナの叫びはご近所に響き渡ったという。

翌朝。

「つな…起きて…」

「うあゝ…、学校行きたくない…」

布団の中で駄々をこねるツナに対して心底困り果てた表情の桃凧。
朝からずっとこの調子である、そろそろ行かなければ遅刻してしま
うというのに。

「そう言わず…行かなければ何も変わらないよ？」

「だってさー…同じクラスなんだぜ？　もし目があったりしたら絶

「对気まずいって…」

「つな…」

「どうしたものか。」

「そんなツナに忍び寄る黒い影。」

「チャオっす」

「それに皆にだって広まってるだろうし、そもそも学校なんて行かなくても別にゴフウッ！」

「つ、つな！」

華麗に飛びあがったリボーンが重力に乗せてツナの腹にとび蹴り一発。ドフッ！ と割とシャレにならない音がしていたが、とうのリボーンの顔は涼しいもの。

「朝からうじうじしてんじゃねーぞ」

「せ、せんせー…」

「学校行け。行かねーなら…」

「ジャキン！ とりボーンが持っていた銃の照準をツナに合わせる。」

「わわ、わかったよ！ 行けばいいんだろ、行けば！」

慌てて布団から飛び上がって支度を始めるツナに、それを呆然と

しながら眺める桃凧。リボーンは桃凧に小声で。

「…オレも学校に行くぞ。ツナがちゃんとマフィアのボスらしくしてるかどうか見るためにな」

「あ、そうなんだ…」

学校に赤ん坊が入れるのだろうか？ という疑問は、とりあえずスルーしておこう。それにせんせーの事だし、何とかなると思う。

昨日までとは変わり過ぎた日常になんとなくついていけない桃凧は、^{なか}半ば夢見心地のような気分で眺めていたのだった。

「笹川京子と目があつたらどうしよう…」

「つな、ファイト。ほら、思い切ってガラリと」

「うっ…」

所変わって教室の目の前。若干顔が青いツナと、それを応援する桃凧。実際、教室にくる時もツナはかなり渋っていて、桃凧はそれをいちいちフォローしながら来ていたのだ。なんというか、もう地球上に存在するありとあらゆる応援の言葉を使いきってしまったような感じがする。

そして扉を開けたツナに待っていたものは。

「お、パンツ男のおでました！」

「ヘンターイ！」

「電撃告白ー！」

「持田センパイに聞いたぞー！！」

「めいっばい拒絶されたんだってなー！」

思いつきからかいの声。その言葉を聞いたツナはもちろんのこと、席に座っていた京子も少し居づらそうな表情をしている。

というより、パンツ？ なんだそれ。

「あ、あ〜う〜…」

「だばー、と滂沱たっけの涙を流しながらくるとUターンしたツナ。桃尻も止めなかった。流石にこれはきつい。」

しかし、そんなツナの前に立ちはだかるもの多数。袴と着物、剣道部のユニフォームだ。

「おっと、帰るのはまだ早いぜー？ 道場で持田主将がお待ちかねだ」

「うえ！？」

先程から出ている持田という人物は確か、昨日京子と一緒にいた

剣道部の主将だろうか。

「道場へまいりまあーす」

「ちよつ、ちよつと!」

なんてことを考えてるうちにエイサホラサと運ばれていくツナ。行き先は先ほど話に出ていた道場だろうか。

ツナが運ばれていったことにより必然的に桃風の傍に人がいなくなり、教室で固まっていた女子がぞろぞろと集まってくる。まあ、桃風は今回の事件(?)の妹だ。そうなるのも仕方ないだろう。

「ね、桃風ちゃん聞いた？」

「何がー？」

「沢田の事よー。なんでも、パンツ一丁でいきなり京子の所に現れたと思つたら、そのまま告白したらしいのよね!」

そのうちの女子の一人が話した言葉に反応してキヤーやヤダーなど黄色い歓声上がる。その歓声をBGMにしながら、桃風の頭はある一つの事柄に支配されていた。

すなわち。

「…パンツ一丁？」

何で、何でパンツ一丁なのだ? もつと他になんかあつたんじゃないか? それだとただの変態じゃないか…。ツナ、君は一体何を

やったんだ。死ぬ気弾のせいか？ それにしたって何故脱げる。

唾然としながらも手をひかれて道場に連れて行かれる、他のクラスメイトのほとんども道場に集合したらしい。野次馬根性旺盛で結構なことである。

そして道場の真ん中にいるのは昨日の剣道部主将持田。見るからに怒り心頭な感じで、額に青筋が浮きまくっている。そしてその怒りを一身に受けるツナはまるで蛇に睨まれた蛙の如く。

「きやがったな変態ストーカーめ！ お前のようなこの世のクズは神が見逃そうがこの持田が許さん！！ 成敗してくれる！」

「そ、そんなあ……」

「心配するな、貴様のようなドアホでもわかる簡単な勝負だ」

いつの間に成敗から勝負に格上げになったのだろうか。それとも余裕の表れか。ビシッ、と竹刀の先端をツナに向ける持田の顔には何やらあまりよくない笑みが浮かんでいた。

「貴様は剣道初心者、そこで10分間に一本でもオレから取れば貴様の勝ち！ できなければオレの勝ちとする！ 賞品はもちろん

笹川京子だ！！」

堂々と人を賞品にするといい切りやがりましたよ、この男は。

そんな感じの唾然とした空気が道場を流れるが、持田はお構いなしで話を進めていく。

「しよ、賞品!?!」

「最低の男ね」

「何なんだろーねえ…」

周りで見ていた野次馬はもちろん、話のタネにされた京子は明らかにムツとしている。桃尻もなんか、なんとも言えない気持ちだ。

しかしだ。

「む? 沢田は?」

「トイレに行きたいというので行かせました」

ツナがそれを受けるかどうかはまた別問題である。

「逃げたな…あいつトイレ逃走多^{エステープ}いから…」

「間違いない」

「つたく、ダメツナはよー」

やはりか、何となく予想はしていたが、このほうがよかったかもしれない。

あの持田を顔を見るになにか企んでいるのは確定だし、まともになってもツナは勝てない。無駄に怪我が増えるだけだ。

「これで不戦勝だ!! 京子はオレのモノ!」

そして持田は持田で何やら高笑いしながらそんな事を叫んでいるし、おかげで周りの評価は駄々下がりだ。

「……………ああ、そういえば」

今まで忘れていたが、リボンも今学校にいるらしい。具体的にどこで見ているのかはわからないが、今の状態も見られている可能性がある。

(つな、来るんだろーか)

来ない方がいいとは思ったし、今までのツナなら絶対に来たりはしないと思う。だけど、今はリボンがいる。リボンが言う死ぬ気弾なら、あるいはありえるかも。

その時。

「……………うおおおおおおー!!」

何やら聞いたことのある声で聞いたことのない雄叫び。次の瞬間ズバンツ！と道場の扉が開け放たれ、

「いざ！ 勝負ー!!」

と何故かパンツ一丁のツナが。やたら荒々しい。額に灯る炎は死ぬ気弾の効果だろうか。

「だから…何でパンツ一丁ー!？」

桃凧の叫びはまっすぐ持田に向かつて走るツナの叫びと周りの野次馬の歓声で聞こえることはなかったのだった。

用意された防具も竹刀も無視して一直線に走るツナ。それを嘲りながら持田が竹刀を振りおろす。

普通ならここで打ちのめされて終わる所。しかし桃凧はそう思わない。

何故ならば。

「つなだから大丈夫」

かなりの勢いで振り下ろされた竹刀がツナの顔面に激突する。しかし止まらない。そのまま竹刀を押し返し、走ってきた勢いで頭突きをぶちかました。ゴッ！ と小気味いい音が響き、ツナの頭と持田の頭に挟まれていた竹刀が砕け散る。

後ろにのけぞり、そのまま床に倒れ伏す持田、ツナはそのまま飛び上がると持田の上に^の押し掛かる。

「マウントポジション！？」

「何をやる気だ！？」

騒ぐ観衆、それにかまわずツナは片手を手刀の形にして高く掲げる。面を取る気か。

しかし、聞こえたのは手刀を振り下ろす音ではなく、ベリッ！ と何かをひき剥がすような音。そしてツナの手元にはごっそりと抜

けた持田の髪の毛。

「100本、取ったあああ!!」

静寂。そして

「考えたなツナの奴!」

「確かに何を『一本』取るかは言ってなかったもんなー!!」

どっ、と一休ばりのとんちを披露したツナに観衆が沸きあがる。ぐい、とツナが審判に握りしめた髪の毛を突き出し判定を迫ったが、当の審判はツナのあまりの勢いに怯えていて話にならない。

「ちつくしょーっ!! うおおおおお!!」

ブチブチブチッ! とツナが持田の残りの髪の毛をむしり取る。やってる事もあれだが、その般若のような表情も相まってものすごく怖い。

「こ、こえー…」

「あれ本当にツナかよ…」

いつもとはあまりにも違いすぎるツナに観衆が怯えているが、桃尻は別段驚くことはなかった。ツナはツナ、確かに違うが、あれもいつものツナとどこか似ている所がある。どこと言われると少し説明できないが、まあいわゆる、双子特有のカン、というやつだ。

「全部本」

「しょ、勝者沢田!!」

完全に怯えきった審判が旗を上げると同時に桃凧は駆けだす。そのままツナに向かって、ダーク。

「つな!!」

「!! え、わっ!!」

「つなの勝ちっ!!」

どうやら死ぬ気モードが解けたらしいツナが少し驚いた顔を浮かべるが、桃凧は構わず満面の笑みで抱きつく。

「スゲー!! 勝ちやがった!!」

その後桃凧に後押しされるように周りの野次馬が一気にツナの元へと駆けだす。

今まで隅にいたツナが、一番中心にいる。

「めっちゃくちゃだけどいかしてたぜ!!」

「何かスカッとしちゃった!!」

「見直したぜ!!!!」

何が起こったかよくわからない様子ツナに、桃凧はいつの間にか持ってきた救急箱で手早く怪我を治療し始める。これだけ混乱し

てれば消毒しても嫌がられないだろう。

「あの…ツナ君」

「うえ!？」

「手当て終わりー、つてきよーこちゃん…」

ああ、そういえば忘れていたが、ツナは昨日京子に告白していたのだったか。そこら辺ははつきりさせた方がいいだろう、まあもつとも。

「昨日は怖くなって逃げ出しちゃってゴメンね…」

「えっ、いや…えと、あの…」

あの様子だったらそんなに心配する必要もないか。

「……………ありがとうー、せんせー」

桃凧はどこにいるかはわからないリボンに向けて、そつと感謝の言葉を述べた。

本当に、人間死ぬ気になったら何でもできるんだなあ…。

第一話 後編「晴れ・今日はつなに家庭教師が出来ました。」（後書き）

第一話完成しました！。次はたぶんいきなり飛んで獄寺君の回だと思えます。

第二話 「受動喫煙は体に悪いです」(前書き)

原作沿い！。

5月27日 題材にした回の題名を追加

『標的3 獄寺隼人』

第二話 「受動喫煙は体に悪いです」

月 日

せんせーが来てから色々ありました。

つなは前よりもいろんな人に頼られるようになってうれしそうでした。この間はバレーの試合に助っ人参加しましたが、前半はいつも道理にダメだったけど、後半はなんか顔つきが変わっていて、ちよっとかっこよかったです。

そういえば、変わったと言ったらきょーやもちよっただけ変わってたかもしれません。前みたいに書類のお手伝いしても嫌がらなくなりましたし。むしろ向こうから手伝ってと言われるようになりました。というか無理やり手伝わされました。…手伝ってる時になんか嬉しそうだった理由は、多分一生わからないと思います。

毎日楽しくて、嬉しいです。これからももっと楽しくなるのかな？

第二話 「受動喫煙は体に悪いです」

「イタリアに留学していた、転入生の獄寺隼人君だ」

そう言った先生の隣に立っていたのは銀髪に鋭い目つき、着崩した服に首から下げられたシルバーアクセ。桃風の目線ではあまり近寄りたくない人種に見えた。

「ちょ…かつこよくない？」

「帰国子女よ…！」

しかし周りの女子はそうは思っていないらしく、むしろ人気がある。まあ確かに、帰国子女、少し悪そうな雰囲気、しかも転入生、と女子の人気が出そうな条件はそろい踏みだ。反対に男子にはあまり好かれそうな感じはしないが。

ちらり、と隣のツナを見るとこれまた面白くなさそうな顔、視線の先をみれば何処となくニコニコして見える（あくまでツナ目線の）京子ちゃん。ははあなるほど、嫉妬ですか。

密かにニヤニヤしている桃風だが、ふと視線を感じ取った。視線は実際には自分に向けられたものではないが、自分の近くの…すなわち、ツナに向けられた視線。

「獄寺君の席はあその…獄寺君？」

先生の言葉を無視してズンズンと進む獄寺、その先にいたのはツナ。何が起きてるかわからないうちに、ガンッ！と獄寺がツナの机に思いっきり蹴りを入れた。

「うわっ」

「でっ！」

いきなりの事態に驚く桃風と、跳ね上がった机を慌てて抑えるツナ。

「ツナの知り合いか？」

「し、知らないよ…！」

「私も記憶にないー」

「ありゃ絶対不良だよな…」

ひそひそ。

「でもそこがいい…」

「怖い所がシビレるのよね〜」

「ファンクラブ結成設定だわね…」

ぼわわわ〜ん。

男子と女子でここまでの違い、これほどまでに評価が分かれる人間も珍しいのではないだろうか。ちなみに桃風の評価は少し男子寄り、かつこいとは思っけど、やっぱりちょっと怖いよね。

ふと、自分の方にも感じる視線、そちらを見たらやはり獄寺が。感覚的に、睨むとかいう類のあまり良いものではなさそうだが。

「ん〜…」

にこり、と視線に笑顔で返してみたら、かなりびっくりした表情をして目をそらされた。そんなに意外だったのだろうか。

(…確かに怖いけど、そこまで悪い人もなさそうなんだけどな)

「あ〜もう、なんなんだよあの転入生〜！」

「確かにちょっと怖いよね」

「ちよつとどこの話じゃないよ!」

時間は昼休み。桃風とツナとの話題にあがっていたのは今日やってきた転入生だった。

「あーゆるりついてけないよね〜」

「うーん、でもそんなに悪い人でもなさわぶっ!」

ツナと話していたため前を見ておらず、誰かに思いっきりぶつかってしまった。

「おー、いつてー。骨折しちまったかも」

そして目の前には悪名高い事で有名な3年の不良が。ほけーっとしている桃凧をよそにツナの顔が真っ青になった。

「い、ごめんなさいごめんなさい！ ほ、ほら桃凧行くよー！」

「え、あ、うん……」

そのまま腕を引かれ連れて行かれ、校舎の外辺りに行った所でようやく一息つく事が出来た。

「あー、びっくりした……」

「うん、私もちよっと油断してた」

冷や汗を流すツナに、少しだけ慌てている桃凧。そこに、

「目に余るやわさだぜ」

「！ き、君は転入生の……！」

いつの間にかいたのか、ツナたちに背を向けて立っていたのは今日来たばかりの転入生。ツナが思い出したのは今日の朝の一幕、無言で自分の机に蹴りを入れて去って行ったあの理不尽。

「あ、そ、それじゃこれで…」

君子危うきに近寄らず、そんな昔の言葉の通りに離れようとしたツナ。しかし、相手はそれを許さなかった。

「お前みたいなカスを10代目にしちまったらボンゴレファミリーも終わりだな」

「え、え？　なんでファミリーの事を…」

「オレはお前を認めねえ、10代目にふさわしいのはこの俺だ」

「な!？」

「? ……」

10代目、ボンゴレ、ファミリー。この言葉が表すことはすなわち。

「……もしかして、転入生さんもボンゴレファミリー？」

「は!？」

「……フン」

混乱状態で頭がうまく回ってないツナはともかく、桃凧はそれなりに冷静だ。おそらく、この転入生はツナに挑戦するためにここにやってきたのだろう。理由？　それはツナがボンゴレ十代目候補だからだ。

ツナはまだまだ中学生、しかもいくら初代の血を引いているからとはいえ、今までマフィアなどとは全くと言っていいほど縁がなかったのだ。

そしてボンゴレは大きい組織なのだろう。当然、何の取り柄もない極東の少年をよく思わない人物もいるわけで。

目の前にいる少年は、その典型で、しかも行動派だったというだけだろう。

「とにかく　目障りだ、ここで果てる」

そして少年が懐から取り出したのは、細長くて茶色い、導火線がついたもの。いわゆる、ダイナマイト。

少年は自らが啜^{くわ}える煙草に導火線を近づけ、着火。まるで漫画のようにバチバチと導火線が焼き切れる。

「あばよ」

ポイ、と。まるでゴミ箱にゴミを捨てるような簡単な動きでダイナマイトが放られた。だが放られた桃尻達の方ではたまったもんじやない。

「うわ！　ひ、わあああああ！」

「……………っ！」

刹那の瞬間。突如駆け抜けた一発の弾丸が正確に導火線を引きち

きる。

「…………チツ」

「ちゃおっす」

いきなりの展開に少年は舌打ち。ツナは尻もち、桃風は棒立ち。

そして駆け抜けた銃弾の発射地点を見れば、そこにいたのはやはりリリボン。もつとも、桃風の知る内で銃を持っている人物などリボンしかない。

「思ったより早かったな、獄寺隼人」

「ええ！？ 知り合いなの？」

「やっぱりマフィアの人ー？」

「おう、オレがイタリアから呼んだファミリーの一員だ。オレも会うのは初めてだけだな」

しかし、なぜリボンは出会った瞬間命を狙ってくるような人物を呼んだのだろうか…。思索を深める桃風。しかし情報が全くと言って無い以上、考えても仕方がない。すぐ思索に沈むのは桃風のいい点でもあり、悪い点でもある。

「沢田を殺れば俺が10代目内定だというのは本当だろうな」

「はあ！？ 何言ってる…！」

「ああ本当だぞ、んじゃ、殺し再開な」

話を聞く限り本当に物騒な人物のようだ。ますますもってわからない。

「オレを裏切るのか？ リボーン！！ 今までののは全部ウソだったのかよ！？」

「ちがうぞ。戦えて言ってるんだ」

チャキ、トリボーンが銃をツナに向ける。

なるほど、つまりリボーンがやりたいことはこの平和な日本にあえて面倒事呼びこむことによるツナのステップアップということか。

さて、現実逃避はこれくらいにして、まずは自分にできる事を探そう。

とりあえず、心身の確保。ツナと一緒にいればツナが逃げられる場面でも足手まといになる危険性がある。私はツナより体力ないし。

そのうえでやれることは。

「……、よし、消火活動」

「待ちな」

「うわぁ!?!」

死ぬ気弾を撃たれるのも嫌だし、マフィアと戦うのも嫌だ。そんな考えで逃げだしたツナの前に、突如転校生が現れる。

懐から取り出した煙草を全本啜え、ライターで火をつける。そしてさらに取り出した大量のダイナマイト（器用に指の間に挟んである）を煙草に近づけて着火する。ここまでの所要時間、およそ数秒。

「なぁっ!?!」

「獄寺隼人は体の至る所にダイナマイトを隠し持った人間爆撃機だ、っていう話だぞ。又の名を、『スモークン・ボム 隼人』」

「そ、そんなのなおさら…! 冗談じゃないよ!?!」

転校生の目の前で急カーブで直角に曲がるツナ。とにかく逃げないと、死ぬのは嫌だ。

「果てる」

「うわぁ っ!」

しかし、動かした手が霞かすむ勢いで転校生がダイナマイトを投げる。ゆっくりと宙を舞うダイナマイトの動きはやけに遅く見えて、直後

ドドンッ!?!

ツナのすぐ後ろで爆発したダイナマイト。爆風によってツナの体が煽られ、ふわりと足が宙に浮く。なんとかバランスを取って着地したツナ。だがその後もさらに追撃は続く。

「ひゃあ！」

足元で爆発したダイナマイトをジャンプしてよける。これを行っている時点で相当体力あるのではないのだろうか、とにかく逃げる、逃げる。

そして行きついた先、目の前にあるのは行き止まり。そして後ろにいるのは転校生。

一言で言つと、大ピンチ。

「終わりだ」

「！！ ぎゃああああ！？」

バツ！ とダイナマイトがばら撒かれる。

そしてリボーンは銃を手に一言。

「死ぬ気で戦え」

リボーンの撃った弾がツナの脳天に突き刺さる、直後、ツナが凄まじい勢いで起き上がった。

「^{リ・ボーン}復活！！ 死ぬ気で消火活動！！ 消す！！」

「！ しまっ！！」

そのため、転校生が持っていたダイナマイトが一つ落ちたことによつて一気に手元が狂う。ボロボロと足元に落ちていくダイナマイト。それを見ながら転校生が冷静に心の中で一言。

ジ・エンド・オブ・俺：

だが、

「消す！！」

バシッ！ とツナが地面に落ちたダイナマイトをつかみ取る。死ぬ気モードのツナのやる事は単純、死ぬ気で消火活動だけをやっていく。

「消す！ 消す！ 消す！ 消す！ 消す！ 消す！ 消す！」

それを唾然としながら見る転校生。

つい先ほどまで自分の事を殺そうとしていた相手を何のためらいもなく助ける、その心意気。彼はそれを心、いや魂で感じた。

「…！ はあ、何とか助かった…」

彼の眼にはツナは暗にこう言っているように見えた。

敵？ そんなの関係ねえ、これから仲間になればいいじゃねえか、と…。

そう感じた彼のやることはただ一つ。地に座り込み、両手をついて、

「御身逸れました！ 貴方こそボスにふさわしい！！」

「!?!」

そしてこれに一番驚いたのはツナ、怖い、とてつもなく怖い。何が怖いって、今までむすつとした顔しか見せていなかった転校生がいきなり満面の笑みで土下座なんてしている所が特に。

「……おや、遅かった」

「って、桃尻!? 今までどこ行ってたんだよ!!」

「救急箱と水を取りに、つなは…大丈夫そうだね」

桃尻の手にあるのはいつも持っていた救急箱とバケツ一杯の水。性別は違うがやはり双子と言ったところか、やり方こそ違うが、根本的な所は変わってない。

「むー、せつかく持ってきたのに骨折り損と言ったところか…。……ん?」

そこで転校生を見た桃尻。とててて、と歩み寄り。とりあえず周りに散らばる煙草をポイポイバケツの中に投げ入れて一言。

「あまり吸い過ぎるのもよくないよ。後、携帯灰皿は持つこと、これは最低限のマナー」

ずがぴしゃーん！ とその時、転校生に雷撃走る。なんと、この双子。

敵だった自分の事を助けた拳句に、体の心配までしてくれている……？

「……………一生ついてきますー！！ 10代目！ 桃凧姫さんー！」

「「え…？」」

何やら感極まり過ぎて思考回路が明後日どころか夢幻の宇宙の彼方へ光の速度で時間退行をしながらぶっ飛んでいる転校生に、若干引き気味の双子。

「負けた奴が勝った奴の下につくのがファミリーの掟だ」

「え、え、！？」

そしていつの間にか近くにいたりポーン、本当に気配がない。その後も転校生の独白は続く。

「オレは最初から10代目ボスになるうだなんて大それたこと考えていません。ただ、10代目がオレと同一年の日本人だと知ってどーしても実力を試してみたかったんです……。でも、あなた方はオレの想像を超えていた！ オレのために身を挺してくれたあなたにオレの命預けますー！！」

つまり、簡単な話。マフィアというのは信頼関係が大事。そして

マフィアのボスになるということは、自分の命を預けるに足る人物が採点するという事。そしてツナはそれに見事合格した、と。

「そんなっ…困るって命とか…。ふ、普通にクラスメイトでいいんじゃないかな？」

「そーはいきません　！」

(こ、怖くて言い返せない…、っ…か何なのこの状況…!?)

混乱するツナに対してリボーンは無言を言わせぬ一言。

「獄寺が部下になったのはおまえの力だぞ。よくやったな、ツナ」

本当に、本当に数少ないリボーンの褒め言葉。

「な、何言ってるんだよ!」

「ん…では、はやと、と呼びます」

「はい!　どうぞなんなりと!!　桃尻姫さん!!」

うるたえているツナをよそに何故か親交を深めている獄寺と桃尻。そしてそれを遮る、

「ありゃりゃサボっちゃってるよこいつら」

「こりゃお仕置きが必要だなあー?」

「サボっていいのは3年からだぜ」

「前歯何本折ってほしくい？」

先程の三年の不良。

「や、ヤバイよ…！」

「うん、別の意味で」

「え？」

「オレに任せてください」

スツ、と目が据わる獄寺。そしてその手には

「消してやらー…！」

「ちよっ！ 待ってよ獄寺君！！ ダイナマイトはダメだって！」

つな、初めてのファミリーゲット？ ちなみに、3年は黒焦げになりました。

おまけ

「はやとー、できれば姫はつけないで」

「何ですか？ 桃風姫さん」

「……だって自分の名前に姫があるのってなんか変な気分」

「そんなことないっすよ！！ 姫なんてまさにふさわしいじゃないですか」

「いや……でもできれば呼ばないで。命令です」

「……！ 了解しましたー！！」

第二話 「受動喫煙は体に悪いです」（後書き）

桃風ちゃんは自分の名前に少しコンプレックスを持っているようです。

ちなみに、桃風ちゃんの名前をどうやって決めたかは、ツナたちの名前の元ネタである徳川の家系には、女の子には必ずと言っていいほど「姫」がついてたので。

桃風は数字にすると「17」なので。やはり数字は欠かせないかなー、と思いついて。

第三話 「ねんぢにはデーピングがいらしいです。」（前書き）

5月27日 題材にした回の題名を追加

『標的5 山本武』

第三話 「なんざにはデーピングがいらしいです。」

月×日

はやとが来てから、つなは少し困ってるみたいでした。

この間は理科のテストが返されたのですが、そこでつなはまさかの20点台を取って先生に嫌がらせを受けていました。

その後やって来たはやとはなんと全教科オール100。もう笑うしかありません。私の点数？ そんなものどうだっていいじゃないですか。

あと、せんせーが言っていました、死ぬ気弾は色々使い道があるようです。詳しくは面倒なので書きませんが。

それとせんせーがいつもつれていたカメレオンは形状記憶カメレオンらしく、自分のサイズで何にでもなれるそうです。

この間はつながグラウンドを真つ二つにしていました。すごい。

しかし、今日の体育は野球です。これでもかというほど憂鬱ですよ…。

第三話 「ねんざにはテーピングがいらいしいです。」

「桃凧ー！ そっち行ったよー！」

「ちよ…！ 無茶言わないで……！！！」

ただいま体育の野球の時間。桃凧の今日一番の憂鬱イベントだ。

体力のない桃凧にとって広範囲を走り回る野球はサッカーと並んでの鬼門。数十分やったただけだが、もうバテバテである。

そして、そんな状況に追い打ちをかけるように自分の所に飛んでくるボール。もうどうしようと。

しかし期待されているのは事実なので頑張るしかない。疲れた体に鞭を打ってさらに動く。

「ていやあー！」

ズザー！ とスライディングをしてまで手を届かせる。もうもうと立つ土煙。そして結果は。

「と、取れた…！」

これで相手は2アウト、あと一回である。

玉を取れたということよりも、誰かの役に立てた感動に打ち震える桃凧。しかしただ一つの問題が。

「桃凧ちゃん大丈夫？」

「……………どうしよう。足、くじいたかも…」

先程から鈍い痛みが足首を中心に広がっていて、全く動かない。
捻挫ねんそだろうか。

「じゃああつちに行って休む？ 肩貸そうか？」

「いや、自分でいくよ。大丈夫だから」

そう言う桃凧だが、どう見ても強がりにはしか見えなかった。

しかし気合と根性でどうにか立ち上がろうとして、その時。

「おー、大丈夫か？」

「え、うわっ!?!」

ひょいつ、といとも簡単に桃凧の体が持ち上がる。そして誰かに抱えられてる感触。いきなり自分の目線が高くなって、いわゆる、肩車。

「オレが連れてってやるのか？」

「や、やまもと……」

肩車の犯人は山本武。やまもとたけし高身長、たぐいまれな運動センス、と桃風とは正反対な人物だ。気さくでさわやかな性格な為、クラスの皆からの信頼も厚い。女子人気もあり。実際、先程から「桃風ちゃん羨ましいなー」などという声が聞こえている。

「あー、ごめん……」

「いーって事よ。それに桃風は妹みてーなもんだしな」

「……」

桃風もこれでも思春期真っ盛りの少女なのだが、そこら辺を分かっているのだろうか。と言っても、山本のそれは皮肉でも何でもなく100%善意からの言葉、なんか怒るのも微妙になってきた。

「そついやさ、最近ツナすげーよな」

「む、そつ？」

そついった桃風の視線の先にはボールを探しにあたふたと慌てるツナ。あれを見て言っていたとしたら、本当に疑問に思う。

「んー、なんつーかさ最近あいつすげーじゃん。剣道でもバレーでもさ、オレあいつに赤丸チエックしてんだぜ」

「へー……」

「いや、お前も人ごとじゃねーぞ」

「はい？」

山本を…というより肩車されているため実際には山本の後頭部を見ながら、桃凧は首をかしげる。

「お前さ、ツナがすげー事やってるときにはいつも隣でフォローしてんじゃん？ あれってさ、実際にはやるつとするとすごい難しいことだと思っぜ」

「…そう、なのかな」

「そうそう」

気楽に笑う山本を見ているとどうしてもそうとは思えないのだが、とりあえず頷いておくことにした。

「おっし、とうちゃーく」

「あ、ありがとう」

「んじゃーな、あまりはしゃぎすぎんなよー？」

笑いながら男子の方に戻っていく山本、どうやら自分の番が来ていたらしい。それを置いて自分を運んでくれたのだろうか。だとしたら本当にお人好しだ。

でも、

「悪い気は……しないかも」

そして、遠くからその様子を見ていたリポーンは

「山本。奴の運動能力と人望はファミリーに必要なだな」

「おめーのせいだぞダメツナ!!」

「だからチームに入れなくなかったんだ!」

「トンボがけ一人でやれよ!」

そして体育の終わり。やはりツナを入れたチームは負けてしまった。ツナに直接の原因があるかどうかは不明だが、負けてしまったのは事実。

そしてグラウンド。この間の体育館の比ではない。木枯らし吹くグラウンドにツナ一人。

(……………、帰ろっかな)

思わずそう思っても仕方ないだろう。だがしかし、いつもはそっぽを向いたままの運命は、今日はツナに寛容だった。

「助っ人とーじょーっ」

「山本!？」

振り向いた先にいたのは山本、ツナにとっては初めて野球でジャンケン以外で入れてくれた人物であり、ある意味憧れの存在だ。

「あ、あの…。ゴメン、オレのせいで負けちゃって…。せつかくチームに入れてくれたのに…」

「いいっていいって気にすんなよ、たかが体育じゃねーか。頼むぜオレの注目株!」

「へ?」

自分は山本に注目されるようなことはあっただろうか。そう考えるツナに山本は笑いかけながら。

「最近お前スゲーだろ? 剣道の試合でも球技大会でもさ、オレお前に赤丸チエツクしてっから」

「えっ!?! いや…そんな…」

実際の話、ツナはあの時死ぬ気モードになっていたために自覚はしていなかったが、今までのツナの功績は周りの人間の評価を改めるには十分なものだった。

しかし、ことう手放しでほめられるとやはり照れる。しかも自分の憧れの存在にだ。何かむずがゆいものを感じているツナに山本は嘆息しながら。

「それに引き換えオレなんてバカの二つ覚えみたいに野球しかやってねーや」

「なっ、何言ってるんだよ山本はその野球がすごいじゃないか」

「んー、それがどーもうまくなくてさ」

「え?」

「ここんとこいくら練習しても打率落ちっぱなしの守備乱れっぱなし、このままじゃ野球始めて以来初のスタメン落ちだ。…ツナ、オレどつすりゃいい?」

「え…」

いわゆるスランプ、だろうか。上手く出来ない事の辛さは分かるし、できれば手助けしてあげたい。だが内容がすごすぎる、とてもダメツナにできることではない。

「なんつってなー。最近のツナ頼もしいからつい、な…」

気楽そうに笑う山本だが、やはり強がりか隠し切れてない。無理もないだろう。山本にとって野球は全てだ、それが上手くないかないとあつてはこつなるのも頷ける。

相談に乗ってあげたい。ツナは心の底からそう思った。

しかしリボーンの事は言えないし、いやそもそも二足歩行の赤ん坊が撃った銃でパワーアップしましたなんて絶対に信じてもらえない。

結局。

「やっぱ…努力…しかないんじゃないか…な…」

心の中で嘘をついたことに罪悪感を覚えるツナだが、帰ってきた返答は明るいものだった。

「だよな！ いやオレもそーじゃねーかなーって思ってたんだ。さすがツナ気が合うねえ」

「そ…そう？」

「おゝし、今日は居残ってガンガン練習すつぞーっ！」

(よっしゃ！ いいこと言っただけ！)

「…ということが今日あってさー」

「へえ…やまもとが」

なにやらご機嫌なツナと一緒にゲームをしている桃凧。ちなみに

桃風はゲームが弱い、いまも画面の中でキャラクターがぼこぼこに
されている所で、正直言つて手加減してほしいのだが。

「その山本の事だけだな」

「!! 何で知つてんだよ!？」

「何言つてんのつな、だつてせんせーだよ？」

「……なんか妙に説得力が」

『だつてリボンだから』で全てが納得できそうなのこの感じ。さ
すがは最強のヒットマン、と言つたところだろうか。

ともかく、

「おまえの部下にしろ」

「なっ!？ おまえオレのクラスメイトまでマフィアにする気がよ
!!」

「というかすでにクラスメイトにマフィアがいるけ」桃風は黙つて
て!!」「むう……」

桃風の発言をかき消しながらツナが叫ぶ。しかし、ツナの言うこ
とも頷げる。自分の友人をマフィアなんてものには巻き込みたくな
いだろう。特に山本は、

「山本は野球に燃えてるんだぞ。オレはそんな山本を友達として助
けたいの!!」

憤慨しながら再びゲームに戻るツナ。

その時、カチツとなにか金属音がしたのを、桃尻は聞き逃さなかった。

横に避けながらリボーンの方を見てみると、その手に握られたのは火炎放射機。

「ツナも燃えてみる」

「ちよっ!?! つな、避けて!」

「へ? あっづああああ!?!」

「っ、つなー!?!」

威力はちゃんと絞られていたみたいだが、黒焦げになるツナ。そしてリボーンは消火した火炎放射機を手に一言。

「燃えるの意味がちげーよ」

「オレのセリフを言うな!?!」

次の日。

「大変だ！ 山本が屋上から飛び降りようとしている！！」

『ええっ！？』

教室に入ってきた男子生徒の声でクラスが動揺に包まれた。

「山本ってうちのクラスの？」

「おいおい、あいつに限ってありえねーだろー」

「言っつていい冗談と悪い冗談があるわ」

といつてもそれは衝撃の事実に驚いたということではなく、朝からきつい冗談に思わず驚いてしまったと言ったところだろうが。

「いや本当なんだって！ あいつ昨日一人居残って野球の練習して、ムチャして腕を骨折しちまったらしいんだ」

（！ まさか…！）

ツナには思い当たるフシがあった。昨日山本に相談された時、つい勢いで『努力が一番』と答えてしまった事が。

（オレのせい…！？）

『とにかく屋上に行こうぜ！』

『おう！』

ドタバタとした音が遠ざかり、教室にはポツンとツナ一人。教室

を覗き込んだ京子がまだ残っているツナを見つけて声をかけた。

「ツナ君いこっ！」

「あ…うん！ と、トイレに行ったら行くよ…」

京子が去った後、ツナの胸に去来する気持ちは一つ。

「ど、どうしよう？！？ 桃風、どうしたら…！ って、あれ？」

混乱しながら振り向いたツナの隣、ついさっきまで一緒にいたはずの桃風の姿はどこにもない。

「一緒に行っちゃったのかな…？ それはともかく行かないと…いや、でも…」

屋上のフェンスの向こうで立ち尽くす山本に、誰も近寄れなかった。

誰もかれもが冗談だと信じていた。だが、もしもの可能性を考えるとこのまま近づくのはまずい。そう考えるのは人として自然だろう。

「おいおい冗談きついで山本ー！ そりゃやりすぎだって」

とある一人がかけた言葉に山本は光の消えた瞳で答える。

「へへっ、わりーけどそーでもねーんだ。野球の神さんに見捨てられたらオレにはなーんも残ってないんでね」

『まさか…本気!?!』

『フェンスが錆びて今にも折れそうなのに!』

ざわざわと、先程までは存在しなかった冷たい空気が広がっていきような感覚。それはこの場に集まった者達の心情そのものだろう。

そしてツナは。

「どーしよーあんなこと言わなきゃよかった…」

きっちりしつかりへタれていた。

「山本に合わせる顔が無いよっつ」

屋上の死角となる所で頭を抱えてうずくまるツナ。

自分のような人間が山本にやれる事などなかったのだろうか。それどころかこんな事になって、最悪じゃないか。

結局自分では　　。

「山本を、友達として助けたいんだろ？」

「！」

そして、そんなツナの前に現れる影が一つ。

「リボーン！」

「だったら逃げんな」

チャキ、と向けられる銃口。まさかまた。

「ちょ、タンマ！」

リボーンから距離をとる様に逃げ出す。死ぬ気弾を撃たれるのだけは死んでもいやだ。

しかし、後ろのリボーンを気にしていたため、ツナは逃げる場所を間違えていた。

山本のいる方へと。

「！ あたっ！」

「…ツナ」

「え…あ…」

人ごみにブチ当たり、揉まれて出てきた所。それは山本の目の前。

思わず青くなるツナ。それはそうだろう、今一番会いたくない人物の所に出てきてしまったのだ。うるたえるのも無理はない。

「…止めにきたならムダだぜ。おまえなら俺の気持ちがあるはずだ」

「え？」

かけられた言葉にツナは戸惑う。あの何でもできる山本が、自分と同じ所などあるはずがないのに。

「ダメツナって呼ばれてるおまえなら、何やっても上手くいかなくて死んじゃったほうがマシだって気持ちわかるだろ？」

「えっ…あの…っ。いや…、山本とオレは違うから…」

「……、さすが最近活躍目覚ましいツナ様だぜ、オレとは違って優等生ってわけだ」

「え！ ち、ちっ違うんだ！ ダメなやつだからだよ！！」

必死で否定をするツナに不思議そうな顔になる山本。ツナは、それに気づかず言葉をつづけていく。

「オレ、山本みたいに何かに一発懸命打ち込んだ事無いんだ…。「努力」とか調子のいいこと言ったけど、本当は何もしてないんだ」

そうだが、謝らなくては。自分の嘘のせいで骨折してしまった事もそうだが、何よりも友人に嘘をついてしまった事に対して。

「……昨日のはウソだったんだ……ごめん」

例えこれでもう山本に友人と見てもらえなくなっても、せめて最後は嘘偽りなく終わりたい。

「だから、オレは山本と違って死ぬほど悔しいとか、挫折して死にたいとか…。そんなすごい事思った事無くて…。むしろ死ぬときになつて後悔しちまうような情けない奴なんだ……。どーせ死ぬんだつたら死ぬ気になつてやっておけばよかつたつて、こんなことで死ぬのもつたいないなつて……」

山本は無言。

生き方、考え方、その全てが違うツナに対して、彼は一体何を思ったか。それは多分、彼にしか分からない。

「だから、おまえの気持ちは分からない…。ごめん……。じゃ！くるりと踵を返したツナはそのままダッシュ。しようとして。

「……。待てよツナ」

山本に袖を掴まれた。

しかしここで最大の誤算。それはツナがドジであつた事。

ずるう！ とツナの足元が滑る。ツナはそのままフェンスに激突。錆びていたフェンスがブチブチと音を立てて壊れた。

「！ うわあああつ！！」

「ぎゃああああー！」

そしてそのまま二人は重力に従って落下。観衆がこの先広がる光景に目を覆った。

「今こそ死ぬ気になるときだぞ」

そして、リボーンは銃口を定める。

いまだ落下している、ツナの脳天に。

ズガン！ という音と共に、ツナの頭が後ろに弾かれた。

死にながらツナが思う事は一つ。

（友達を…）

助けたい。

（山本を、助けたい…！）

「空中、復活^{リボーン}！！ 死ぬ気で、山本を助ける！！！！」

「！ ツナ！」

くるりと態勢を立て直したツナは山本の体を掴み、減速しようとする。が、止まらない。このままでは二人とも地面に叩きつけられる。

「ふはぁー、助かったー……」

「どうにかね……」

廊下にて、桃凧とツナは生き残れた喜びを噛み締めていた。

「！　そうだ山本！！　大丈夫か？」

「ああ。…ツナ！　おまえスゲーな」

「えっ？」

「おまえの言う通りだ、死ぬ気でやってみなくっちゃな」

山本の顔には先程までの陰鬱そうな表情はなく、何処となく晴ればれとした顔に。元に戻ったのだ。

「オレどーかしちまってたな。バカがふさぎこむとロクなことねー
つてな」

「山本……！！」

「桃凧もサンキューな」

「いいよ、つなとたけしのためだし」

いつの間にか桃凧の山本への呼び方が変わっていたが、気にする者はいなく、むしろ山本は嬉しそうだった。

ちなみに、桃風はある程度親しくなると呼び名が変わったりする。

「さて、まずはつな……………服を着ようか？」

「え。…………げっー！」

「あっはっは。おまえら本当におもしれーなー」

つな、初めての友人（リポーンいわくファミリー）ゲット。

第三話 「ねんざにはテーピングがいらしいです。」（後書き）

漫画を小説にするときはなぜか原作主人公を活躍させなくなる不思議。

桃風ちゃんは準主人公というか：もう一人の主人公ということで、リボーンを小説にしようとしたのも、漫画を小説化することが楽しそうだったから、というのもあります。

第四話 「小さい子は無条件で大事にするものです。」（前書き）

ちよつと短め

5月27日 題材にした回の題名を追加

『標的7 泣き虫ランボ』

第四話 「小さい子は無条件で大事にするものです。」

月 日

この前、きよーちゃんが家に遊びに来ました。なんでも、せんせーが財布を忘れて困っている所で出会ったとか。

そんで、まあ、色々あつて。きよーちゃんには本当に申し訳ない事をしました。…ごめん。

それでその時、きよーちゃんと一緒にテスト勉強をする事になったんです。せんせーに頼んでもよかったです。せんせーはつなにかかりきりな感じがしたので、頼むのやめときました。

それに、私の部屋を爆破されたくはないし。

というわけで、今日はきよーちゃんとはなちゃんの3人で勉強に行ってきます。

第四話 「小さい子は無条件で大事にするものです。」

「きょー「ちゃん、これの答えわかるー?」

「これ? んー…「ごうじゃないかな」

「ありがとうー」

「あ、桃風ちゃんこれわかる?」

「これは多分…「ごうかな」

「ありがとう」

「あんた達ほんと仲良いわねー…」

ただいまここは京子の部屋。桃風は京子とその友人である黒川花くろかわはなと共にテスト勉強の真っ最中だ。

ツナは京子と一緒に勉強できると聞いてとてもうらやましがっていたが、リポーンに捕まってしまったためあえなく不参加となった。出かける時にツナの悲鳴と爆発音が聞こえたが、あえて気にしなかった。

「やっぱり精神年齢が似てるのよあんたら」

「そーかなー?」

「否定できないかも」

そんな感じで楽しく談笑している。

『極限！！ 帰ったぞおおおおお！！！！』

ドバァン！！ ととんでもない轟音と共に家を揺るがす大絶叫。

「な、何事！？」

「と、桃風ちゃん落ち着いて」

「あー……」

何やら訳知り顔の黒川と混乱する桃風をなだめる京子。そしてそれにかまわずズンズンと近づいてくる謎の人物。

「京子ー！ 帰ったぞー！！」

そして今度は京子の部屋の扉がズバン！ と開け放たれる。

あんだけ大きい声ならわざわざここまで来なくても聞こえるだろうに。というかこの人は一体誰だ？

唾然としながら謎の人物を見上げる桃風だが、京子も黒川もこの人物が誰かわかってるらしい。

「もう！ 友達が来てるんだからいきなり入ってこないでよ！」

「む！ 京子の友人か、挨拶をしなくてはな！！」

人の話を聞いているようで聞いていない謎の人物はくるとこちらに向き直り。

「オレはボクシング部の笹川了平ささがわよへい！ 座右の銘は『極限』だ！ 京子をよろしくな！」

「え、あ、はあ……。沢田桃風姫です。以後よろしく……」

「何……！」

桃風の名前を聞いた瞬間、クワツ！ と了平の目が見開かれた。

「沢田とはあの沢田か……！」

「あ、『あの』……？ えーと……双子の兄は沢田綱吉です……？」

「……！ やはり……！」

そのままの勢いでガシィ！ と桃風の肩を掴む了平。

「よし！ 沢田共々ボクシング部に入れ！！ 桃風……！」

「はい……？」

正直言っ、ついていけない。

なぜいきなりボクシング部？ どうやら話を聞く限りボクシング部に所属しているらしき了平。ツナをボクシング部に入りたいのは分かった。しかしなぜ自分も、そこがまったくわからない。

「な、何故私も…」

「うむ！ 良い質問だ」

桃凧の肩を掴んだまま、解答を始める了平。というかいい加減痛くなってきたのだが。

「知っての通り、沢田は100年に一人の逸材だ」

（いや、多分違うと思う）

「だからこそオレは近々沢田にボクシング部への勧誘をしようと思っっている」

（その話は初耳だ）

「そして！ 何よりも！！」

グオオ！ と声のポリリウムを一段階上げる了平。至近距離で聞いている桃凧の鼓膜は壊れんばかりだ。

「いいボクサーを育成するには優秀なマネージャーが必要不可欠！
！そして沢田のコンディションを完璧にできるのは桃凧、お前だけだああああ！！」

「あ、あの！ ゆ、ゆゆゆ揺らさないでええええええ！」

ノリに乗ったらしき了平のテンションと共に首がもげるのではな
いかというほどガツクンガツクン揺さぶられる桃凧。死ぬ、これは
本当に死ぬ。

「お兄ちゃんっいたら！！ いい加減にしてよ！」

「む……」

そろそろお花畑が見えてきた桃凧に突如聞こえた救いの声。その声を聞いて了平の桃凧を揺さぶる手がぴたりと止まる。助かった。京子、本当にありがとう。

「ちょっと、大丈夫？」

「あー…うん…。ちょっと、おじいちゃんがあっちに…」

「本当に大丈夫!？」

先程から黒川に意識確認をされているが、正直目の前がぼやけて何も見えない。

「あれほど桃凧ちゃんをボクシングに誘うのはやめてって言ったのに！」

「いやしかし例え京子の頼みでもこのオレの熱いボクシングへの情熱を止めることはできん！」

どうやら了平はそのまま京子のお説教コースまっしぐらのようですね。なんというか、力関係がわかりやすい兄妹だなと思う。うちの家は良くも悪くも半々くらいだし。

「京子ー。電話が来たわよー」

階下からの声。あれは確か京子ちゃんのお母さんの声か。

「大体お兄ちゃんはね……え？ 誰だろ？」

それを聞いた京子はトントンと下に降りていく。そして残された
桃風達。

「ではな！ 入部の話、考えておいてくれ！！」

そして了平は自分の部屋に戻ったらしい。去り際に置き台詞を忘
れずに。

「はあ〜。京子の家にくるとこれが毎回あるのよね〜」

「そうなんだ…」

だから黒川は京子の家で勉強すると聞いた時に渋ってたのか、と
桃風はいまだよく回らない頭でぼんやりと思う。いや、物理的な意
味ではよく回っていたが。

「桃風ちゃん、ツナ君から電話だよー」

「え？」

ツナが自分に？ 一体何があったのか。もしかしたらリボーンの
指導が厳しすぎて息抜きに電話してきたのだろうか、そんなことリ
ボーンが許すとも思えないが。

そんな疑問を抱きながら受話器を取る。

「もしもし？」

『ああ、桃風。ちょっと悪いんだけどさ　すぐ帰ってこれない？』

「なんでー？」

『いやー、いろいろあってさ』『ぐっぴゃああああー！』『あーコラまた
ー！』

ブツン！

……、

…、えーと？

「桃風ちゃん？　ツナ君なんて言ってたの？」

「んー、なんか呼ばれたから帰る事になった？」

「そうなんだ…、ねえ、今度はどこかに遊びに行かない？」

「……いいの？」

「いいよー」

「…ありがとう」

「……ふむ」

今の桃風の状態を一言で表わそう。

困惑。これ以外にない。

「どーもー、過去の桃風さん」

「……誰ですか？」

目の前にいるのはなんか、伊達男って感じの男性。年齢的に、桃風と同じか少し上というくらいだろう。

「オレの名前はランボです。この時代だとまだまだ子供ですが」

「この時代？」

「それ」

そういつてランボが指さしたのは普通のバズーカ。いや、バズーカなんてものが普通に転がっている時点で普通ではないか。

「それは『10年バズーカ』と言いまして、それを自分に撃つと10年後の自分と5分間だけ入れ替わる事が出来るんですよ」

「へー……」

なんでそんなものがあるのか、なんて事はつつこまない、つつこまないよ。

「……そろそろ時間のようですね。では桃凧さん、また」

「あーうん、またね」

別れの挨拶をした途端、ポムンという音と共につい先ほどまでそこに佇んでいたランボの姿が消える。

いや違う、消えたのではない。

「ほえ…？」

声は足元。視線を向けると牛っぽい着ぐるみを着た5歳くらいの男の子が。これが今のランボなのだろうか。

ランボはしばらくキョロキョロとあたりを見回して、桃凧に気づいた。

「！ おまえ誰？」

「桃凧だよ、君は？」

もうすでに10年後のランボから聞いていたが、自己紹介と言うのは小さな子にはかなり重要なプロセスだ。これを無視することはできない。

「オレっちランボさんだよ！ 好物はブドウと飴玉なランボさんだよー！」

「そうなんだ〜」

やはり、小さい子とは可愛い。普段は周りを見上げる立場の桃凧にとって、自分が見下ろす事になる存在と言つのはとても新鮮だ。

「あ、桃凧!」

「ん?」

玄関にずっといたために気づかなかつたが、どうやらツナがランポの子守こもひをしていたらしい。所々ボロボロになっている姿はとてもシユールだ。

「つな、ただいま」

「お帰り…じゃなくて!」

「つな……」

心底落胆した、という視線をツナに向ける桃凧。ツナはツナで何故そのような視線を向けられるのかわからない。

「小さい子は大事にしなきゃだめだよ?」

「……………その小さい子がマフィアでウザくなかつたら大事にするさ……」

がくり、とツナが脱力する。

「小さい子は世界の宝だから」

沢田桃風姫。実は子供好きである。

第四話 「小さい子は無条件で大事にするものです。」（後書き）

フライングで笹川兄さんにご登場いただきました。桃凧ちゃんはま
だうまく付き合え方が解っていないようです。
ランボも初登場、子供には優しく。

第五話 「スイカの美味しい季節です。」（前書き）

なんだかどんどん短くなっていく…。

5月27日 題材にした回の題名を追加

『標的10 ポイズンクッキング?』

第五話 「スイカの美味しい季節です。」

月 日

この間はたけしの入ファミリー試験がありました。

それにたけしは見事合格。はやともたけしの事を認めたようだし、一見落着と言ったところででしょうか。

そしてつなはこの間とてつもなく綺麗なお姉さんに殺されかけていました。

何を言っているかわからないかと思われませんが、本当です。

どうやらせんせーの事が好きらしいそのお姉さん、お姉さんも殺し屋らしくつなを殺してせんせーを自由の身にしようとしていたみたいでした。愛って怖い。

どうもそのお姉さん毒殺が得意らしいです。なんか見るだけでおどろおどろしいものを作っていました。お姉さん命名「ポイズンクッキング」

調理実習でおにぎりを作りました。しかしつなに食べられました。あんにやるう。まあ、別に誰もあげる人がいなかったからいいですけど。どうせつなあげるつもりだったし。

夏ですから暑いですね。せんせーはこの間「素麺が食べたい」って言っていましたから多分今日あたり食べるんでしょうね…。

第五話 「スイカの美味しい季節です。」

「暑い……」

とある夏の日、アイスを買っていた桃凧は溶けかけていた。

「いや、夏は暑いもの…だからこれが普通…普通…」

半端な自己暗示でどうにかしようとするが、やはり暑い。太陽はまるで突き刺すような日光を送ってくる。

「うう。だって家にアイスが無かったのが悪くて…ん？」

そうやって考えていた桃凧は道の向こうに人を見つけた。

何やら猛スピードで走っていく、獄寺を。

「おー、はやとー」

「すみませんまた今度！」

声をかけた桃凧だったが、どうやら獄寺には自分の相手をする余裕はない様子。そのままどこかへと走って行ってしまった。

(…何だっただんどうか)

「あ！ 桃凧ー！」

そしてさらに向こうから走ってくるツナ。

「やつほーつなー。アイスが売り切れてたー」

「え…、いやまあそれはともかく！」

一瞬戸惑った表情をしたツナだったが、売り切れてたものは仕方がないじゃないか。

そんな風に考える桃凧にツナは問いかけた。

「獄寺君がどこに行ったかわからない？ 確かこつちだっと思ったんだけど」

「あー、なんかものすごい勢いで走って行ったー…」

「そっか、ありがと！」

桃凧の指さした方向に走っていくツナ。桃凧はそれを眺めて、

「……私も行こっかな」

どうせアイスは今ないのだ、だったらいつ帰っても似たようなものだろう。

獄寺は神社まで走ってきていたようだ。

「獄寺君……」

神社の木にもたれかかり荒い息を吐く獄寺、ビアンキを見たことからこうなってしまったみたいだが、一体何が。

「あ……あの……ごめんねせつかく持ってきてくれたスイカ……あんな事になっちゃって」

それと言うのもビアンキの事を視認した獄寺が条件反射的におもわず床に落としてしまったのだが、好意で持ってきてもらったのだ、ここは謝っておこう。いや決して怖いわけじゃない。

「……アネキとは8歳まで一緒に住んでました」

そして獄寺は語りだした。自分とビアンキ、両者に深くかわる過去を。

「……なんで、こんな、雰囲気……ゼエ、ハア」

そして少し離れた所でそれを眺める桃風。ツナと一緒に獄寺を追いかけていたために息も絶え絶え。元々ツナのペースに合わせようとしたのが間違いだっただか。

それはともかく。

「うちの城ではよく盛大なパーティーが行われたんですが、オレが6歳になった時初めて皆の前でピアノを披露する事になったんです。さらりと城に住んでいた事を告げる獄寺。もしかしたら彼はかなりのいい所のお坊ちゃんだったんだらうか。」

そんなツナたちの驚愕にも気付かず。彼は話を進めていく。

「その時、アネキが初めてオレのためにクッキーを焼いてくれたんです。それが彼女のポイズンクッキング第一号でした。…」

遠くを見ながら目を細め、たそがれる獄寺。彼は今何を思っているのだらうか。何となく予想は出来るが。

「後でわかったんですが、アネキは作る料理が全てポイズンクッキングになる才能の持ち主だったんです。」

「どーなってんのソレ!？」

ある意味、究極の料理下手。しかも暗殺に使えるほど強力なやつだ。

「もちろん当時クッキーを食べたオレは激しい目眩と吐き気に襲わ

れ、ピアノの演奏はこの世のものとは思えないものに…」

むしろそれで済んで幸運だったと思うべきか、やはり昔は毒素が少なかったのだろうか。それとも獄寺が毒に強いかどっちか。

「でもそれはほんの序章でしかありませんでした」

まだあるのか。

「そのイカレた演奏が高く評価されてしまったんです」

「「ええー…」」

「気を良くした父は発表会の数を増やし、オレはそのたびにアネキのクッキーを食べなくてはいけませんでした…」

「うわああ…」

「よく生きてたね…」

原因がわかりきっている恐怖ほど怖いものはない。しかも逃げられないとなれば、ああなっても仕方がないだろう。

「その恐怖が体に染みついて今ではアネキを見るだけで腹痛が…」

ああ何という悲劇。双子の思いはおおむね同じだった。

「うすうす感じてたけど強烈なお姉さんだね」

「ええ大嫌いです」

まあそんな思い出があれば苦手になるのはしょうがないか。仲が悪い人達を見るのはあまり好きではない桃尻だが、仲良くなれと言ったら獄寺にかわいそうだ。

「オレはアネキに近づけません。10代目…アネキをこの町から追い出してもらえないでしょうか」

「ええ！？ そ…そりやあどちらかと言えばオレもビアンキがいなの方がすごくうれいけど…でも…オレじゃあ…」

「作戦があります！」

そして獄寺は語りだした。実はビアンキにはリボンに惚れる前にメロメロだった男がいたとの事。その恋人は事故で死んでしまったらしいが、いまだにビアンキはその恋人の事が忘れられないらしい。

「そこで、その元彼とそっくりな奴を探すんです。アネキをそいつに会わせれば地の果てまでそいつを追いかけるはずです」

「またぶっ飛んだ作戦だー！？」

いくら世界には同じ顔の奴が3人はいるとは言われているが、そう簡単に見つかるのだろうか。

「これが元彼の写真です」

? 獄寺が取り出した写真。そこに映っていたのはビアンキと、

「こんな牛男見た事ある…!!」

「というより、見た目10年後らんぼじゃん」

ならランポに10年バズーカを撃ってもらえば大丈夫なのか。少しだけ簡単になった作戦にツナは安堵して、

「じゃあ、がんばれつな」

「え、桃風は手伝ってくれないの!？」

「うん、だって」

桃風は一言。

「暑いんだもん」

家に帰って数分後。誰かの叫び声とかツナの叫び声とか聞こえてきたが。クーラーの利いた部屋で惰眠をむさぼっていた桃風には届かなかった。

第五話 「スイカの美味しい季節です。」（後書き）

日常パートを書くとはどんどん短くなっていきます……。基本的に桃凧ちゃんの出番が少ないんですよ！。

感想をもらえるくらいの作品を作ることが私の夢です！

次はどうしましょうか……。日常編はざっくり飛ばしましょうかね……。

いっそのこと一話丸々桃凧ちゃんの日記とか。

第六話 「乙女心は盲目です。」（前書き）

いやーまさか一日に二度投稿することになるとは…。
あとだんだん短くなってますね…。

5月27日 題材にした回の題名を追加
『標的11 三浦ハル』

第六話 「乙女心は盲目です。」

月日

昨日、面白い女の子に会いました。

はるちゃんって名前の子です。

はるちゃん、かなり思い込みの激しい子みたいで、つなの事をリボーンを悪の道に引き込もうとしている極悪人だと思っているみたいでした。

さて、明日も学校ですがいつも通りに毎日が暑いです。それに眠くなるし…。

きょーや辺りに頼んで、応接室に居させてもらいましょうか…。

第六話 「乙女心は盲目です。」

「暑い」

「桃凧ホント体力ないから…」

朝にしては気温が高かった、とある夏の日。

「それにしても、昨日の子は本当によく解らなかつたな」

「面白い子だったよー」

ツナたちの話は自然と昨日会った女の子、三浦みづらハルにと移っていた。

「女の子に殴られるなんて初めてだよ…」

「…確かに」

傍目で見えていた桃凧も驚いたが、何より一番驚いていたのはツナだろう。女の子にグーで殴られる機会などそうそうないのだから。

そんな感じで世間話をしていた双子の耳に、不思議な音が聞こえてきた。

ガシャン、ガシャン、と何か金属的なものをこすり合わせる音。

最初は暑さの余り幻聴でも聞こえてきたのではないかと思っていたツナ達だったが、それが間違いである事に気付いた。

だって後ろにいたのは。

「おはよーございます…」

「あんた何ー!？」

何やら武将が着てそうな甲冑をまとい、片手にヘルメット、もう片方にはアイスホッケーのスティックを持ったハルだった。

「昨晚頭こぶがぐるぐるしちゃって眠れなかったハルですよ…」

「いくら眠いからってそういう恰好はどうかと思う」

「違いますよ桃風さんー。それじゃハル変な子じゃないですか」

いや十分変じゅうぶんだアンタ。

桃風は内心でそう思ったが、思うだけでは伝わらない。

「リポーンちゃんが本物の殺し屋なら、本物のマフィアのボスになるツナさんとはーってもストロングだと思っわけです」

「な!？」

「何故…」

そう言ったハルは片手に持っていたヘルメットを被った。

なるほど、どうやらヘルメットをそのままつけて歩くことは怪しいと思っくらしいの常識はあつたらしい。もっとも、いくら彼女でも

寝ぼけてなければこういう恰好はしないと思うが。

「ツナさんが強かったらリボンちゃんの言った事も信じますし、リボンちゃんの生き方に文句も言いません」

そしてステイックを構えたハル。

「お手合わせ願います！ あちよー！」

「うわっ、ちよっ、待てよ！」

変な掛け声の割にその一撃は重い。ツナは悲鳴を上げながらハルの攻撃を避けるが、重い甲冑を着ている割にはハルの動きは俊敏だ。

とりあえず攻撃が当たらないくらい遠くに移動した桃尻はこのまま人を呼ぼうかどうか考えていると。

「10代目ー！！」

人が来た。ただし、獄寺だが。

「下がってください！」

「え？」

そしてそのままダイナマイトを投擲^{くわいてき}。

そして、普通の一般人であるハルにそれをよける術はない。

「はっ、はひー！……」

ドガァン！

橋の上での爆発。衝撃によりコンクリート製の橋が少し揺れた。

そしてハルは橋の下、つまり川に落下。鉄製の甲冑を身にまとっている事を考えると、危ない。

「つな！ 助けないと！！」

「え…う、うん！ でもどーやって…」

「助けてやるぞ」

橋の欄干に立つリボン。しかし、リボンが助けるとはつまり。

「ツナ、行ってこい」

「え、」

そのまま脳天に死ぬ気弾を一発。

川に落下していくツナ。それを見ながら桃凧はポツリと思った。

(……………流されるな、服)

「ありがとうーございました…」

橋の下の河原。無事助け出されたハルは体育座りでうずくまっていた。そのハルに向けて獄寺が話しかける。

「ったく、反省してんのか？ 10代目にもしもの事があつたら、おめーこの世に存在しねーんだからな」

ハルは無言。しかし、よく見てみると細い肩が細かく揺れていた。

「……プ」

ついに耐えきれなくなったように口から笑いが漏れ出る。そのま
ま顔を上げたハルは満面の笑みで。

「『死ぬ気でハルを救う！』『オレに掴まれー！』…そんなクサイ
セリフ、テレビの中だけだと思っていました」

（反省してねえ！）

愕然とするツナに何やら夢見る乙女のような視線を向けるハル。

「すごく……ステキでしたよ。リボンちゃんの代わりに飛び込んでくれた10・代・目（はあと）」

「な!?!」

「……っーん」

どうやらハルはツナに惚れてしまった模様。これはあれだろうか、

危機的状況に陥ると恐怖のドキドキと恋を勘違いするという。

「……吊り橋効果？」

なのだろうか。それともピンチを助けてくれたツナに惚れたのだからか、どちらもありえそうな感じがする。

「ハルはツナさんに惚れた模様です……」

「んー！？ で、でも確かりボーンの事が好きなんだろう？」

「今はツナさんにギュツとしてもらいたい気分です！」

「えー！？」

その後はまあ、追いかけるハルと、必死で逃げるツナの鬼ごっこが始まったという事で。とりあえず学校はもう遅刻だろうね。

「つな、ファイト」

「何を！？」

第六話 「乙女心は盲目です。」（後書き）

この回、めっちゃくちや迷いました。飛ばすかどうか。

なので半分飛ばしてみました！。

次は夏休みです。桃凧ちゃんに補習はないので、オリジナルで話を
数話書こうかなーと思ってます。

第七話 「優雅で気品があふれる、そんな人に私はなりたいです。」（前書き）

こんなに一気に投稿するの初めてかも。夏休みのある日のお話。

5月27日 題材にした回の題名を追加

『オリジナル』

第七話 「優雅で気品があふれる、そんな人に私はなりたいです。」

月 日

夏休みに入りました。

つなはテストの成績が悪かったせいで毎日が補習。夏休みに入つたのにちつとも夏休みな感じがしないよ！ と嘆いてました。

たけしも一緒だったみたいで、一緒にプリントを片づけてるみたいです。

私は夏休み満喫してます。この間はきょーこちゃんと一緒に遊びに行きました。

今日のはるといっしょにケーキ屋『ラ・ナミモリーヌ』に行つてきます。

第七話 「優雅で気品があふれる、そんな人に私はなりたいです。」

突然だが。

夏は遊ぶためにあるもの、というのはほぼ全国の中学生の意見として間違っではないだろう。

「桃風さんはどんなケーキが好きなんですかー？」

「あそこのケーキは何でも美味しいけど、やっぱりピーチタルトが好きかもー」

「ああ、美味しいですよー。クリームの甘さが控えめで桃の甘さに見事にマッチしてるんですよー!!」

女同士でキャツキャとケーキ談義しながらの散歩。ツナはあまりケーキが好きというわけではないし、正直言っただけ楽しい。

その時。

「あの……ちょっといいです？」

トントン、と後ろから肩を叩かれた。

「…失礼ですけど、この場所わかります？」

サラサラとした金髪のプロンドを肩より少し下まで伸ばし、頭にはつばの広い真っ白な帽子。着ているものはふんわりとしたワンピース。手には地図と日傘。とどめに真っ白な肌と茶色い瞳。

一見すると避暑地のお嬢様のような、そんな完全無欠の美女がそこにいた。

「…あの？」

「…。あ、えーと、どこのことですか？」

「ここなんです」

あまりの美しさに呆然としていた桃凧とハルだったが、お嬢様（？）の呼びかけにすぐ我に返る。

そしてお嬢様（？）が白い指で指した場所には、

『ラ・ナミモリーヌ』

の文字が。

「はひ、お姉さんもここに行くんですか？」

「まあ、では貴女達も？」

「はいー。案内しましょうか？」

お嬢様（？）は少しだけ迷った後、やがてにっこり微笑みながら。

「では、お願いしますね」

「はひー、リータさんはイタリアからやってきたのですか」

「ええ、ちよつと旅行に」

お嬢様の名前はリータと言った。なぜか、名字は明かしてくれなかったけど。

リータの話では、彼女には弟がいるらしい。なんでも、ちよつと前までダメダメだったんだとか。

「うちと少し似てますね」

「あら、そうなの？」

もつとも、こちらは弟ではなく兄だが。

女三人寄れば姦かしましい、とはよく言ったもので。話題は尽きることはなく、いつの間にかケーキ屋の目の前に来ていた。

「美味しそうです！」

「迷うねー……」

「あらあら、これは壮観ねえ」

店内のショーケースにずらりと並ぶケーキ。どれもこれもが自分の主張で忙しそうなお逸品たちだ。

「りーたさんは、どれがいいのですか？」

「そうねえ…あのショートケーキとかいいかもしれないわ」

「ハルはこれに決めましたっ！」

店内にはいつもより男性客が多い気がする。もしかしなくてもりータを見るためなのだろうか。実際、歩いているときも彼女は注目を集めまくっていた。もっとも、彼女はそれに気づいていなかったが。

ふと、ハルが桃凧の買ったケーキを見て不思議そうな声を上げる。

「はひ？ 桃凧さん、ピーチタルトの他にも買ってるんですね？」

「ああ、うん。家にいる人達の分」

買ったケーキは五つ。ピーチタルトは自分で食べる物として、他の物はランボとビアンキとツナと母に。リボーンは甘いものをあまり食べそうにないので除外。

「ふふー…」

家に帰るのが楽しみだ。

「でね。弟つたら、仲間の前だと恰好いいのに家だとまるで駄目なのよ」

「ほえー。私の兄は誰の前でもおおむねダメですね…」

「ハルはそんな事思いませんよ！ ツナさんはすつごくかっこいいです…！」

帰り道。桃凧達は例の如く世間話をしていた。

「この間も夕飯の時に零しまくってて、片付けが大変だったの」

「へー…そーいえば…」

恐らく、ここに男性がいたらいい加減にしるよおまえらいつまで同じ話するつもりだとか思っていただろうが、残念な事にここにいるのは戸籍上も生物学上も女性なメンツだけだ。

ちなみに、さっきの話はこれで三回目である。

「どこの家でも似たようなことはあるもので？」

笑顔で話をしていた桃凧の言葉がぴたりと止まる。

「どうしたんですか？ 桃凧さん？」

「…あれ」

桃凧が指さした先、そこには。

『さつさと車の用意しやがれ！ じゃねーとこのガキぶち殺すぞ！』

『落ちつきなさい！ まずは落ちついて私達の話をして』

『うるせえー！』

「」「」「……、」「」

「は、はひー！？ たた大変ですデングジャラスですー！ ちつちやい子が人質に取られていますー！！」

「……ごーとー？」

顔を覆面で隠し、拳銃を持った人物。声からしておそらく男だろう、それと銃口を向けられている小さな子供。

典型的な強盗の現場だ。

どうやら犯人は周りを囲まれ追いつめられているらしく、震える指先は今にも引き金が引かれてしまいそう。それでなくとも気が長そうな方ではないのだ、ゆえに警察もかなり慎重になっている。

「あの子大丈夫でしょうか……」

「……どー見ても大丈夫じゃないよ」

見てる方もハラハラとさせられる一幕。そもそも、この平和な（最近はそのでもなさげだが）並盛にこのような事件が起きる事が異

「まずは、その子を離して貰うわ」

ガギン！ とどう考えても銃を撃つたものではない音が響き渡った。

そして手首にくる鈍い痛み。見ると、そこには先程まであった銃がない。

目の前には相変わらず女の姿。

ただし、手にしていた日傘を振り抜いた形で止まっていた。

女の遥か後方に、先程まで自分が持っていたらしき銃が落ちている。

「そろそろ離してあげたら？ 可哀かわいそうよ」

声は後ろから。

目の前にいたはずの女の姿を確認する前に、強盗の視界は大きくブレ、緩やかな暗闇が覆っていった。

「…ケーキ、崩れてないかしら？」

「はひ…。倒しちゃいました…」

「すじい…」

すぐそこにいたはずのリータがいなくなり、強盗の目の前に現れるまで数秒。そして強盗を打ちのめし、子供を助け出すのに数秒。

早い、とてつもなく早い。絶対人間業ではない。

遠くにいたリータがこちらを見て手を振る、そして走り出して、

「あ」

「警察に捕まっちゃいました…」

「…まあ、怪しいよね」

走ろうとしたリータが警察に話しかけられるまで数秒。ちなみにドサクサに紛れて強盗はちゃんと捕まっていた。

しかし、先程の動きはすさまじいものがあつた。あんなに長いスカートを着ているのに、あの身のこなし。

しかし、最近どこかで見たとような気も？

「……まさかねー」

一瞬、リボンの事を思い出したが。即座に否定する。あんなに優しいお姉さんが、マフィアな筈がない。

「ごめんなさい、手間取っちゃったわね」

ニコニコとリータが歩いてきた。強盗を思いつき殴り飛ばしてもちっとも折れたり曲がったりしていない日傘もすごいが、あれだけの事があって笑っていられるリータもすごい。

「す、凄かったですよリータさん！」

「かつこよかったですー」

「ありがとう」

誰もが見とれるような可憐な笑顔で笑うリータ。彼女は手元の腕時計に視線を移すと少し落胆したような表情を浮かべる。

「……あら、そろそろ帰らなきゃ」

「そーなんですかー…」

「残念です…」

「ふふ、私も残念よ。でも大丈夫」

桃尻達から離れるように歩きだしたリータは背中越しに、

「たとえどんなに離れていても、ソラは繋がっているから」

告げた。

「じゃあね。桃凧、ハル、楽しかったわ」

「はい！ 私もです！！」

「さよーならー」

「
という事があってね」

「へー」

夕食時。桃凧は今日の出来事をツナたちに自慢はなしていた。

「すっごくかつこよかったんだから。あんなお姉さんになりたいな
」

「なれるわよ、桃凧なら」

「ありがと、びあんき」

「私もいつかりボンにふさわしいお嫁さんに…」

買ってきたケーキは今は冷蔵庫の中。夕御飯の後に皆で食べるつもりなのだ。

（でも、不思議な人だったなー）

その美貌もさることながら、プロ顔負けの身のこなし。深い知識と言葉の一つ一つに感じた優雅さ。

ピアノキもそうだが、外国の人はあんなに美人揃いなのだろうか？ だとしたら外国人に生まれたかった。

「また、会えるかなー…」

「」

「また随分とご機嫌だねえお嬢」

「あら、わかる？」

とある所のある場所。そこにいたのはリータと彼女の仲間達。

「可愛い女の子たちとお話ししてきたのよ。楽しかったわー」

優雅な外見に似合わず、まるで童女のような笑みを浮かべるリータ。

くるりくるりとリータが回るたびにふわりとスカートが宙を舞う。このまま歌でも歌い出しそうな雰囲気だ。それに仲間たちは苦笑い。

「それはいいが、足元見ないと転ぶぜお嬢」

「あら、大丈夫よ。そこまで子供じゃ　うきゃあ!？」

ぐい、と長いスカートのすそが足に引っ掛かった。彼女の長い髪が尾を引いたように流れる。

「……？」

転倒の衝撃に目をつぶるリータだったが、意外な事に何も無い。

不思議に思った時。

「……たく、何やってんだ」

上から聞こえてきた声。それを聞いた途端、リータの頬が羞恥によって赤く色づいた。

「おっちょこちょいな所は変わんねーなー、『姉貴』」

「い、いつもこんな訳じゃないわよ」

リータは慌ててよりかかっていた相手から身体を離し、身だしなみを整える。気を抜いていたとはいえ、恥ずかしい所を見られてしまったものだ。

「それで、今度はなに？」

「ああ、オレの弟分に会いに行こうと思ってな」

「へー……もしかなくても、ジャッポーネ日本？」

「おう」

再び現れた意外なチャンスに思わず感心するリータ。

何というか。

「またすぐに会えそうねえ…桃凧」

第七話 「優雅で気品があふれる、そんな人に私はなりたいです。」（後書き）

新キャラ登場。リータさんです。彼女のプロフィールはもうちょっと登場してからということ。そしてピアノキをやっと出せたぜ…。数行だったけど。

なんか、ギャグが続いてるとシリアスとか入れたくなりますよね。次のお話は友人からの熱望と話の流れるに雲雀さん再登場です。お楽しみに！。

第八話 「明日から多忙になりました。」（前書き）

夏休みパート2。雲雀さんのキャラはどうも掴みにくい…まさしく雲ですね。

1月23日 キャラクターのセリフを修正

5月27日 題材にした回の題名を追加
『オリジナル』

第八話 「明日から多忙になりました。」

月 日

この間あったりーたさん、せんせーに話したらなんか心当たりがあつたみたいです。

やっぱりりーたさんもマフィアの人なのでしょうか？ そんな風には見えなかったのですが……。

そういえば、最近私の部屋のクーラーが壊れました。毎日が蒸し風呂です。夜はつなの部屋に泊めてもらってますが、さすがに昼はずっといるわけにはいかないので。

というわけで、今日は散歩に出かけてきます。

第八話 「明日から多忙になりました。」

静かさや 岩に染みいる 蝉の声

そんな俳句があった気がする。夏の日の事を書いた俳句だが、これだけを見るとどこことなく涼しそうな印象を受けた。

しかし、直射日光の下で聞く蝉の声などただ暑さを助長させるだけの物でしかないわけで。

「……、」

もはや言葉を発する気力もない。頭は思考を止め、体を動かすのは理性ではなく本能。

このようなか弱い少女になおも刺激的すぎる日光を浴びせてくる太陽に軽く殺意を覚えながら、桃凧は歩を進める。

確か、もうちょっと言った所に桃凧お勤めの避暑スポットがあったはずのだが、そこに行く前に力尽きてしまいそうだ。

だから、目の前にリーゼントの学ランがいるのを見ても、桃凧は別に驚かなかった。

というより、めんどくさい。

「沢田桃凧姫さん、委員長より言伝を賜っております」

「はあ…びんも」

目の前にいるリーゼントはどつやら雲雀の部下だったらしい。桃凧に手紙らしきものを渡すとすぐに去ってしまった。どつでもいい

が、この天気の中であんな黒一色の学ラン、暑くないのだろうか。

『小動物へ』

まあとりあえず雲雀の手紙だし、読むか。というより小動物って何だ。

そう思った桃凧はパラリと手紙をめくる。

『何で君携帯持っていないの？』

ほっというほしい。

「だって、必要ないじゃんかー……」

でもこんな事を雲雀に言ったら、すぐ連絡入れられないから不便ださっさと持て。とか言われるのだろうな。と思いつつも桃凧は手紙のつづきを見る。

『最近書類が来ないんだけど、ちゃんと持って来ないと咬み殺すよ』

「……もしかして、夏休み中にも書類はあるのか？」

だとしたら、大変だ。

書類を溜めている事で雲雀を怒らせてしまうということもあれだが、何より自分の机がどうなっているのかが。

「……、」

桃風はさつきまで向かっていた目的地と並中、どちらが近いか考えて。

「並中に行くことを決めた。」

「……………泣いていいかな」

というより、泣きたい。

幸い、机が大破しているという事態は無かった。

無かったが。

「書類が多すぎて机が見えない……………」

なんとということでしょう。一般の生徒より少し低めにデザインされていた彼女の机。それが、今は一面の純白により埋め尽くされています。シンプルな茶色い机は今は白い書類に、それなりに座り心地のよかったイスは白い書類に。

なんだろうこのエセビフォーアフターは、劇的にもほどがある。

「……………そもそも、これは運べるのかね？」

常識的に考えて、一度では無理な気がする。ならば数回に分けるか。しかし、少しずつ運べばその分応接室に入らなければならぬ

わけで。

「ダメだ……。運ぶごとにきょーやの冷たい視線が想像できる」

考える、一番いい方法を。

「よし。　　　台車借りてこよう」

コンコン。と応接室の扉がノックされた。

「……入っていいよ」

恐らく、時間的に考えるとあの小動物だろう。違ったら咬み殺す。

「おじやましませーす……」

少しだけ開かれた扉から除く顔は雲雀の予想通り。しかし普段と比べてやや弱々しい感じがした。

「あの一……、きょーや、さん？」

「何」

「書類、持ってきたよー…持ってきた、けど…」

けど、何だ。いつもの彼女らしくない、人をイラつかせる喋り方。

「……だから、何」

「まあ、見てもらえればわかる……」

そうしてガラガラという音と共に応接室に入ってくる小動物。

…ガラガラ？

「溜まってた」

一緒に入ってきた荷台に積まれていた、大量の書類。

……、

…。

「……、」

「……」
「ごめんなさい」

決定。咬み殺す。

書類の手伝いを終わるまでやるといふ条件で何とか咬み殺すのだけは勘弁してもらえた。

しかし、今日から朝早く起きては学校に直行。何故夏休みなのに毎日学校に行かなくてはならないのか。

そして書類が夏休み中も来るといふ事を知った今は、書類の片づけが終わってからもちよくちよく学校に来なくてはならない。めんどうな。

しかし、いい事もあった。

「応接室ってクーラーきいてるねー」

「ちゃんと手を動かしなよ」

「ごめんなさい」

どうやら目の前の委員長は世間話も許してはくれないらしい。

カリカリカリ…、とペンを動かす音だけが響き渡る。

(……まあ、いつか)

どうせ家に帰ってもクーラーは壊れているのだから、それに暇だったから散歩に出かけたようなものだし。

散歩は好きだ。知らない所に行けば今まで見た事もなかった物に出会えるかもしれないし、知っている所を散歩するだけでも暇つぶしになる。

ちっちゃい頃は散歩していたらいつの間にか迷子の搜索願いが出されていた事もあったが、今はそんなことはないし。

少なくとも、何もやる事が無いよりは、ずっと楽しい。

そう、思った。

が。

「…すみません、もうそろそろ帰らせてください」

「まだノルマ終わってないよ」

「勘弁してください…」

そろそろ夕方なのだが、まだ書類は終わらない。

これがいつもなら普通にさっさと帰るのだが、この事態を作ってしまった張本人としての負い目もあってあまり強く出れなかった。

嫌だ、さすがにこの年で搜索願いを出されるのは。

「明日も来るから…。お願い」

ちょこちょここと雲雀のデスクの近くにより、やや上目気味に雲雀を見上げる。気分としては王様に懇願する一般民衆の気分。

「……、」

雲雀はしばらくそんな桃風を眺めていたが、やがて諦めたように息を吐いた。

「……明日は朝八時に登校ね」

「わかった、十時に来る」

「……、」

背後からの視線が痛いなんてもんじゃなかったが、無視して応接室を出た。

仕方がない、明日は九時半くらいに来るか。

第八話 「明日から多忙になりました。」（後書き）

これにて夏休みは終了。次からは原作に入ります。

まあ、次はお兄さんの回なのでかなりどうしようか迷っているのですが。

第九話 「風邪のときはネギがいいそうです。」 (前書き)

5月27日 題材にした回の題名を追加
『標的15 Dr. シャマル』

第九話 「風邪のときはネギがいいそうです。」

月 日

この間、またきょーこちゃんのお兄さん。…めんどくさいのでりょーへいさんと呼びます。りょーへいさんに会いました。

つなをボクシング部に誘っているときのりょーへいさんはとてもなく輝いていました。

私思うに、あの人はボクシング神か熱血神の化身なのではないでしょうか。

それより、今日つなが少し具合が悪そうだったけど、大丈夫でしょうか…？

いえ、つなの心配している暇ありませんでした。

なんかあたまが……くらくらします。

第九話 「風邪のときはネギがいいそうです。」

ある日の放課後の事だった。

「あれ…？」

クラ、とツナの体が揺れる。風邪か何かだろうか。桃凧は今日は風邪で休んでいるし、移ったのかもしれない。

「なんか身体ダルいや……」

それならそれで学校休めるから良いかなーとごく一般の中学生の意見を言うツナ。

しかし、思わず額に当てた手のひらを見た時、その顔は驚愕に染まった。

「な、何だこれー!？」

手のひらにはおどろおどろしいドクロのマークが。

「それはドクロ病っていう不治の病だ。ツナ、死ぬぞ」

「いきなり …!？」

何やら不吉さを表すかのような影を背負って現れたりポーン。話

した内容も相まって不気味すぎる。

「今まで何発の死ぬ気弾を脳天にくらったか覚えてるか？」

「は？ な、何発って…知らないよそんなの！」

「ちょうど10発だぞ」

死ぬ気弾で10回殺されると被弾者にとんでもない事が起こる、
そう言われているらしく、恐らく今回のこれもそれなのではないか
との事。

「まさか不治の病とは…残念だ」

「終えるなー！！」

勝手に自分が助からない事にされたツナ。ドク口病なんてそんな
もの、嘘に決まっている。洗えば落ちるだろう。

「ん…」

ぼんやりとした意識の中、桃凧は目が覚めた。

確か、朝起きて身体がだるくて、それで学校を休んだっけ。それ
でそのまま寝たんだった。

「…のどかわいた」

風邪をひいているときは水分を摂取しないと脱水症状で大変な事になる。そう思った桃凧は鈍い体に鞭打ってベットから起き上がった。

(…なんか、騒がしい…)

そして桃凧が下で見たものは。

「シヤマルさん！ お願い助けてー！ まだ死にたくないー！！
しかもこんな不様にー！」

「おいコラ！ 男が抱きつくな！ 虫唾が走るー！！」

よくわからない白衣のおじさんと、泣きながらそのおじさんに縋りついているツナ。何故かツナの体にはドクロのマークがびっしりとついていた。

「……………」

普段ならここで何か思ったりツッコミを入れたりするのだろうか、風邪で思考能力が落ちた桃凧にはそこまで思いつかない。鈍った頭で考えるのは。

(……………戻ろう)

大丈夫、ちょっとくらい何も飲まなくたって死にはしない。

さっきとまったく違う事を考えながら階段を上る桃凧。しかし、

「あ…？」

グラリ、と体のバランス感覚が薄れる。そしてそのまま後ろ向きに階段から落下しそうになって。

「大丈夫？」

ビアンキに受け止められた。

「……ありがとう」

「まだ寝てなきゃダメよ。ただでさえ体力なのに」

「…ん」

コクリ、と頷いてから台所の方を指さす。もう声を出すのも辛い。

要約すると『のどが渴いたので連れてってくれませんか』なのだ
が、ビアンキはそう思わなかったようだ。

「…なるほど、病気の貴女に体力の付く料理を作ってほしいという
わけね」

何という命の危機。

「…いや、のどかわいたから…」

「そうときまれば上で待ってなさい、すぐに特性おかゆを作るから」

どうしよう、聞いてない。

ビアンキに寝室まで運ばれる中、薄れゆく意識の中で桃凧は思っ

(……死にたくない)

それはもう切実に。

目が覚めた時にあったのは、不思議な色の煙を出すおかゆではなく、ツナの顔だった。

「あ、起きた？」

「……つな」

とりあえず、現状を確認して。

「……生きてる」

安堵した。

そりゃそうだ、ツナに似た神様など仕事が上手く出来ないに決まってるから。

「何か失礼なこと考えただろ……」

「あー……うん」

ジトー、と咎めるような視線のツナに対して桃凧は無表情。表情を作るだけの気力がないのが理由だが、もとよりこの双子に表情に張りつけた笑みなど無用。

昔から、ツナが一番自分の事を自分よりわかってくれていた。

恐らく、ツナもそう思っているだろう。

「……ツナ、さっきのおじさんは？」

「あー…今下でピアンキにちよっかい出してる」

何やら疲れた表情でそのような事を言うツナ。結局あの人は何者だったのだろうか。

「何かいる物あるか？」

「……飲み物」

わかった、と言って桃凧の部屋から出ていくツナ。飲み物を取りに行ってくれたのだろうか。

『うわっ!?!? ピアンキなんてポイズンクッキングなんて持ってるんだよ!?!』

『どきなさい。私は今桃凧におかゆを持っていくのよ』

『桃凧を殺す気かよ!?!』

ドアの向こうでそんな話し声が聞こえたが、桃風にあの中に割り込む気力はない。小さな声で、桃風は呟いた。

「……つな、ファイト」

第九話 「風邪のときはネギがいいそうです。」（後書き）

次は雲雀さんの回ですかー。もう登場しちゃってますが、この回は書きます。

個人的に雲雀さんは結構好きなキャラなので。

第十話 「体を鍛えようかなと思いました。」 (前書き)

5月27日 題材にした回の題名を追加

『標的16 雲雀恭弥』

第十話 「体を鍛えようかなと思いました。」

月〃日

この間の風邪はだいぶ良くなりました。これで学校に行けそうです。

そういえば、風邪をひいていた時に来ていたおじさんはシャマルさんと言って、女性しか診察しない人なんだそうです。腕はいいんですけどね。

さて、2学期が始まってすぐに休んでしまった分、ちゃんと取り戻さないといけませんね。

第十話 「体を鍛えようかなと思いました。」

「もー秋か〜。夏休みもあつという間に終わって何かさみしいな〜」

「補習ばっかだったしな」

「アホ牛が最近ブドウブドウってウザくねースか？」

「ちっちゃい子は元気が一番だよー」

ツナたちの学校は給食制ではない。みな思い思いの昼食を買ったりしている。中学校では珍しいのではないだろうか。

しかし、給食制ではないためこのように屋上に集まって昼食をとったりすることもできるわけで。

そして開放感あふれる場所には必ず本来いない者がいるというわけ。

「栗もうまいぞ」

「いーだだ!？」

さくさく、とツナに当たったのは栗。何故こんな所に、ということも犯人などわかりきっているが。

「リポーンだな! いっつ!」

くる、と振り返ったツナの腕に鋭い痛みが走った。

「チャオっす」

そこにいたのは巨大すぎる栗。いや、栗ではなく栗の着ぐるみを

着たりポーンが。

「これは秋の隠密用カモフラージュスーツだ」

「1000人が1000人振り返るぞ！」

新学期に入っても、ツナのツッコミの切れは相変わらず。

「ファミリーのアジトを作るぞ」

そしてリポーンの強引さも相変わらず。

「応接室って入ったことねーな」

「10代目にふさわしい部屋だと良いんだがな」

「普通は行かないもんね…って、桃凧何持ってんの」

「んー、書類」

応接室に行くついでに雲雀に書類を渡そうと一度教室に戻っていた桃凧。

ツナたちと合流する時にはすでに応接室の前に来ていた。

応接室に入る前。ふと、桃凧の頭を過ぎ去った言葉があった。

(…そういえば)

まず山本が応接室に入って、

(……きょーや、群れるの嫌いだっただなあ)

そして硬直した。

「君、誰？」

この学校にいれば雲雀の噂を聞かない者はいないだろう。雲雀の姿を見た途端、山本の顔に緊張が走る。

「なんだあいつ？」

「獄寺、待て…」

転入生である獄寺は雲雀の事を知らない模様。それに山本が歯止めをかけるが、とうの雲雀は獄寺が啞えている煙草を見咎めて。

「風紀委員長の前ではタバコ消してくれる？ ま、どちらにせよただでは帰さないけど」

明らかにこちらを見下した言葉。それに気が短い獄寺が反応した。

「んだとテメー」

「消せ」

ひゅっ、と。

視認が困難なほどの速度で振り抜かれたトンファーが獄寺の煙草を吹き飛ばす。

「！ なんだこいつ！！」

その顔を苛立ちから驚愕に塗り替えた獄寺が雲雀から距離をとった。

しかし、あれが雲雀のトンファーか。桃凧はちよつと前に持つてみた事があったが、重くて引きずってしまった。よく片手で持てるものだ。

あの後雲雀に怒られたのは良い…とはいえない思い出である。

とはいえ、ここで止めないと取り返しがつかなくなる。

「きよーや」

「っ！ 桃凧！！」

「桃凧さん！！」

獄寺と山本をかばうように雲雀の前に出る。桃凧と雲雀の繋がりを知らない二人には、今の桃凧の行為は自殺行為に見えたのだろう。

そして、雲雀は。

「……、」

「え、あれ……？」

がし、と。雲雀に腕を掴まれる。

「……、」

「えーと……」

そしてそのままぐいと引き寄せられ。

「……何やってんの？」

「ふえ……、わっ！？」

足が浮く。そして襟首に感じる感覚。どつやら、持ち上げられて
いるらしい。

「いや、あの、いきなり何を」

「何やってんの？」

なに、と聞かれても。ただ友人と一緒に応接室に來ただけなのだ
が。

しかし、何故かその理由を話すのはまずい気がした。

「えーと、書類を届けに……？」

「…そう」

雲雀がため息をつく。

「じゃあ僕の邪魔しないでくれる」

「にゃあ!?!」

ポイ、という効果音が適切な感じで放り投げられた。重力に逆らえず落下する体。そして着地した場所はソファアーの上だった。ばね仕掛けのソファアーが大きく跳ねる。

(…なるほど)

どうやら、自分は大変な思い違いをしていたみたいで。

(…止められる訳なかったねー)

応接室に複数人が入った時点で、雲雀の機嫌は急転直下だったのだ。

「やっ、」

雲雀が発した言葉に、周囲の空気が総毛立つ。

「僕は弱くて群れる草食動物が嫌いだ。視界に入ると」

表情は相変わらず変わらない。しかし誰でもわかるほどの殺気を滲ませながら。

「　　咬み殺したくなる」

まるで背筋に氷でも突っ込まれたかのような感覚。明らかに自分達に向けられた殺気に二人は息を呑んで。

「へー、初めて入るよ応接室なんて」

するり、と二人の隙間を抜けてツナが応接室に入った。

「まてツナ!!」

「へ?」

瞬間、雲雀が動いた。軽い動作でありながらも重い一撃でツナを殴り飛ばす。

「1匹」

ふっ飛ばされ、床を転がるツナに目も向けず。

「のやるお!　ぶっ殺す!!」

ツナを傷つけられ頭に血が上った獄寺の一撃を軽くないし、返す刀でトンファーを叩きつけた。

「2匹」

「てめえ……!!」

山本の言葉に答えず、もう片方の手にもトンファーを装着する雲雀。そしてそのまま一気に山本の所へ踏み込んだ。

応接室は広い事は広いが、元々部屋の中だ。避ける山本だが、動きにくそうなのは明らか。

その上、

「怪我でもしたのかい？ 右手をかばってるな」

「！」

前に骨折した右手、そして骨折してからは出来るだけ衝撃を与えないようにしていた右手の事を突かれ、山本の動きが止まる。

そしてその一瞬を雲雀は見逃さなかった。

「当たり」

トンファーでの一撃から一転、いきなり飛んできた蹴りが防御していた山本の手をすり抜け鳩尾に当たる。

「3匹」

吹っ飛び、壁に叩きつけられる山本を見下ろす雲雀。

「あー、いつつつ…！」

そしてツナが目覚めたのはそんな時だった。

「ごっ…獄寺君！ 山本！ なっ、なんで…！」

「起きないよ、2人にはそういう攻撃をしたからね」

「えっ」

それはつまり、ツナの視点から見ても強い事がわかるこの二人を相手にして、一瞬で倒してしまったということだ。

つまりとところ、大ピンチ。

「ゆっくりしていきなよ、救急車は呼んであげるから」

何故こんな事に、ただ皆で応接室に來ただけなのに。

そんな事を考えていたツナの目に、信じられないものが飛び込んできた。

銃の照準を自分に向ける、リポーンだ。

「死ね」

ズガン！ と死ぬ気弾が脳天に突き刺さる。

「？」

雲雀はそれを不思議そうに眺めて。

「うおおおっ！ 死ぬ気でおまえを倒す！！！」

「何それ？ ギャグ？」

気合の入ったツナの叫び声は、雲雀にとって滑稽にしか聞こえない。ツナのパンチを軽々とよけ、そのままトンファーで顎を突き上げる。

「アゴ割れちゃったかな」

そう思うほどに強烈な一撃。

「さーて、あとの2人も救急車に乗せてもらえるくらいグチャグチャにしてくちゃね」

倒した相手にいつまでもかまう訳もない、視線を外した雲雀だが、それは間違いだった。

ツナはいつものツナではなく、死ぬ気なのだから。

ググ…と自分の背後で動く音がする。

「ん？」

「まだまだあ！！！」

振り返った雲雀を襲ったのはツナの鉄拳。

もちろん、それでやられるような雲雀ではない。が、すでに倒したと思っていた標的、しかも軟弱な草食動物に殴られた、という事実が雲雀の思考を一瞬停止させた。

そしてツナの手にやってきたのはカメレオン。ただのカメレオンではない、形状記憶カメレオンのレオンだ。

ツナの手の上でカタチを変えていくレオン、そしてレオンがなったのは淵ふちにW・Cと書いてあるスリッパ。

「タワケが!!」

スパアン! とスリッパで雲雀の頭をひっぱたくツナ。雲雀は少しフラフラしていたが、

「ねえ……」

静かに、雲雀が言葉を紡ぐ。

「殺していい?」

先ほどとは比べ物にならない怒気と殺気が辺りに充満する。

「そこまでだ」

その時、制止の声がかかった。

「やっぱつえーなおまえ」

感心したように雲雀に称賛の言葉を贈るリボン。対して雲雀は興味もなく、

「君が何者かは知らないけど、僕、今イラついているんだ。横になつて待っていてくれる」

そしてそのままトンファーをリボンの方に向けた。

が。

キーン！ とリボンが取り出した十手によって雲雀のトンファーが受け止められる。

「ワオ、すばらしいね君」

自分の必殺を止められた雲雀はむしろ嬉しそうな表情でリボンを見据えていた。

「おひらきだぞ」

リボンが取り出したのは丸いフォルムに導火線がついた、要するに爆弾。

応接室に、爆発音が轟いた。

「……………」

後半、ほとんど存在を忘れ去られていた桃凧が吹っ飛んだソファの下から這い出てくる。

何度か止めようと考えていたが、とても自分が追いつける速さじゃなかった。

一か八かの賭けで雲雀の前に躍り出ることも考えたが、もしそれで自分が怪我をしてしまったら彼らはもう止まらなかっただろう。

「……………きよーや？」

辺りを見回すと、壊れた応接室には興味もなく空を見上げる雲雀が。

ぼつり、と言葉がもれる。

「あの赤ん坊、また会いたいな」

どつやら、お気に入りになったらしい。

「きよーや、楽しそう…」

なんか、方向性は間違っている気もするが。

第十話 「体を鍛えようかなと思いました。」（後書き）

ほぼ滑り込みな感じで投稿。雲雀さんがやけに優しいのはなぜ？
そして爆弾を爆発させたら応接室はどうなるのか、そこらへんがよ
くわかりませんでした。

第十一話 「月のお小遣いの少しは絆創膏に使います。」（前書き）

5月27日 題材にした回の題名を追加

『標的18 棒倒し（後編）』

第十一話 「月のお小遣いの少しは絆創膏に使います。」

月 日

体育祭の季節です。

ええ体育祭です。これでもかというほど体育祭です。滅ばいいのに。

運動が苦手な私にとって、体育祭は憂鬱でしかありません。準備は楽しくて良いですが、本番は少し…。

体育祭ではA・B・C組にわかれて戦うのですが、男子で行う棒倒しの時などはもう大変です。いっぱい怪我人が出ますので、今すぐ治しに行きたくなります。

きょーこちゃんが、りょーへいさんの事が心配だって言っていました。確かに私も心配です。いろんな意味で。

だって、あのりょーへいさんが代表なら、つなにどんな事が起こるか。

と思っていたら、ツナが棒倒しの大将にされました。

救急箱、補充しようかな…。

第十一話 「月のお小遣いの少しは絆創膏に使います。」

「つな、大丈夫？」

「大丈夫じゃないよ…」

体育祭当日。ツナは明らかに具合が悪そうだった。

それというのも昨日、棒倒しの練習とかいうのを河原でやった時に、誤ってツナが川に転落してしまったからなのだが。

「しつかり。つなが具合悪いと何故か私まで悪くなる」

「うへえー…」

こんなんで大将が務まるのだろうか。

しかし、今はツナの事を心配している余裕はない。

何故かというと、桃風の運動音痴はクラスでも知れ渡っているが、やはり体育祭という行事の上では最低でも一つは競技に出なければならぬ。

そして桃尻が出る事になった競技とは。

「男女混合、二人三脚」

並中の二人三脚はかなりの変則ルールだ。

男女ペアでやることもそうだが、選手は男女別のくじを引いて同じ数字となった相手とペアを組む。

事前練習ができない分、かなりのチームワークが必要になるルール。

ちなみに、この時は学年の壁は全て無くなる。ある意味、友好を深めるには最適かもしれない。

「次、引いてください」

「はい」

箱の中に手を突っ込んで紙を一枚取り出す。書かれていた数字は十番。さて、誰と一緒になるのだろうか。

(できるなら、つながいい)

それだったら息の合ったコンビプレイを披露できるかもしれない

のに。いや、二人してコケる可能性の方が高いか。

とりあえず、知り合いを探そう。

「はやとー、何番？」

「五番っス」

違う。

「つなー、何番？」

「二番…」

違う。

「りょーへいさん、何番ですか？」

「極限に三番だあ…！」

違う。

「たけしー。何番？」

「十番だな」

「…！」

どつやら自分の相手は山本らしい。

さて、どっしりよ。

まず、歩幅が違いすぎる、ついでに身長も。さらに付け加えると運動音痴と運動が得意。これでは足を引っ張ってしまうだけだ。

いや、待て。

「……あ」

あるじゃないか、一番良い作戦が。

「……という作戦でいこうと思うのだけど」

「いけんのか？」

桃尻が話した作戦に山本は不思議顔で答える。こちらの目線と会わせるようにしゃがまれているのが何か微妙な気分だが、まあいいとして。

「鍵はたけしだから。私にできることはあんまりない」

つまり、一緒にやれば山本の足を引っ張る事になる。

ならば、一緒にやらなければいいのだ。

「がんばれ、たけし」

「それでは、位置についてください」

先生の言葉と共に辺りに緊張が走る。

「よいい、ドンー！」

パン！ というピストルの音と共に競技が幕を開けた。

『ほら、急いでー！』

『う、うんー！』

やはり、大多数のチームは男性が女性をリードする方式。掛け声をかける者、手を叩くもの、それぞれ思い思いの方法で息を合わせようとしている。

しかし、その中から一気に抜き出たチームがいた。

山本、桃風チームだ。

「おっ先ー！」

「ちぎー…！」

走り方としては、桃風が片足を上げ、そのまま山本に体重を預けしがつく。

こうすれば相手側のスピードで走る事が出来る上に片方にそこまでの疲労はやってこず、しかも少しバランスに気をつければいいだ

けでチームワークはそれほど必要ない。

「そしてもとより足が速い山本の事だ、あつという間に他のチームと差をつけ、ゴールテープを切った。」

「よっしゃー!!」

「あー、終わったー…」

走り終わった後ガッツポーズを決めた山本は桃凧の足と結ばれていた紐を外して自軍へと走ってゆく。

そして桃凧はもはややるべきことはやったというような感じで自軍の観覧席へと歩いて行った。

思うことは一つ。

「早く終わらないかなー…」

本当に自分の苦手な事に関しては興味がない桃凧である。

「いやー…まさかあそこで乱闘が起きるとは」

「何言ってるんだ、後半ほとんど寝てたくせに…」

ツナが棒倒しでボロボロになった体でうめきながらそんな事を言

う。

リボーンの策略五〇%と獄寺・了平の暴走五〇%で相手側の大将が気絶してしまい、しかもそれがツナのせいだという事になってしまった。

そのためにB軍、C軍連合VSA軍とかいう大惨事になってしまったわけだが、途中まではいい所までいっていたのだ。いったのだが、不仲が原因で結局は敗北してしまった。

桃凧は持ってきた救急箱片手に素早くツナの治療をしながらも会話を続ける。

「だって私の番終わってた、しっ！」

「いだけだっ！！ し、染みる染みるっ！」

「風邪で具合悪かったにもかかわらず言いだせなかったどこかのバカに対するお仕置き」

びみよーにだが、桃凧は怒っているらしい。

「具合悪い時点で言えばよかったのに、なんでそこで我慢するのかな。言いだせなかったとしてもさ、ちょっと具合悪いから実力発揮できないかもくらいはさ」

「あの…桃凧？」

「何？」

「もしかして、心配してくれてる？」

ぶぎゅる、と桃風が手に持っていたジェル状消毒薬が握りつぶされる。

「……な、ナニライイダスノカナツナハ、ソンナコトアルワケナイジャン」

「ああ、うん。わかりやすいね」

苦笑いをしながら目線の泳ぐ桃風を眺めるツナ。桃風は嘘がへたというわけではないのだが、いきなりの事だったので驚いてしまった。

もっとも、表情を変えずに言った嘘であろうとも、ツナは見きってしまっただろうけど。

「むー…」

「はいはい」

ムクれた桃風の頭を撫でるツナ。こういうときは本当にツナはお兄ちゃん、桃風はそれが少し気に入くない。

だって、産まれた時間なんてほとんど同じなのに。こういうときはいつもツナは自分の前に行く。

自分は、ツナの隣を歩きたいのに。

「…治療終わったよ」

「ありがとな」

ぱたん、と救急箱の蓋を閉じる。

頭上には、一面の青空が広がっていた。

第十一話 「月のお小遣いの少しは絆創膏に使います。」（後書き）

これからちよつと色々あるので一日に何度も投稿とかは無理になる
と思います。

他にも投稿してるやつがあるんですよ…。そっちやらないと。

しかし、懐かしいですよー二人三脚。引きずられた記憶しかあり
ませんけど。

第十二話 「ダイナマイトよりすごいものを見ました。」（前書き）

ふっかあああああああつ!!

ソロモンよ、私は帰ってきたあああ!!

どうも、更新停滞すみませんでした。

5月27日 題材にした話の題名を追加

『標的23 イーピン』

第十二話 「ダイナマイトよりすごいものを見ました。」

月曜日

この間は日曜日でした。

私は眠かったのですずっと寝ていたのですが、どうやらつなは色々大変だったようで、かなりやつれてました。

それときよーやがつなの部屋に窓から入ってきたような気がします。いや、でも…どうだったのでしょうか？ かなり眠かったし、寝ぼけてたのかも…。

いくらきよーやでも窓から入るなんて。しますね、はい。

それとらんぼの保育係の適性テストとかしました。途中で10年バズーカを使ったららんぼが大きくなったのですが、その時のらんぼがあまりにもかわいそう過ぎたので慰めたら、何かさらに泣かれましました。

きっと、色々溜めこんでたものがあったのでしょうね…。

それと、この間はせんせーの誕生日でした。どうも、満1歳になったよつで。おめでとつごいいます。

をやったのか、それは解らないが。まあ、いつものように間違えて怒らせてしまったのだろう。

「！」

「あ、君！」

そして、その声を聞いた小さな子はツナと犬の間に挟まる様に立ち塞がった。

しかし、暴れる犬は見境無し。小さな子にもその牙を向けて、

突如、狂犬がふっ飛ばされた。

「え…？」

小さな子は手を触れていない。なのにふっ飛ばされた。

「あの…ありがとう…」

状況を理解できない桃凧と、とりあえずお礼を言うツナ。しかし、その小さな子はキツとツナを睨むとお辞儀をしてそのまま走り去ってしまった。

「「ただいまー」」

二人声をそろえて帰宅。ツナと桃凧はそれぞれの部屋に戻って行った。

「さっきのちっさい子…本当に何だったんだろ？」

不思議といつかなんとか、自分では到底できないような身のこなし方だった。あの年でそこまでできるという事はよほど才能があるのか、それとも師がいいのか、はたまたその両方か。

それに、犬を吹っ飛ばした時。手を触れていなかったはずだ。

何か策や道具を使ったのか、はたまた

「超能力とか…」

考えて、即座に否定。

いくらなんでもあり得ないだろう、超能力など。

「……いや」

それはあくまで今まで自分が持っていた常識という範囲内での出来事だ。これまでの…というより、リボンと会ってからの自分の常識は宇宙より広くなってる気がする。

最初から決め付けるのではなく、そういうこともあるかもしれないと思う事が重要なのだ。

でも、トリックは案外簡単かもしれないが。

次の日。

「掃除つてめんどくさいな」

「でもやらなきゃ終わらないし」

しかし、昨日は大変だった。何故かリボーンの顔中にトンボがくっついていて（本人いわく、秋の子分）びっくりしたし、超能力とか聞いたら何やら赤ん坊の癖に渋い笑みで笑われたし、何だったのだろうか。

「ん…？」

ちらりと見えたのは、昨日のあの子。しかしリボンといいこの子といい、昼間の学校に何でこんなにも部外者が乱入できるのだろうか。不思議でしようがない。

どうやら小さな子は京子と話している様子、お礼を言われている所を見ると、人助けでもしたのだろうか。しかし、お礼を言われたとたんに険しい顔になる小さな子。……あれはあの子なりの感情表現？

「つな、つな」

「ん？」

「昨日の子」

ぴし、と桃風が小さな子を指さしたのと、小さな子がツナを見て驚愕したタイミングはほぼ同じだった。

小さな子は取り出した写真とツナを見比べると駆け寄り、人差し指を上に向ける。

どうもこれは『用があるから屋上に来い』とかそういう感じなのだろうか。

「は…?」

「あ…」

しかし、その答えを聞く前に小さな子は走って行ってしまった。行き先はもしかしなくても屋上か。

「あの子もツナ君の知り合い?」

「前の牛の子といい、沢田はヘンなガキ専門だな」

「変な言い方すんなよ!？」

「しかし否定はできないよね」

めんどろだし、どうしようかな!。と思っていた桃風だったが、ぐい、といきなり腕を引っ張られた。

引っ張った相手は

「つなー？」

「桃凧、今めんどくさいって思ってたたる……」

「……むじゅ」

これは、つまりあれか。めんどくさいからって放りだすなど、解りやすくいえば変な事態になってるこの場で一人にしないでと。

(まあ、しょうがないか)

ツナがそう言っているのだから、自分の決断は『叶える』以外にない。

「屋上に……到着っ！ って、あれ……？」

よくわからないが、違う場所に一步を踏み入れる時は達成感があるものだ。雪が降った日の庭とかがいい例だと思う。

できれば、そういうときは一番乗りが好ましいのだが今回は呼びだされているためにそれは叶わないだろう。まあ、呼びだされているのはツナだが。

そして屋上に到着した桃凧が驚きの声を上げた理由は、その小さな子にあった。

(服着替えてる…)

さっきまでの服とは違い、今度は動きやすそうな中華服。しかしなぜ手にホカホカの中華まんが握られているのだろうか。しかもちよつと食べてあるし。

「桃凧ー…って、なんか着替えてる!？」

何となく走ってきた桃凧の後ろからツナが歩いてやってきた。こちらも小さい子を見て驚いている。

「 ? ” … … ! 〒 × … ! 」

ツナを指さし叫ぶ小さな子。しかし、悲しい事にツナと桃凧はこの言葉かわからない。ニュアンス的に、宣言とか、そんな感じだが。

「 『 昨日は暗殺すべきターゲットとは知らずに助けてしまったが今日はお前を殺す』 」

ふと、ツナの後ろから声がかげられた。

「 っって言ってるぞ 」

「 リポーン! ! 」

「 せんせー、知り合い? 」

どうやらリボーンは中国語も解る様子。ちょうど良いし、そのまま通訳してもらおうか。

「そいつの名はイーピン、殺し屋だぞ」

「え！ 嘘ー！？」

ぺこり、とお辞儀するイーピンを見ながら驚愕するツナ。確かに、これだけを見るとただの行儀のいい子供にしか見えない。

『イーピン』という人物の話は前にリボーンがしていた。かなり強い殺し屋で、ついたあだ名が

「じゃ、じゃあこいつが人間爆弾！？」

「ソーだぞ」

「 × ? イーピン」

身振り手振りを交えて話すイーピンの言葉に耳を傾けてみると、何となく自分の名前はイーピンだと言っているらしきことがわかった。しかし、考えるまでもなくこの状況はまずい。相手は一流の殺し屋、しかも昨日見た限りではよくわからない謎の力を使うのだ。どうしろと。

しかし、どうやらイーピンが狙っているのはツナだけの模様。現に桃風の事は気にしていない。恐らく自分は安全だと思う。ツナの方は危険だが。

でも、気になる事が一つ。先程イーピンが見ていた写真が、恐らくイーピンが殺しを命じられた人なのだろうが。それがどう見てもツナには見えなかったのだ。

「ねえ…ちょっと」

「??？」

「その写真…ちょっと見せてもらってもいい？」

イーピンは少しだけ迷った後、ぴらりと一枚の写真を取り出した。

(……どうしよう)

写真に写っているのは、ツナじゃない。というか、似ても似つかない。この子の目は節穴か？

「……これ、つなじゃないよ」

「!?!」

ガーン、という効果音が一番あつような感じで硬直するイーピン。その後、間違えた気恥しさからなのか、滝のように汗が流れ出る。

「え、ちょ、なんだよそれー!？」

「!?!」

カチリ、とスイッチが入れ替わったかのように汗が引く。ツナの驚き声を聞いた事で何かが限界を超えたのだろうか、その表れのよ

うに額に六つの何かが浮かんだ。

「何あれ…?」

「筒子^{びんす}時限超爆^{じげんちゆうはく}”のカウントダウンが始まっちまったな」

「「は?」」

聞き慣れない言葉に眉をひそめる桃尻達に、淡々と人ごとのように語り始めるリボン。

「イーピンは極度の恥ずかしがりやでな、恥ずかしさが頂点に達すると頭に九筒^{キューピン}が現れるんだ」

そして額の筒子^{ピンズ}は時とともに減っていき、一筒^{イーピン}になってしまつとドカン。そのため、ついたあだ名が「人間爆弾」らしい。

「……それは、逃げないと危ないのでは?」

「そだな」

「何で二人ともそんなに冷静なんだよ!??」

「目の前に慌てる人がいると逆に冷静になるものなんだよ、つなだからひとまず落ち着いて、とツナを諭す桃尻。しかし、

「あ、いたいた」。これ忘れてつたよ?」

「京子ちゃん!?!」

恐らく、ツナを見つけた時においていたまま忘れていたのである。うーピンの荷物を持ってきた京子。恐らくこのままでは、京子が危ない。

(…そーっと)

そう思った桃風はこっそりうーピンに近寄るとそのまま京子の元からうーピンを取り上げようとした。が、

「……ふあれ？」

手を伸ばした桃風の手は何もつかめず、空をつかむだけに終わった。

うーピンが京子にピットリとすり寄っていたからだ。

「うーピンはカウントダウン中恥ずかしさの余り人にすり寄ってくるんだ」

淡々としたリボーンの説明だが、内容はシャレにはならない。

急いでうーピンを引き剥がした桃風はそのままツナの方を振り向き、

「つな！ 投げて!!！」

ツナの方に思いっきり投げた。

「ええっ!?!? ちょ!?!?」

もちろんツナの方に投げたことには意味がある。力の余り無い桃
尻が投げるよりも、一応男子であるツナが投げた方が遠くまで投げ
られそうだと思ったからだ。

「う、うわああっ!?!」

いきなり目の前に爆弾を持って来られたツナは生存本能に逆らう
ことなくそのままイーピンを思いっきり投げた。イーピンもイーピ
ンで大人しくしていたのだが、

「10代目! 購買の新製品ソーメンパン一緒にどースか?」

「獄寺君!?!」

投げた先に丁度よすぎるタイミングで獄寺がやってきてしまい、
イーピンはそのまま獄寺の手の中へ。

「獄寺君危ない!?!」

「早くその子投げて、はやと!?!」

「? はい」

「オレじゃなくてーっ!?!」

獄寺がそのまま笑顔でツナにキラーパス。悪気があったわけでは
ないが。

「うわっ! あと三筒^{サンビン}!?!」

そのままツナが投げたイーピンは、

「パス」

「もどすなーっー!!」

そのままリボーンがトスしてツナの元に、

「あと二筒ニバンヤロー!!」

今度こそ、と投げた先にはまたもや人影が、

「よーツナ。またオレとお前補習だつてよ」

「山本!!」

ポスン、と山本の所にイーピンが、

「? 何だこりゃ?」

「いいから山本!! 思いっきり投げてー!!」

「ん」

投げる、の言葉で目の色が変わる山本。そのまま、

「しょっ」

空高くへイーピンを放り投げた。

そして額の筒子はついにイーピンピンズになって。

ツドオオオオオン……！！

まるで花火のように、大輪と称しても差し支えない光が校庭上空に咲いた。

その後のイーピンは、もう二度とあのような間違いを犯さぬよう、また、未熟な己を鍛錬すると言う意味も込めて、日本で修業を始めたのだった。

といっても、またふとした拍子で爆発しそうになったりしているため、まだまだ半人前だろうが。

第十二話 「ダイナマイトよりすごいものを見ました。」（後書き）

この回は難産でした…。これから更新頑張ります。

第十三話 「再開というのはいつも突然です。」（前書き）

少しだけ出ていたあの人が再登場。キャラ付けが薄くないか心配です。

5月27日 題材にした話の題名を追加
『標的27 跳ね馬デーノ』

第十三話 「再開というのはいつも突然です。」

月 日

いーぴんがド近眼だった事が判明。道理で間違えるはずですよ。あと女の子でした。こちらにも驚き。それとといーぴんとらんぼは仲が悪いみたいです、仲良くしなきゃダメですよ。

それと、きよーこちゃんとはるがいつの間にか知り合ってたみたいです。二人ともケーキが好きみたいなので、今度一緒に行こうと思っただのですが、二人は当然ケーキは食べないらしいです。何かあったのですかね？

第十三話 「再開というのはいつも突然です。」

えー今の状況を簡単に説明しますと、家の前にたくさんの強面で黒服の方たちが勢ぞろいしております。

「……えー」

あまりといえばあまりな状況に思わず絶句する桃風。黒服って、黒服って。

「あ、あのー……」

恐る恐る近くにいる人（こちら黒服）に声をかけてみた所、沢田家以外の者は通さないと言われたが、自分が沢田桃風姫であるという事を伝えるとあっさり通してくれた。

（見た目ほど怖い人達でもないのかな？）

人は見かけによらないとよく言われるが、あの人達はその典型だったのだろうか。いやでもなんだかさつき目に入ったけど銃の手入れを道端でしてる人とかもいたし……。

ぐるぐると思考の迷宮に入っていく桃風と、そんな桃風を心配しているのか、柔らかく頭を撫でてくれる黒服の皆さん。あ、やっぱり優しい人達なんだ。

「ただいまー」

「おう桃風、帰ったな」

「せんせー？ あの人は？」

「エスプレッソ淹れる」

「……うん」

質問を軽くスルーされた挙句アゴで使われる桃尻。だが何も言わない、リボン相手に言えるはずが無い。

「二人分な。なかつたら紅茶でいーぞ」

「? うん」

お客様でも来ているのだろうか。聞き返す前にリボンはそのまま二階に昇ってしまったから、まあいいかと考えてコーヒーと紅茶を淹れる。

二階に上がって耳をすましたところ、どうやらリボンとそのお客様がいるのはツナの部屋らしい。

「こんにちは、と軽くノックすると、いつものリボンの声と、陽気なお兄さんの声。」

「失礼しまーす……」

いつもツナがいる時はノックしたり声掛けたりはしない桃尻だが、今日はお客がいるので別。ドアを開けると、テーブルの前にいるリボンと、なにやら外から持ち込んだらしき真っ黒いイスに座る。

「よっ」

金髪のお兄さん。

「……どうも」

……どう……反応したらいい？

「桃凧」

「あ、うん……」

桃凧を見上げるリボンに促され、座った桃凧はリボンにはエスプレッソを、金髪のお兄さんには紅茶を、それぞれ目の前に置く。ちなみに自分はどさくさにまぎれて作っておいたココアを。

「……はじめまして？」

「おう、はじめまして。ボンゴレの次期補佐さん。オレはキャバツローネファミリー10代目ボスのディーノだ」

「あー、なるほど」

さらりと言われた問題発言をそのままさらりと流した桃凧に目を丸くするディーノだが、一拍置いてそのまま笑いだした。

桃凧としては、ディーノの言っている事が本当なのだとしたら外にいる黒服の人達の事も容易に受け入れられるし、あのリボンのお客さんなんだからそのくらいは普通なのではと思っていたし、なによりもディーノの纏う空気がそんじょそこらにいるではものではない感じがして……。

そう思っていた故の反応なのだが、どうやらディーノからしたら意外な反応だったらしい。

「ははっ。中々度胸があるじゃねーか、リボンもいい教え子持っ

て幸せだろ？」

「問題無さ過ぎてむしろつまんねーくらいだぞ」

撃ちがいがねえ。と銃を持ちながらどことなく残念そうな顔を浮かべるリポーンに、桃凧とは言わずディーノまで頬をひきつらせた。

「そ、それで…。で、でい…でいのさんは何でツナの家？」

「え、あ…おう」

話をそらそうとディーノに質問する桃凧。途中で名前が難しくくて呼べないため所々噛んでしまったが、どうやらスルーしてもらえた様子。……それとも名前を間違えるような年齢の子供だと思われるのか…もしそうだったら後から訂正しなくては。

しかし、わざわざ遠くからこのような大所帯でやってくるからにはそれなりの理由があるわけで、しかもそれがマフィアがらみになれば必然的に危険度は増しそうな予感がする。

来たるべき衝撃に対して驚かないと決めた桃凧は緊張しながらディーノの言葉を待った。

そしてディーノは、

「いや、別に遊びに来ただけだぜ」

「へえー…へ！？」

あまりと言えばあまりな発言に思わず桃凧は心の中で「そりゃな

いだろ」と突っ込んでしまったという。

「なるほど……兄弟子さん……」

「まっ、そういうことだな」

その後の説明によると、なんでもディーノは元リボーンの教え子で、つまり桃凧達の兄弟子に当たるといふ。

それで弟分の様子を見にわざわざ遠くからここまでやってきたとの事。暇なのかとも思ったが、あんな大勢で来るからにはそれなりの準備もしているのだろうし、まったくの暇というわけでもないのだろう。

とこうで、

「あの…、でイーのさん」

「何だ？」

「……………何ですか？ この態勢」

そう、いま桃凧はディーノの膝に抱えられている状態である。

膝に抱えられている状態である。

「なんつーかさー、町にいるガキ共思い出してよ」

そのままなでなでと頭を撫でてくるディーノ。

解せぬ。

「……私は、中学生、なのですが」

決して小学生ではない、思春期真っ盛りの中学生だ。子供扱いは（確かにまだまだ子供だが）止めて欲しい。

どうしたものかと悩んでいる桃凧はそのままディーノに背中を預けるように寄りかかる。ふと、ディーノの懐で何かがごそごそ動いているのに気づいた。

「……？」

「お、起きちまったみてーだな」

そついいながらディーノが懐より取り出したのは、

「かめ？」

「ん、ああ。こいつはカメのエンツィオって言ってな、リポーンから貰ったんだ」

「へー……」

物珍しさからか、そーっと桃凧が指をエンツィオに近づけてみる

と、

がちんっ

ちっ

「……………」

近づけてみると、

がちんがちんっ

ちっちっ

「……………」

とにかく、気性が荒いという事だけは分かった。噛まれそうになつたし。

「寝起きで機嫌悪いみてーだからあんまり触らない方がいいぜ」

「はー」

そういえば、忘れていたけどツナはどこに行ったのだろうか？ いや忘れていた自分が言える事じゃないのだけど。

するど。

「じゅめんなさいね、手間かけちゃったでしょうっ？」

「い、いえいえ」

ドアの向こうから聞こえるのは聞きなれたツナの声と、どこかで聞いたような。

「リボン…！ どういうことだよこれは…？」

「あらあら、ずいぶんディーノと仲良くなったのね」

そこにいたのはツナと、

「リーた、さん？」

年齢所属その他一切不明の麗しの美女は、にっこりとほほ笑んで見せた。

「遅かったじゃねーか、姉貴」

「あ、姉…！？」

いきなりの再開に呆然としている桃凧に、更に畳みかけるように情報が入ってくる。確かに、二人の顔立ちやら何やらを見比べてみると、かなり似ている。これなら姉弟でも納得できるが。

しかし、もしそうだとすると。

「じゃあ…リーたさんが言ったダメダメな弟ってでいのさんの事…？」

ぼつりと、思わず考えていた事が漏れる。

「…おいおい姉貴。何桃凧に教えてんだよ」

「ふふ、的確でしょう?」

傍目からは仲の良い会話をしている姉弟を見ながら、正確にはデ
イーノを見ながら、桃凧は茫然とした。

だって、リータいわく自分の弟はどうしようもなくダメダメで部
下の前だとかっこいいけど家だとドジで…とか言ってたのに。デイ
ーノを見ているとどうしてもそう思えない。それとも今が部下の前
だからだろうか、とりあえず今の状態では想像が出来ない。ギャッ
プが激しすぎる。

「桃凧」

「は、はい!」

凜とした声。

「久しぶり」

「お、久しぶりです」

思いもよらない再開の緊張で固まる桃凧に対してくすくすと楽し
そうに笑うリータ。

「驚かせちゃったかしら?」

「はい…まあ」

「ハルは元気？」

「元気です」

少し元気すぎるくらいには、とは言わないでおこう。

「しかし、リータさん。何故つなど一緒に？」

疑問に思った事をぶつけてみると、リータは困ったように苦笑した。

「ああ、それね……。少し町を見てみたいと思って出かけたのだけど、道に迷ってしまってたね。困っていた所に偶然この子がやってきたのよ」

「へー……」

確か、桃凧とリータが出会ったきつかけも道に迷ったリータが桃凧に話しかけてきたからで、そして今回もそうであるらしい。リータは意外と方向音痴なのだろうか。

「やっぱり日本の町並みは珍しいわね。ついつい寄り道しちゃったわ」

まあ、でも。

楽しそうなりータに何か言うのも無粋というものが。

「それで今回はどれくらいいるのですか？」

「んーとね…」

頬に手を当て、少し考えるそぶりを見せたリータだったが。直後、その眼差しが鋭いものへと変わった。

「桃凧！」

「え？」

ぐい、と桃凧を引き寄せたリータはそのままどこから取り出した日傘を振りかぶり、直後に目の前にやってきた黒い塊を思いつきりすっ飛ばした。

高速で飛来していく物体はリータの傘に弾き飛ばされ、窓の外へと飛んでいく。

「デイーノ、行ったわよ！！」

「おう！ てめーら、ふせるー！！」

リータによって外に飛ばされた鉄塊：形状を見るに手榴弾、をデイーノが下にいる部下に当たらないように窓から身を乗り出し持っている鞭で更に空高くへ放り投げた。

手榴弾の爆発をバックに華麗に着地するデイーノ。その姿は元からの容姿の端正さも相まってものすごく、

「「かつこいいい…」」

思わず、といった調子で呟いてしまったツナと桃凧。

「いい？ それはおもちゃじゃないの、遊びに使ったりしてはダメよ。解った？」

「うっ…」

「…」

視界の片隅ではリータが腰に手を当ててどうやら今回の出来事の犯人である（どうも、ランボが手榴弾を持ったままイーピンと追いかけてこをして、躓いた拍子に手に持っていた手榴弾が桃凧の方に飛んできた）らしいランボとイーピンを叱りつけていた。

イーピンは元から聞きわけのいい子だから素直に謝っているようだが、ランボの方は納得していない様子。もつとも、あの無鉄砲なランボが大人しく説教を聞いているというのも珍しいと思うのだが。

なかなか謝らないランボの様子にリータはため息一つついた後、視線を合わせるようにしゃがみ込む。

「悪いとは言って無いのよ…。楽しかったんでしょう？ でも、迷惑をかけたんだから謝りなさい」

優しく、しかし厳しく。二律背反でありながらも、それを押し通すことのできる強さと迫力。

（ふわふわして優しく、でも強くて。不思議な人だな…）

そう思いながら見ていた桃凧。そしてとうとうランボが折れ、小声ながらも「ごめんなさい」を口にする。その瞬間花が咲かんばか

りの笑顔を浮かべて二人をその胸の中にかき抱く^{いだ}リータ。

リータに抱きしめられたおかげか先ほどまでの落ち込みようが嘘のようにご機嫌になるランボとイーピン。子供の扱いに慣れているというか、人を説得するのが上手というか。

「陰ながらボスを支え、間違いがあれば優しく正す。それがボスの補佐だぞ。桃凧も見習え」

「そしてせんせーはすぐにマフィアに持っていくし…」

半分以上はこじつけなのではないかと思われるリボーンの言葉に半分くらいは呆れながら呟く桃凧。とうのリボーンはそんなことも露知らず窓の外で部下と話しているディーノに声をかけた。

「ディーノ、姉貴と一緒に今日は泊まってけ」

「なっ!?!」

簡単に話を進められたツナが驚いていたが、そんなものリボーンにはどこ吹く風。

「ん。オレらはいいけどこいつらがな…」

そうやってディーノが親指で指したのは彼の部下の黒服達。確かにディーノとリータの二人ぐらいならともかく、この人数は泊める事は出来ないだろう。

「部下は帰してもいいぞ」

「おいつ。お前何勝手に決めてんだよ！」

淡々と物事を進めていくリボンに思わずといった調子でツナが突っ込みを入れているが、やはり聞いてない。焦れた様子のツナがこちらにも話を回してきた。

「くっ！！ 桃凧もなんか言えよー！！」

「え？ 私はリーたさんがいた方が嬉しいけど…？」

「あらあら、桃凧ったら…！」

きよとん、とした顔を浮かべながら言いきった桃凧と、何やら裏切られたような顔をしているツナ。そして口調では困りながらもどこことなく嬉しそうなリータ。

「それに、つなだってでいのさんいてくれた方が嬉しいでしょ？」

「それは…そうだけど…」

ツナがディーノに憧れじみたものを感じているのは解っているのだ。それでもツナが嫌がっているのは、これをきっかけに更にマフイアに沈みこんでいく事を気にしているだけで、ディーノには泊まっただけだ。そう桃凧は思った。

そしてディーノの方はディーノの方で部下たちは帰ったらしい。どこに帰ったのかと聞かれると疑問だが、大方ホテルなどの宿泊施設だろう。黒服で強面でどう見てもソツチ系の業界の人を泊めることとなるホテルの人達、ご愁傷様です。

「よっしゃ。んじゃーボンゴレ10代目に説教でもたれるか」

「オ…オレのために。そ、そんなあ〜っ」

「よかったなツナ」

「嬉しそうだねつな」

「「いただきます」」

夕食の時間。ツナの目の前には同じテーブルに座るディーノが、桃凧の前にはリータが、それぞれ食卓を囲んでいた。

「さー、何でも聞いてくれ。かわいい弟分よ」

「あー、あの……」

ディーノと向かい合うツナの顔には困惑半分と嬉しさ半分。ディーノに気にいられるのは嬉しいが、マフィア関連の話はしたくないといった感じだろうか。

「む、この卵焼き味が違う」

「それ私がつつたのよ、奈々さんみたいに上手く出来なかったけどね。隠し味にごま油じゃなくてオリーブを使ったから、桃凧からすると珍しいかしら」

「おー、イタリア風味…」

そして桃凧とその向かいに座るリータは仲むつまじく卵焼きをつつきあっていた。しかし、強いし綺麗だし優しいしそのうえ料理も上手とは、なんなのだろうこの完璧美女は。

「そーいや、ツナお前ファミリーはできたのか？」

ディーノの言うファミリーとは言わずもがな、マフィアのファミリーの事だろう。正直、マフィアになる気が無いツナにとってはファミリーなんて欲しいどころかこちらから願ひ下げだ。そんなのいるはずがないと言おうとしたのだが、

「今んとこ、獄寺と山本、あと候補がヒバリと笹川了平と…」

「友達と先輩だから!!」

それより先に先手を打ったりボーンが彼の視点からしてファミリーに入っているらしいメンバーを上げていく。その四人とツナと桃凧を入れれば全員で六人か、ディーノのファミリーを見た後だとしてよぼい感じがするが、少数精鋭だと思っておこう。卵焼きをもぐもぐさせながらそんな事を考える桃凧。思考回路が平和である。

「っていうかりボーンなんでオレなんかのどこ来たんだよ。ディーノさんの方が上手くやってけそうなのに」

「ボンゴレは俺たち同盟ファミリーの中心なんだぜ。何にしてもオレ達のどのファミリーより優先されるんだ」

驚きの事実、リボンみたいな凄腕のヒットマンを家庭教師にできるのだからボンゴレはそれなりの勢力なのだろうと思っただけだが、まさかそこまで大きな組織だったとは。ますます騒動が大きくなっていくことに辟易するツナと、自分の知らない世界の事情を知れて少し嬉しそうな桃凧。こういうときは両極端な双子だ。

「まあ、ディーノ君」

奈々が何かに気付いたような声を上げる。その視線の先には、

「あらあらごぼしちゃって…」

「うわっ!?!」

「ある意味器用だ…」

「…だからあなたはナイフとフォークを使いなさいっていったのに…」

ぐちゃぐちゃになった焼き魚と零れたご飯、散乱したおかずと、とても見ていられない惨状になったディーノの食卓。桃凧の前で呆れているリータを見る限り、いつものことのようにだ。

そういえば、リータは部下がいないとディーノは半人前なのだと言っていた。そしてこの場にいるのはリータとディーノと桃凧だけ…。

ということは、まさか…。

「またリボンはそういう事を…ツナたちが信じるだろ？ 普段フ

オークとナイフだからハシが上手く使えねえだけだっ…」

「な…なんだ。そーですよね!」

ツナの前ではディーノがそんな事を言っていたが、はたして本当なのだろうか。リータの前情報があった身としては果てしなく心配だ。

ふと、リータが思いついたように。

「そっいえばディーノ。エンツィオは？」

「あ」

今「あ」って言った! 「あ」って言った!!

「キャアアア!!」

お風呂場に行つてくると言つて席をはずしていた奈々の悲鳴。もしかしなくても原因は。

「母さん!？」

「どーしたんだ!」

「馬鹿っ! ディーノ!」

ディーノが椅子を跳ね上げ立ち上がる。それを慌てたように止めるリータ。その理由は次の瞬間明かされることとなった。

「でっ！！」

びたーん！！ という効果音がとてつもなく似合う感じでディーノがすっ転んだ。

「だっ、大丈夫ですか？」

「つつつ…、自分で自分の足を踏んじまった…」

「は？」

「ほれ見る運動音痴じゃねーか」

運動音痴というよりもはやドジの領域なのは…と思う桃凧。自分で自分の足を踏むなんて、ツナどころか運動が苦手な桃凧ですらめったにやらない珍事だ。

「お、お、オフロに、オフロに〜！！」

バタバタと涙目で走ってきた奈々の混乱しきった言葉に従い、風呂の扉を開ける。と、

「……………！！」

人と同じくらいに巨大なカメ。どこかで見た事あるような…。

「エンツイオのやつ、いつの間に逃げたんだ！？」

「え！？ あれさっきのカメなの！？」

エンツイオは水をかけるとふやけて膨張するスポンジスツポン。
巨大化したエンツイオはその大きさに比例して凶暴化しており、家
一軒は軽く食べてしまう。

お風呂場に行ったのは水を求めるカメの帰巢本能みたいな何かな
のだろうか…。と現実逃避しながら考える桃尻。ちなみに言ってお
くが、スツポンはカメ目に属しているためカメの仲間だが、種類名
のスツポンではなくカメの方がかわいいからカメって呼ぼう。

「でもどつちかって言うとかめより爬虫類だったらかえるとかのほ
うがいいな…」

「桃尻！ しつかりしなさい！！ 桃尻！！」

「かーえーるーのーうーたーがー…、はっ！」

リータに揺さぶられてようやく意識を取り戻した桃尻。現実逃避
というより現実逃亡をしていた間にも状況はどんどん動いているら
しい。

「リーたさん…さっきの傘は…」

「アンブレローネ日傘は狭いから使えないわ。それにエンツイオを叩くんじゃなく
て止めるのが目的だもの」

少し困った様子で答えるリータ。そして今回の騒動のほぼ元凶で
ありエンツイオの飼い主でもあるディーノは、

「下がってる。誰も手を出さずんじゃねーぞ。てめーのペットの世話
もできねーよーじゃあキャバツローネファミリー10代目ボスの名

折れた」

そういいながら鞭を取り出すディーノはかっこいい……のだが。

「……………桃尻。離れなさい」

「リータ、さん？」

冷や汗かいたリータが桃尻を風呂場の外に追いやる。よくわからないけど、きつと何かがある。

「ちょっと……いつてくるわね？」

にっこり笑うリータに対して、「どこにですか」とは絶対に聞けなかった。

第十三話 「再開というのはいつも突然です。」（後書き）

この後ディーンはリータに叱られボコボコにされます。そしてエンツイオはキレたりリータに捕まります。今の所リータは怒らせたら怖い人ナンバーワン。

それと補足というか、何というか。

登場人物の皆さんは桃風ちゃんに対して大なり小なり好意を抱いています。それはあくまでlikeでありloveではありません。友人としてとか、妹としてとか、そういう感情なので。女性として見ている人は今の所いなかったり。でも愛されます。

人物紹介？

名前

リータ

説明

ディーノの双子の姉。

金髪の髪を腰辺りまで伸ばしており、瞳の色はディーノと同じ。本人に自覚は無いが、道を歩くと100人に100人が振り返る超絶美女。

性格は優しく、ふんわりとした包容力を持つ人。また、ボス補佐としての能力も高く、精神面でも肉体面でもディーノを支えるファミリーのナンバー2。

戦闘では主に日傘を使った接近戦を好む。日傘は特注で作らせた品で、どれだけ殴ったりしても壊れないスグレモノ。

怒らせると怖く、怒った時のリータには誰も口出しできない。

ファミリーが納める街で身寄りのない子供達を保護する施設を経営しているため、子供の扱いに慣れている。

実は重度の方向音痴で、地図があっても迷う。ナビを見ても迷う。今の所自分の家で迷った事はないが、ディーノ辺りにいつか迷うんじゃないかと心配されている。しかし本人は迷ったなどという気は欠片もなく、散歩していたという発言だけで片づけてしまう。

あがり症な面も持っており、部下の前ですらまともにしゃべれるようになるまで結構掛かったりした。桃凧は彼女の事を完璧な美女だと思っているが、実は結構欠点があったりする。

好きなものは子供。

嫌いなものは傷つける人。

服装はワンピースや麦わら帽子をよく着用する。その姿は容姿も相まって深窓のお嬢様のようなようである。

人物紹介？（後書き）

前話に出てきたリータさんの、今の所判明しているプロフィールの紹介です。桃風にも師匠のような存在が必要だと思って考えたキャラクターですが、いかがでしたでしょうか？ 個人的には優しいお姉さんキャラは気に入っています。

第十四話 「お見舞い行ったら色々な人に会いました。」（前書き）

5月27日 題材にした話の題名を追加

『標的29 入院』

第十四話 「お見舞い行ったら色々な人に会いました。」

月±日

でーのさんは、かつこいいです。確かに少し不安な所がありますが、いつもはかつこいいですし、部下の前だと一騎当千な人です。

しかし、いくらでーのさんでも許せない事はあると思うんです。

つなを強くするために修業したのはいいんです。つなを強くすることには賛成でしたから。

しかし、そこでうっかりつなに大けがさせるのはどうかと思うんです。

話を聞くと、つなげがをしたのはつな自体のうっかりもあったみたいですが、しかし最初からえんついおが戦う相手というのもあるんじゃないでしょうか。

なんて事を考えていたら、つなが入院している先の病院にお見舞いに行くことになりました。

というわけで、行ってきます。

P・S 『勝手に読んじゃってごめんなさいね。面白かったわよ。デ
イーノにはよく言っておくから、あまり怒らないであげてね。あと、
男の子に怪我はつきもの。怪我した分だけ成長するから、あまり心
配はいらないわよ。 リータ』

第十四話 「お見舞い行ったら色々な人に会いました。」

「おお…いつの間に」

桃風がいつも書いている日記帳。その名も『桃日記』。ピンク色
のノートにマジックで書かれた名前が子供らしさを感じさせる一品
だ。

そして一番最近に書いた日記のすぐ下に、流麗な字でコメントが
書かれてあった。

最後に書いてある名前を見なくてもわかる。十中八九リータのも
のだろう。

しかし、いままでは自分以外に見る人などどこにもいなかったか
ら色々書けていたが、見られているとなるとうかつな事はもう書け
ない。リータは「面白かった」と返してくれたみたいだが、それが

どういう意味での「おもしろかった」なのか…云々。

「桃凧！。お客さんよー」

考え込んで悩んでしまった桃凧の耳に、下の階から呼んだのである。奈々の声が聞こえてきた。

「？ うん」

この時間に誰だろう。恐らく時間帯からしてくるのは山本か獄寺か…そう考えていた桃凧だったが、玄関にいる影に思わず硬直した。

「どうも」

「…はい」

大きい体格に野太い声。とどめは真っ黒い学ランにリーゼント。そして斜はすに啞はえてある葉っぱ。

「お久しぶりです。くさかべさん」

「お久しぶりです。桃凧さん」

草壁くさかべ哲矢てつや。雲雀が委員長を務める並盛中の副委員長であり、雲雀からの信頼も厚い。はたから見たらそうでもないが、雲雀から考えてみると厚い方なのだろう、多分。

実を言うと、夏休みの時に雲雀からの手紙を届けてくれたのは彼だった。その時は暑さのあまり頭がよく回っていなかったが、冷静に考えるとこの図体は目立つ。時代遅れに見えるはずのリーゼント

に学ランのロンビが普通にマッチして見えるほどに。

「それで、今回は」

「委員長より、言伝を承ってまいりました」

またか。

心の中でそう思った桃凧には気づかず、草壁はそのまま手に持っていた封筒をこちらに渡してくる。

今回は一体何だろう。確か書類は片づけてるから溜まっではないはずだし…。

そう考えながら封筒を開けた桃凧だったが、

そこに書いてあったのは、『 号室、メロン』の文字だけだった。

「……………」

「実は…委員長は今風邪をこじらせて入院しています」

「へー風邪……………え？」

草壁が言った一言、それに桃凧の思考がフリーズした。

「風邪？ あの雲雀が？ しかも入院？ 風邪で？」

(……………いやいや分かってるよ。風邪だってこじらせれば大変だし、

きよーやはよく屋上とかで昼寝してるし、それで風に当たり過ぎたのかな、風邪だけに。でもきよーやが風邪で入院とか変な冗談にしか聞こえない…。しかも、しかも最悪な事にあの病院にはつなが…

「桃凧さん、桃凧さん」

「ふぁ…はい？」

毎度おなじみの如く考えすぎでぐるぐるとしていた桃凧だったが、草壁の声で我に返った。

「くさかべさん、メロンってあの果物のメロンですよね」

「恐らくは」

「メロン買うのって私なんですか」

「……恐らくは」

うわーお。

つなの入院見舞に行くだけだったのが、唐突に新たなミッションを言い渡され。

（……どうしよう）

桃凧の心の声は、どこにも届かない。

「こんにちは、きょーや」

「遅いよ」

結局、雲雀には逆らえなかった。

がさごそとビニール袋を揺らしながら指定された部屋に行った桃
凧の目に映ったのは、黒いパジャマに身を包む雲雀と、その足元に
倒れ伏す者達。

……いつも通りの光景だ。

特にツツコミを入れることも無く、桃凧はそのまま持っているビ
ニール袋を雲雀に渡して帰ることにした。何か関わらない方がいい
気もしたし。

「きょーや、はい、メロン」

「……ねえ」

「じゃー私はこれで」

「ちょっと」

「あっ」

帰ろうとしたのだが、踵を返した瞬間に雲雀に襟首を掴まれ脱出

不可能。どうしたのだろうか、何か問題でもあったのだろうか。

「これ、何？」

「メロン」

「……、」

ぐん、と後ろの雲雀からの殺気が増した気がする。

終始無表情な雲雀だが、襟首に込められている力の強さが半端ではない。別に怒らせる気はなかったのだし、これで大丈夫だと普通に思っていたのだが、雲雀からしてみれば激怒に値するものだったようだ。

そんなに嫌いだったのだろうか。

「美味しいのに…濃厚メロンキャンディ」

「メロンじゃないでしょ、これ」

「メロンだよ。メロン果汁70%配合のまごう事無きメロンだよ」

ぎりぎりで見えない所での押し合いを続ける桃凧と雲雀。このままでは終わらないと判断した桃凧は少し考えた後、口を開いた。

「きょーや、中学生のお小遣いでメロン一玉は無理です」

「知らないよ」

「うわあお」

理論的な事を言ったはずだったが、そのまま暴君論で返されてしまった。もうどうしようと。カットメロンしておくべきだったか。そもそも病人がお見舞い品のリクエストというのもあれなのが。

ちなみに余談だが、雲雀は桃尻にあまり武力行使をすることはない。たまにアイアンクローを決められたり襟首つかまれたりすることあるが、他と比べたら平和なものだ。

一度その理由を雲雀に聞いてみた事があったのだが、帰ってきた答えは「何か、荒く扱うとすぐ潰れそうだから」だった。彼にとつて私は一体どういう存在なんだろうと切実に疑問に思った瞬間でもあった。一番ありえる可能性が小動物つて。

ふと、雲雀が掴んでいた手を離れた。不思議に思い振り返ってみると、そこには呆れ果てたという表現が最も似合いそうな顔をした雲雀が。

「結局、いつまでたっても小動物は小動物だね」

「大丈夫、美味しいと思うから。食べたことないけど」

それじゃ、健闘を祈る。と親指をサムズアップして帰ろうとした桃尻の背中に、雲雀から声がかけられた。

「？ わっ」

「あげるよ」

振り向くと同時に視界に飛び込んでくる飛来物。受け取る事が出来るような反射神経があるはずもなく、そのまま飛んできた物体は桃凧のおでこにぶつかって地面に落ちた。

「…?」

目の前で閉まった扉を視界の片隅で見ながら、桃凧は飛んできた物体を拾い上げる。

個包装がされていて、緑色の中に黄色いアクセントが可愛いそれは。

「メロンキャンディシークレット……パイナップル味」

てくてくと廊下を歩く。すれ違う人は病院だけあって様々。

車いすに乗った男の子もいれば、松葉杖をついたお爺さん。忙しそうに看護婦さんが歩きまわって、女の子たちが喋りながら歩いて行く。

普通の光景。特に何かがいまい浮かぶこともない。しいて言うなら、この空間にいる人々は皆楽しそうだ。日中の陽気だからなのか、それとも自由な時間に喜んでいるのか、それは分からないが。

「…あれ…?」

ふらり、宙をさまよっていた桃風の目線が一か所を向く。そこにいたのは見慣れた姿。毎朝会っている。

「たけしー」

「ん？ 桃風か」

振り返った人物はやっぱり桃風の予想通り。ツナの友達で桃風の友達でもある山本だった。

普段は学生服か野球のユニフォーム以外あまり見た事が無い桃風だったが、今日はラフなジャケットにTシャツ、ズボンというとても山本らしい恰好だった。

「つなのお見舞い？」

「おう、親父が船盛り持って行って言ってるよー」

「持ってっただ……」

病院にいる人間に生魚を持っていくというのもアレだが、それまでここまで担いで持ってきたのであろう山本もすごい。

「そういえば、ツナの病室ってどこ？ さっき行ったんだけど別の所に移ってて分からなかったの」

そう。ついさっき桃風はツナの病室にお見舞いに行ったのだが、肝心のツナがどこにも見当たらなかったのだ。同室の人に聞いても「知らない」の一点張り。心なしが顔が青かったのが印象に残って

いた。

それを聞いた山本はちょっと困ったように頬をかいて。

「ツナのやつか？ だったら病室移動したらしいぜ。どこに行くのかまでは聞いてねーけど…」

「なんと」

道理で分からないはずだ。

しかし、だとするとツナは一体どこに？

「ねー、たけ…」

ドオオオオン

「……今の音って、何だろう？」

「？ 花火みてーな音だったな」

音もそうなのだが、窓の外が一瞬光ったのも見過ごせない気がする。音といい、閃光といい、どこかで見たような気がする。

しかし、考える暇もなく自体は動いて行く。

「はい、どいてどいてー！ー！」

「しっかりするんだ、君！」

「うっ…じゅ、十代目…」

がらがら。と患者さんを運ぶストレッチャーと共に医師の方々が走っていく。そしてそこに乗っていたのはやっぱりどこかで見た事があるような。

「……あれさ。はやとだよね」

「あ…。そーいや、来る途中で何回か車にひかれたって言ったからな…」

恐らく、ツナが心配で心配で注意散漫になってたのだろう。それは仕方ないが、ボスを守るべき右腕がボスと一緒に入院というもおかしな話だ。

「…後でお見舞いに行こう」

お見舞い品は、何がいいだろうか。

「……、」

ツナのお見舞いにいざ行かんとしていた桃風だったが、今はさすがにここはちよつとな…。と思っていた。

この、何に使われているかよく用途の分からない部屋。

すごく、入りたくない。別に幽霊が怖いとかそういうのではないのだが、何か入りたくない。よくわからないからこそ入りたくない。とにかく入りたくない。

「おじゃ…」

そこには。

ぶくぶくとガラス管に浮く骸骨。なにやらよくわからない医療器具に、どこからか聞こえてくる物音。正直言って、マッドサイエンティストの研究所という言葉がしっくり来る。

「あ！ 桃…」

「…しました」

ぱたん。と扉を閉じておいた。

「……帰るっ」

ついでに、獄寺の見舞いに行つて。

「と、桃風さん！…」

「ちっほーはやと、元気…じゃないね」

「さ、サーセン…お見苦しい所を…！」

獄寺を探して三千里。さすがにそこまで長い距離を歩いたわけはなかったが、ちよつと病室が分からなくて迷った。まあ、あの怪我では重症患者の部屋にいるだろうとは思っていたが。

「十代目は大丈夫っすか？　なんかリボンさんに別の部屋を手配されたらしいんですけど…」

ああ、あの部屋はそれですか。

妙に納得しながらうんうんと頷いている桃凧に獄寺が不安そうに声をかける。それに桃凧は安心するように返しておくと、獄寺にお見舞い品を差し出した。

「？　それは？」

「お守り。怪我しないように」

実を言うとここに来る前の売店で買ったものなのだが。

しかし、そんな事情は知らない獄寺はプルプルと震えながらお守りを受け取ると、感涙した。

「オレの体をそこまで心配してくれるなんて…！！」

「うーん…」

そこまで喜ばれると、なんというか。適当に選んだのが申し訳なく思ってくる。

「ごめん、もつといいの選んでくるべきだったね」

「いいえ！！ 桃凧さんが差し出したものでしたら例え水道水でもアルプスの天然水以上ですから！！」

「そ、そこまで？」

やっぱり獄寺のツナ好きは異常だ。いくらツナの妹だからって、普通の中学生の自分にもそこまでかしこまらないでいいのに。

「とりあえず、お大事に」

「はい！ もうここから一ミリも動きません！！」

「それはやめておこうね」

それではー！ とぶんぶん手を振りながら見送ってくれた獄寺と別れて、桃凧は病院を後にした。外に出て、一回伸びをする。すると、

「あ！ 桃凧発見だもんね！！」

「 ?!! 」

「 ? 」

またまた聞き慣れた声に振り返ると、ランボとイーピンが駆けよってきた。

久しぶりに見た気がする二人の姿にふわりと桃風の顔が綻ぶ。やっぱり、小さな子はかわいい。

「ジュース買ってー!!」

「うん。いいよ」

「 ” ” 」

ぐいぐいと手を引かれて歩いて行く桃風。ランボ達に合わせるように小走りで、しかし追い越さないようなスピードで歩いて行く。

引っ張られながら、ふわりと思い浮かんだ事は。

(……濃い一日だったな)

だった。

第十四話 「お見舞い行ったら色々な人に会いました。」（後書き）

出来るだけ多くのキャラを出すように心掛けた今作。一番あおりを食ってるのはツナのように見えますが、いちどもでていないディーノやハル、京子の方がかわいそうだったり。

時系列的には山本に会った時はツナは雲雀さんの病室に移されてました。あとちょっと待てば会えたかもしれないのにね。爆発音はもちろんイーピンです。

そして獄寺に関しては少し誤解している部分がある桃凧。獄寺はツナを尊敬。自分もツナの妹も獄寺が尊敬。だと思っています。実際は桃凧も獄寺が尊敬。ですが。つまり自分が尊敬されているのはツナの妹だから、と思ったり。獄寺は桃凧の気遣いが嬉しいんですよ、ツンデレだからね。素直じゃないからね。

番外 「過去の記憶の一騒動」(前書き)

これまでとは少々毛色の違う作品。全体的にシリアスです。

『オリジナル』

番外 「過去の記憶の一騒動」

桃凧の事？ 妹だけ…え？ そういう意味じゃないのかよ？
人間的に？ なんだソレ。うーん…。

そうは言っても妹だとしか言いようがないんだけどな…。

って、うわ！？ ちゃ、ちゃんと考えてるってば！！ だから銃
向けるなって！ 怖いだろ！？

まったく…。…はあ？ オレと桃凧の小さい頃の話？そんな
聞いてどうするんだよ。

……他の奴に言わないだろうな。えーと、確か…小学生くらいの
時に。

番外 「過去の記憶の一騒動」

「つな、つな」

ちょこちょこと、自分の服を引っ張る感覚がする。

いや、後ろに妹がいる事は分かっている。無視しているわけでもない、でも、今後ろを振り向くわけにはいかないのだ。

「グルルルルル……」

だって目の前にいるのが、およそツナが会ってきた中でダントツの危険度を誇っている、中田さんちのジヨシーなのだから。

「と、と、とうな…はなれてるよ……」

「えと…?」

じりじりと桃風を後ろに追いやる様に距離を取りながら、ツナは目の前にいる犬に竦み上がりながらも果敢に立ちふさがっている。

普通のツナだったら逃げている。しかし今日のツナは逃げない。

桃風が後ろにいるからだ。

沢田家の家訓のようなもので、男は女を守るもの、というものがある。と言っても、それを言い出したのは『あの』父で、その隣で母はおかしそうに笑っていたが。

しかし幼く純粹で、大人というものに憧れていたツナは、それを「かっこいい」事だと思った。

それからのツナはそれはもうすごかった。朝も昼も夜も桃凧にべったり。周りからは「赤ちゃん帰りした」と笑われたが、それがどうしたとその時のツナなら言い返していただろう。大体、桃凧は少し天然なところがあるのだ。

道を歩いていると飛んできた蝶々を追っかけて迷子になった事もあったし、時々虚空をボーっと見つめてはニコニコ笑っていたりする。(決して怖いとか何を見てるんだろうとか、思っではないない。決して)

よくよく見てみれば放っておけない点は満載で、よく今まで無事だったと呆れるほどだ。天恵とかがついていなくてはやっていけないと思う。

だから、自分が桃凧を守るんだと。

「つな……」

「だ、だいじょうぶだから……しんぱいすんな」

そう思っていたツナだったが、やはり自分一人の力ではどうしようもできない事も存在した。その筆頭が今目の前にいる。

隙を見て桃凧の手を引いて逃げ出そうと思っていたツナだったが、目の前の犬こゝろはそれを許してはくれないらしい。後ろに下がろうとすれば吠えられ、横によけようとすれば唸られ、背を向けた日には追いかけられそうだ。

「なにがしたいんだよお……」

妹の前では泣き言は言うまいとは思っていたのだが、ついついポツリと言葉が洩れてしまう。

「うう…」

一度洩れてしまったら止まらない。次から次へとやるせない気持ちがかみ上げ、ツナの顔がくしゃりと歪む。それでも背中に桃風をかばうのは、ツナの意地か、プライドか。

そして桃風は今にも泣いてしまいそうなツナを心配しながらも、別の事も考えていた。

（おかいもの…）

そう、ツナたちは母である奈々から買い物を頼まれていたのだ。ここは並盛商店街へと繋がる道、ここを通らなければ、買い物はできない。

もつとも、ここ以外にも商店街に行ける道はあるのだが、それを見いつかないのは子供ならではのいうか、なんというか。

どうしようもできない状況の中で立ち往生している双子。しかし、天は二人を見捨てなかった。

中田家の人がジョシーの名を呼んだのだ。ツナたちには強気な態度のジョシーも家の人には従順なのか、唸るのをやめて家の中へと入ってゆく。ツナたちはその隙をついて一気に中田さんちの前を駆け抜けた。

第一の障害、クリア。

第一関門を突破したツナたちの目には、活気ある商店街が映っていた。

さて、次の問題は買い物だ。一応何を買うかは書いてある紙を買ってきているので問題はないが、なにしろ初めてのおつかい、どこかの店に何があるのかもよく分からないのだ。

「どっしょっしょ……」

「つな、つな」

くいくい、と自分の服の裾を引っ張る感触。

「てわけしたらいいんじゃないかな」

つなが半分で、わたしがもう半分。

ぐるりと商店街の右側と左側を指さす桃凧。桃凧の言いたい事は分かる、手分けした方がすぐに終わるし、簡単だと思う。

でも、

「だ、だめ！」

「なんでー？」

「なんでも！」

確かにそれなら早い、でもそれだと元も子もないではないか。

絶対別行動はダメだと言うツナの状態に桃凧は首をかしげていたが、手を引つ張るツナの動きに逆らわずついてくる。

手元の紙を見ると書いてあるのは簡単な食材。内容的に今日の飯は肉じゃががカレーだろうか。どちらにしても楽しみだ。

「やおやさん…やおやさん…」

キヨロキヨロとあたりを見回して野菜を売っていそうなお店を探すツナだが（ちなみに桃凧は道行く人を見つめたり空を見上げたりしている）なかなか見つからない。

ふと、宙を見ていた桃凧の目線が違う所を向く。

「つな、やおやさん」

手を引つ張られた先にあったものは確かに探していた八百屋さんで、あれなら欲しい物のほとんどが手に入りそうだ。

「……」

「なに？」

「…なんでもない」

結局桃風に助けられてしまったような状況になった事になんか釈然としないものを感じたツナだったが、とりあえずは桃風の手を引いて八百屋へと歩いて行く。

「すいませーん」

「お、ツナ坊に桃ちゃんじゃねえか！ お母さんはいないのかい？」

「きょうはおれたちだけです！」

びし！ と背筋を伸ばして言いきったツナに、八百屋のおじさんは快活に笑った。このお店の主人とは以前母と一緒に買い物に来た事があるため、顔見知りだ。

「んで、何が欲しいんだい？」

「ん！」

ツナが母からもらった紙に書いてある野菜を指さす。その微笑ましい様子に八百屋のおじさんは笑いながらツナが指さした商品をごに入れ、財布から取り出された代金を受け取った。

「まいどあり。ところでツナ坊」

「え？」

「桃ちゃんはどこだい？」

そういえば、買い物をするために手を離してしまっていた。

言われたツナが辺りをキョロキョロと見回すが、小さな妹の影は道行く大人たちに阻まれてどこにも見えない。

「……」

やってしまった。

「とーなー!」

名前を呼びながら商店街を歩くツナ、しかし肝心の探し人である桃凧は一体どこに行ったのか。目を離してしまったことを後悔した。

「たぶんこつち……」

桃凧が向かいそうな場所を想定して進むツナ。キョロキョロとあたりを見回すツナの顔には心配とそれ以上の焦燥が浮かんでいた。

はぐれてしまったという状況で浮かべる顔としては確かにふさわしいかもしれないが、今日のツナのそれは格別だ。まるで何かに急かされているように。

ツナは、不安だったのかもしれない。桃凧がいなくなること。

いつもふわふわとしていて、目の前にいるのにどこか違う所にいるような気がして、とにかく、桃凧はそんな雰囲気を持っていた。

だから、眼を離すといつの間にかどこかに消えていて、そしてそれを疑問に思わなくなってしまふのではないかと、そんな不安が。

簡単な話。

ツナは桃凧を守ろうとしていたけど、結局の所桃凧に居なくなつて欲しくないというだけなのだ。

それは正しいことだと思う。

でも、ツナは桃凧をなくすことはないだろう。

きつと、この世にいる全ての人や、桃凧自身より桃凧のことを分かっているのはツナで、ツナのことを分かっているのは桃凧だ。だから、心配しなくてもいい。

どこにいたって、何をしていたって、必ずツナは桃凧に会える。

この双子の繋がりは、それほどまでに深い。

「とうな……とうなっ!!」

遙か先でチラリと見えた琥珀色。その姿を確認した途端に、ツナは走っていた。

「……つな？」

こちらを振り向いた桃凧の顔には普段は絶対に見ない表情が浮かんでいて、不安に思っていたのはあちらも同じだったのかと思った。

走り寄って桃凧の小さな手をつかむ。

今度こそ離れないように、強く、強く。

「つな、かおへんだよ」

「なっ…にがだよ」

「なきそうだよ」

こてり、と首をかしげてこちらを見る桃凧の顔は相変わらず無表情で、澄んだ色をした瞳だけが不安そうに揺れていた。

「こわかったの？」

問いたただすのではなく、確認するような桃凧の声に、思わずこくりと頷いてしまうツナ。

「ねこがね、いたんだよ」

俯いてしまったツナに、優しく語りかけるように言葉を紡ぐ桃凧。

「ちっちゃなこねこでね、ひとりぼっちだったんだ」

声が少し、震えていた。

「あのままおかあさんにあえないんじゃないかとおもって、おかあさんをさがすのをてつだってあげたんだ、けど…」

掴んだ手が、より一層強く握られる。

「おかあさんはね、こねこのこと、おぼえてなかったんだよ」

目の前の景色が歪んでいるのに気づいて、泣いてしまったんだと思っただ。何に泣いたのかは分からない、けど。

「きつと、ずっとはなれちゃったから、わすれちゃったんだね」

話す桃風の声も震えてて、泣いているのだと思っただ。ぽたり、と繋いでいた手にどちらのものとも分からない雫が落ちる。

「わすれないでね」

握った手を包み込むように片手を添えて。そのまま祈るように桃風は呟く。

「どこにいつても、なにをしても、つなは、つなだけは、わたしのことわすれないでね」

きつとそれが、桃風の心の片鱗。

初めて桃風がツナに示してくれた、桃風の不安。

忘れて欲しくないからこそ、急にいなくなったり、迷ったり、離れたのだ。「そこにいるのがあたりまえ」で、「きがついたらいなくなっていた」になっただけほしくないからこそ。

なんて不器用で、強引な方法なのだろう。

「…ひくっ…あ、たりまえ…だろ…」

「…ありが、とっ…」

お互いに両手を繋ぎながら、俯いたまま泣いた。ぽたりぽたりと腕に、手のひらに涙が落ちる。

暖かった。

おつかいを終えて、泣きはらした目で帰ってきた双子を見て、母である奈々は本日一番のとびきりの笑顔を浮かべた。

「おかえりなさい」

ただいま、という声のタイミングは、一緒だった。

番外 「過去の記憶の一騒動」(後書き)

一度は書いてみたいと思っていた双子の過去話。友人からの助言もあつて書いてみましたが、いかがでしたでしょうか？

今回の話の目的としては「ツナにお兄ちゃんをさせてみよう」と「桃風ちゃんの弱みを見せてみよう」でした。

いくらふわふわとしている桃風ちゃんでもやはり不安に思うことはあるはず、そしてそれを一番表にできるのはツナになんだろうなと思つた故にです。

余談ですが、この話の後に桃風ちゃんは少しずつしっかりしていきます。精神的に余裕ができたので落ち着いて物事を見ることができるようになったというか。とうなは レベルが あがった ！

正直言つてシリアスな話を書くのは久しぶりだったし、もうひとつのソラはどちらかというとシリアスというよりほのぼのとした話が多かったこともあつて、受け入れられるかどうかかなり不安ですが、楽しんでいただけたら幸いです。

第十五話 「やっぱり運動は苦手です。」（前書き）

久しぶりの更新です。絶賛スランプ中……。神よー私に力をー。
『標的34 星の王子フウ太』

第十五話 「やっぱり運動は苦手です。」

月 日

りーたさんはしばらく日本にいるようです。

詳しい所は分かりませんが、お正月の時もいましたし、着物姿がとても似合っていました。

そして私を七五三だと呼んだつな、後で覚えとけよ。

授業参観もありましたが、途中からせんせーが乱入してぐだぐだに。つなまで暴走しだして…。大変でした。

あと、昨日が体育だったんですね。そして今日も体育なんです。いえ別にどうというわけでもないのですが。

第十五話 「やっぱり運動は苦手です。」

サッカーである。

「ツナ行ったぞー！！」

「お、オーライ…ぶっ！？」

そしてツナはツナである。

やってきたボールを奇跡のタイミングで顔面にぶち当てたツナ。心配する獄寺の声が余計に恥ずかしい。

「だ…大丈夫だから！！ ボール拾ってくるから他のボールで続けてて…！」

恥ずかしさで顔を赤くしながらツナは皆の輪を外れてボールを探しに行った。

「おーいてて…ゲ、鼻血…。はやく終わんねーかな体育なんか…」

ぶつぶつと呟きながらボールが飛んで行った方に歩いて行くツナだが、ボールの近くに人影がいるのに気付いた。

「ん？」

ストライプのマフラーにジャケットとジーンズ、年の頃は小学校高学年くらいだろうか。そんな少年が、ポツリと立っていた。

「何やってんだ…？ あの子」

不思議に思うツナだったが、とりあえずボールを取りに行こう。そう思っただけで少年の足もとにあるボールを見たツナ。しかし、

ふわりと、ボールが宙に浮いた。

「え、ええー!？」

ふわふわと、少年のすぐそばにあったボールが宙に浮かぶ。ボールだけではない、周りの落ち葉や小石もだ。

そしてこの騒動を起こした原因であろう少年は浮いたボールには目もくれず、宙を見つめながら何事かを呟いていた。

「ツナ兄にいのダッシュユカ8万6千202人中8万6千202位、脚力8万6千202人中8万5千900位、持久力8万6千202人中8万6千182位……」

どこを見ているのかいまわからない瞳でほとんど分からない事を呟く少年。

自分の目の前で起きる衝撃映像に啞然とするツナには気づかず、少年は淡々と分析(?)をしていく。

「よってツナ兄の総合力ランキングは、最下位」

ぱちり、と少年が一度瞬きする。すると先程のふわふわとした瞳から一転、年相応の少年らしいくりくりとした瞳に戻っていた。

それに従い、周りに浮かんでいたボールや落ち葉も地面に落ちて

いく。

「半年ぶりだけど順位変わらずか」。とりあえず書いとくか」

一つため息をついた後、「ごそごそとジャケットの中に手を伸ばす少年。

一方ツナは先程の映像を目の錯覚か何かかと考えようとしていたが、

「よいしょ」

(本デカッ!?)

恐らく少年の身長のお半分くらいはあるであろう本、あれは懐に入るのだろうか。そもそも重くないのだろうか。

そんなツナの心の叫びは知らず、少年はそのまま地面に開いた本を置いて何事かを書き綴っていく。

「これでパンチ力、キック力、走力と最下位か…。がんばってほしいよなーツナの兄キ」

「えっ? …あ」

いきなり呟かれた自分の名前に思わず驚き、声を上げてしまったことに気付いた時は後の祭り。こちらを振り向いた少年の目がいっぱいに見開かれた。

「ああ!?!」

きらきらした瞳がこちらを見る眼差しはなんとというか……そう、「
憧れ」というのが一番しっくりくる感じで、非常にむずがゆい。

「ツナ兄！ 会えた会えた！！ 体育してると思って遠慮してたんだよ僕」

「は！？ だ…誰だっけ？」

子犬のようにコロコロと表情を変えてこちらを見上げてくる少年には、残念ながら覚えはない。しかし向こうはこちらを知っているようで。もじもじと顔を赤らめながらこちらを見上げてくるその姿はある特定の性癖の人には垂涎ものだろう。

「か…勝手にツナ兄って呼ばせてもらってるよ！ これからもそう呼んでいい？」

「はあ！？」

混乱するツナにかまわずどんどん話を進めていく少年。だが、何かに脅えるようにびくりと身をすくめたと思ったら慌てて逃げ出した。

「さ、さいならー！！」

「あ、ちょ…、ってうわ！？」

そして少年の後を追うように複数の黒服が真昼間の学校に大挙して走り抜けていった。無論、ツナをガン無視してである。

「……」

なんじゃありゃあ。

そしてその頃桃凧は。

「うにゅ〜」

応接室で絶賛サボタージュしていた。

「……………」

そして雲雀の視線が痛い。

しかし、なにも桃凧は体育が面倒だからとかそんな理由でサボっているわけではない。これにはちゃんとした理由があるのだ。

「体、痛い〜……」

どうやら原因は昨日の体育らしい。少しばかり張り切り過ぎてしまったようだ。

それはともかく体超痛い、めちゃくちゃ痛い、これでもかというほど痛い。

しかし、筋肉痛程度で体育は見学にならないのだ、たとえどれだ

け筋肉痛が酷かろうと、筋肉痛では見学扱いはされないのだ。

だったらもうサボるしかないじゃないか。

「うう……」

そんなわけでゴロゴロしていたのだが、よく考えなくても桃凧の話はまったくの詭弁。アキラメロとしか言いようがない。しかしこの場にいるメンツでは桃凧に懇切丁寧に注意してくれる人物は誰もいないのだった。

そんなとき、

「……委員長」

心なしか、困った様子の副委員長の声が聞こえてきた。

申し訳なさそうに応接室の扉を開けた風紀委員副委員長草壁。ソファの上でダれていた桃凧に一度会釈をすると雲雀に向き直った。

「……何？」

一方の雲雀は応接室の人口密度が増えたことで少し不機嫌な様子。これは私が出て行った方がいいのか、ああでも動くの面倒くさいななどと桃凧が心の中で葛藤していると。

「桃姉^{ねえ}!!」

ぴよこん、と山のような凶体の草壁の後ろから子犬がのぞいた。

つぶらな目とマフラーが印象的な、小学生くらいの男の子。しかし桃尻に覚えはない。私に弟の心当たりはございません。

が、やっぱりちっちゃくてコロコロしたものが抱きついてきたら抱きしめ返してしまうのは女の子の性さが。しかもそのままぎゅうと抱きしめてしまうのも仕方がない。

「かわいいかわいい」

「あうあうあうー」

ほっぺをむにむにしながら子犬となごなごしている、自分の後ろに気配が。その気配の主である雲雀に、そのまま襟首を掴まれ強制的に応接室から放り出された。

つまりあれか、群れるのなら出て行けと。

「……………」

キョトンとした目でこちらを見上げてくる男の子。ああもつ可愛いなあ。

まあ、とりあえず。

「名前は何ですかー？」

自己紹介から始めようと思う。

「つまり、ふーたは自分の持っている情報とかを狙われて、それで逃げ回ってるの？」

「うん……」

桃凧が手を引いて屋上まで連れて行った少年の名前は、フウ太と
いうらしい。

フウ太が作るランキングは的中率100%で、外れたことはないらしい。そのためそのランキングを狙う輩というのもまた後を絶たず、今回フウ太がここにやってきたのも、ツナに会いたいという理由の他に、ランキングブックを狙うマフィアから逃げ切るためとのこと。

「本当はツナ兄の家に行こうと思ったんだけど……」

「その前に取り囲まれちゃったの？」

うなづくフウ太に、悩む桃凧。

桃凧の心象としては、何としてもフウ太を守りたい。なのだが、現実問題難しいことも理解している。

まず、人数の差。こちらは二人、あちらは不特定多数。

次に、戦力。フウ太のランキングブックが目当てな以上。余り手荒なまねはしないと思うが、あくまで憶測だ。

「うーむ……。そういえば、ふーたのランキングブックって、どうやって作ってるの?」

疑問に思うことひとつ。フウ太自身は戦う力や、どこかに潜入する力は持ってない。だとすると、どうやって調べているんだろうか。

「えっとね、ランキング星と交信するんだ!」

「……ランキング星?」

なんぞそれは。

「わかんねーんだったらやってみればいいと思うぞ」

「うわ、せんせー」

ちょこんと、いつの間にか隣にいたりポーン。相変わらず気配がない。

相変わらずのかわいらしい無表情で、次の瞬間リポーンは爆弾発言を落とした。

「内容は、そーだな。桃風のここ数年の身長伸び具合とか」

「せんせー!?!」

ちょ、おま。なんということを!!

「桃姉の身長ランキング……」

「ふ、ふーた。無理にやらなくても……、っ!!」

フウ太が虚空を見つめた瞬間、ふわりと周りの物が虚空に浮いた。ついでにリボンも。

「な、なにこれ…!？」

「フウ太が自分の脳をレッドゾーンに追い込んで何かをランキングする時、体内にため込まれていたエネルギーが放出されて奴の周りの引力を無効化させるんだ」

「????？」

とにかく、ランキングしているときは浮く、ということなのだろ
うか。

「桃姉の身長が一番伸びていたのは3年前の+2センチだね。それ以降は伸びが少なくなってきた、今年に入ってから……」

「わー待って待って待って待って!! やんなくていい、やんなくていいから!!」

少し話がそれてしまったが、とにかくにも逃げる方法を考えなく
ては。

「せんせー、なんかいい案無い？」

困ったときのリボン頼み、とはまた何ともアレな話だが、これのほかに方法がないのだから大目に見てもらいたい。なんとかしてよりボえもん。

「そーだな……。これでも使え」

「？」

ポイ、といい加減な感じで放られたのは何かのリモコン。それぞれのスイッチには意味を指し示すらしい記号が書いてあったが、桃凧にはよくわからない。

「…これは？」

「センスが良ければなんとかなるだろ。じゃーな」

「?? せんせーどこに行くの？」

「昼寝の時間だぞ」

そういつてクールにリボンは姿を消した。

残されたのは、リモコンひとつ。

「桃姉…」

ぎゅう、とフウ太が不安そうに裾をつかんでいるが、桃凧の目はリボンから渡されたリモコンしか見ていない。

(……暗号?)

まず桃凧が考えたのは、スイッチの模様が何かの暗号になっているということ。リボンだったらありえそうだし、実際リボンが手紙を書いているときに覗き込んだことがあったが、文面は文字ではなく記号。何かの暗号のようだった。

恐らくこれも似たような系統なのだろう。ただ、桃凧にはその暗号を解くすべがないということだ。

適当にボタンを押してとんでもないことになったらシャレでは済まされない。なんというか、あのリボンが渡したのだから半端ものでは無さそうな感じがするのだ。

まあ、わからないものに悩んでいても仕方がない。

「……とりあえず、これは保留として。逃げようか、ふーた」

「！ うん！！」

緊張した面持ちでうなずいたフウ太の手を取った桃凧。

変化が訪れた。

「……………」

くらり、と視界が揺れる。

桃凧の頭に、ぼんやりと浮かび上がる『何か』。

そう、あの時も、手を、握って、いや、取ったのは、自分？
じゃあ、この手、この手の持ち主は、この、暖かくて、優しい、この
手、は。

「……………桃姉？」

「……………」

フウ太の言葉で我に返る。頭に浮かんだことを反芻しようと思っ
たが、ふわりと浮かんだそれはもう欠片も見えなくなっていた。

右見てもマフィア、左見てもマフィア。

「困まれてるね……………」

物陰にてこっそり身を隠す桃凧とフウ太、体が小さいからこそで
きる芸当だ。

「フウ太、こっそり足音をたてないように移動できる？」

「が、頑張るよ」

「おーけー」

こそり、と居場所を変更する二人。地理的な面でいえば、ここは桃風のホームグラウンド。初めて入った奴らには負けないだろう。

「こっち、だね。急いで」

「うん…」

こそり、こそり。

気分としては、ルン三世。美女を前にしたあのダイブは芸術の域だと思う。

「も、桃姉!!」

「へ? ……うわっ!?!」

悲鳴じみたフウ太の声に反応して振り向くと、いきなり襟首を掴まれて思いつきり持ち上げられた。きょーやにも似たようなことをされたことがあるが、アレより乱暴で思いやりがない。

「見つけたぞ!!」

「フウ太を捕まえる!!」

どうやら、自分の襟首思いつきりつかみやがったのはマフィアの連中らしい。首しまったらどうしてくれる。

「ふーた、逃げて!!」

「え、でも…」

戸惑うフウ太。そりゃ、いきなり自分の事はいいから先に逃げなど言われたら戸惑うか。でも、自体はそう簡単ではない。奴らの目的がフウ太のランキングブックである以上、フウ太には何としても逃げてもらわなければ。

「大丈夫、私もすぐ行くから」

「……絶対、絶対だよ!!」

そう叫んで、フウ太は後ろに向かって走り出した。やや足取りがおぼつかないが、外国からここまで逃げながらやってきたのだ、なんとかなるだろう。

さて、今一番の問題は。

「逃がすな! 追え!!」

この殺気立った兄ちゃんたちをどうするかだろう。

「……………離してっ!!」

無駄だとは自分でも痛いくらいにわかってるが、ここは一応暴れてみる。

襟首を掴む手に爪を立てて、それでも離れなければ引っ掻いて。自分の無力さに嫌になってくるが、やめることはできない。もうこれぐらいしかできることはないのだ。

「うー……………!! っ!?!?」

ぶん、と体が宙を舞って、地面に投げ出された。離された、のだらうか。しかし、周りを見るとぐるりと怖いお兄さん。逃げ場がない。

「フウ太がどこに逃げたのか、吐いてもらおうか…」

じりじりとにじり寄ってくるマフィア。絶体絶命の大ピンチといったところだろうか。人間、窮地に陥ると案外冷静なんだなど、他人事のように思う。

ふと、リボンから借りたりモコンが転がっているのが見えた。結局これは何だったのだろうかと思って、

気付いた。

(…あれ？ これって、もしかして)

這いずるように進んでリモコンをつかみ取る、もう一度周囲を見回して、確認して。

祈るように、スイッチを押した。

「さあ、観念して「お兄さんたち」…ああ？」

「上、上」

桃尻の言葉に一瞬不思議に思ったマフィアが上を見上げると、

金^{かな}だらいが落ちてきていた。

「ぐへっ！！」

「ぶじっ！？」

「べほっ！！」

「ぐはあ！！」

「ごんがんごんげーん。と、一昔前のコントのように直撃する金だらい。」

当たった方も当たった方だが、当てた方も当てた方だ。まさか金だらいが落ちてくるなんて誰が想像しよう。少しだけ、リボーンのこと^{こと}が分からなくなった。

簡単な話、スイッチの模様はリボーンの視点から見ても一番目立つ建物やオブジェを記号的にあらわしていたもので、リボーンと同じ視点で見なければ分からないものが多かっただけだ。地面に投げ出されたせいでうつぶせにならなければ絶対に分からなかっただろう。

「まさかのまさかとは概ねこの事……」

「やっとわかったみてーだな」

「せんせー」

すたすたと何食わぬ顔でこちらに歩み寄ってきたリボーン。その

手には一丁の拳銃が、もしかしてあれか、ついさっきまで自分は人前で下着姿になるかどうかの瀬戸際だったのか。

「フウ太はツナの家に向かっているぞ。ここの後始末はオレがしてやる」

「あ、うん」

後始末をするというか、後始末を他人に押し付けるのをしてやるというべきだと思う。

「せんせー、なんか疲れちゃった」

「そーか」

ごろり、と仰向けになって空を見上げると、きれいな青空だった。

ちなみに、帰ってきたツナとフウ太は偶然の遭遇をしたらしく、自分のランキングが初めて覆されたととてつもなくうれしそうなフウ太が報告してくれました。かいぐりかいぐり。

「桃姉えはね、人に好かれやすいランキング上位ひとケタに入ってるよ」

「あー…予想通りって言ったら予想通りかもなー…」

「つな、それは一体どういふことかな？」

第十五話 「やっぱり運動は苦手です。」（後書き）

はい、出てきましたフウ太君です。活発な男の子といった印象だったのですが。ちなみに、桃風ちゃんよりは小さいです。ツナ>桃風>フウ太の順番です。そして数年後身長を追い越されて落ち込む桃風。

桃風ちゃんがほんの少しだけ思い出した『あの人』は、いったい誰なのでしょうか。

第十六話 「甘いものは好きです。」（前書き）

2ヶ月放置のお詫び的な何かで一気に投稿。

『標的36 バレンタインデー』

第十六話 「甘いものは好きです。」

月 日

ふーたのランキング能力は、かなりの高精度でした。いや、目の前で身長ランキングを言われた身としては信じざるを得ないとは思いますが、あそこまで精度がいいとは思っていませんでした。

さて、今日はあの日です。男性にとってはハラハラドキドキの日、女性にとってはワクワクドキドキの日。甘い思いをして勝ち組となるか、しょっぱい涙を飲み込んで負け組となるか、すべては女の子の気持ちしだい…。

まあ、平たく言えばバレンタインです。

第十六話 「甘いものは好きです。」

「桃尻。家に帰ったら台所に来なさい。ハルと京子と私でバレンタインのチョコを作るわよ」

その時、世界が止まった。

のちに少女は、そう語ったという。

まだ寒さの少し残る季節。しかし周りは温かかった。特に、

「山本くん。これあげるー!」

「私も私も!」

「サンキューな!」

山本とか、

「てめーらついてくんじゃねえ!」

「獄寺君チョコ貰って!」

「カツコイ!」

獄寺の周りは特に。

逆にブリザードが永久凍土のごとき雰囲気を持つ生徒もいるが、それに関しては本当にご愁傷様としか言いようがない。イケメンがクラスに二人もいたことを嘆いてくれ。

しかし、浮足立つはずのクラスの雰囲気を押し返すかのように、桃風のオーラは重かった。

桃風の頭の中は、来るべき事態を回避するのといっぱいだったからだ。

元々の発端は、ビアンキの発した何気ない一言から始まる。

『今日はバレンタインだから、手作りでチョコレートを作ろうと思うの』

大量殺戮事件の前触れである。

いや、わかってる。ちゃんと分かっているのだ。ビアンキに悪意などこれっぽっちも無いということは。しかし、悪意がないからって何をしてもいいというわけではないだろう。

正直言つて、桃風に愛でハッスルするビアンキを止めることはまず不可能だ。というより、止めることができるのはリボンだけだろう。

「復活！^{リ・ボン} 死ぬ気で京子のチョココの行方を知る！！」

なんか隣をパンツ一丁のツナが駆け抜けていった気もするが、桃風は忘れることにした。

「さあ、始めるわよ」

「「おー！」」

「おー……」

結局何もない考えが浮かばないまま、チョコを作ることになってしまった。

家に帰った時にまだツナが帰ってないのには少し驚いたが、あのペースだとそうかからずに到着するだろう。

ああああ、そう言ってるうちにビアンキのチョコから紫色の煙が出てきた。どうすれば、どうしたら……。

「……ん？」

こそり、と。台所の入口に小さな影。あれはフウ太と……ツナ？

(なにやって……)

直後、ぶわりと周りの物が宙に浮いた。材料もレシピも道具もすべて例外なくだ。

(これは……ふーたの、ランキング!?)

この状況でランキングをしてどうしようというのだろう。ビアンキを逆なでするだけな気が。

「は、はひー！ 何ですかこれはー！？」

「先生ポルターガイストですー！」

混乱して慌てる京子とハルだったが、ビアンキは冷静だ。リボンへの愛を邪魔された事で怒っているようにも見える。というかあれは絶対怒ってる。

「！ そこにいるのは誰！？」

(つな、見つかったー！！)

美人というのは怒れば怒るほど恐ろしい。整った顔をしているがゆえに、それが歪む様子はまるで般若を連想させる。

つまり何が言いたいのかというと、ビアンキマジ怖いということだ。恐らく子供に見せたらトラウマになるくらいに。

「び、びあんき！ チョコレートから目を離すのは私どうかと思うー！！」

とにかく、ビアンキを止めなくては。しかし止めるとポイズンクッキングの完成が早まるわけで……。

(……腹をくくろう)

……製作者だから味見以外はあまり食べないと思うし。

桃風、意外と打算的である。

「というわけで、辛うじて死守したチョコレートが、これです」

ことり、と目の前に置かれた、包装紙に包まれリボンでラッピングしてある箱が一つ。

「……、」

何やら長つたらしい前口上を言ったと思ったら、どうやら自分は今こんなにも大変だったと言いたかっただけらしい。

しかしこの自分に群れていた時の状況を話すとは、まともな人間だったなら絶対にしない。そういう意味でも彼女は大物かも知れないが。

「本当に守り抜くのが大変だったのですよ。ほめてほめてー」

「何言ってるの君」

ばこん、と丸めた書類で頭を叩けばあうー、と悲鳴を上げる小動物。訂正、これが大物とかありえない。ただ単に頭が足りないだけか。

「そんな家庭内害虫を始末する時のような感じで叩かなくても……」

「僕が小動物相手に本気を出すとても思ってるのかい？」

咬んでもおいしくなさそうだしね。とどこかずれた発言をした少女は、ソファから飛び降りて一緒に持ってきた袋を掴み、応接室の扉に向かっていく。

「じゃねー。きよーや」

「何処に行くの？」

んーとね…。

小動物は一度考えるそぶりを示した後、

「はやとにたけしにりょーへいさんに…チョコレート渡しに行くね」

気持ちって言うのは隠しちゃだめな時もあるんだよー。

そう、満面の笑みで話す少女の顔はなんとというか、『幸せってこんな感じ』とでも言いだしそうな顔だった。

第十六話 「甘いものは好きです。」（後書き）

バレンタインといえば甘ったるいラブコメとかにはお決まりの展開ですが……。

桃凧にそのような思考があると思うてか!!

ぶっちゃけ、バレンタイン「日ごろの感謝を示す日 だとガチで思ってます。好きな人とかいないしね。

ちなみに雲雀をよく登場させる理由は、お互いがマイペースなのでどこかずれた掛け合いが書いててすごく面白いからです。

山本や獄寺だと桃凧がツツコミにまわってしまうのでね……。いや別にツツコミ桃凧が嫌いなのではないのですが。

4万再生突破しました！ありがとうございます!!

というわけで、リクエストを取りたいなと思ってます。

こんな話が見たい！とかこのキャラとかからませてほしい！とか、リクエストがありましたらガンガンどうぞ！さすがに作者の気力的に書く量や質には限界がありますが、耐えられるうちは募集したいと思います。ちなみに、お一人につき一回リクエストとさせていただきます。ご了承ください。リクエストは感想でどうぞ。

……リクエスト、来たらいいなあ……。

第十七話 「鈍感にもほどがあると思います。」 (前書き)

自分でもなにを書きたかったのかよくわからない十七話。

『標的40 道場破り』

第十七話 「鈍感にもほどがあると思います。」

月 日

この間は皆で雪合戦しました。でも寒かったので、私は思いつきり着込んでたらつなに「だるみたい」とつつこまれてしまいました。だって寒いんだもん。

あまりの寒さに偶然現れたきょーやの学ランの下に潜り込んで二人羽織をしようとしたらつなに必死で止められました。

この間はセンサーがたけしに新しい武器をプレゼントしていました。見た目は普通のバットなのですが、望遠鏡が付いていて、さらに高速でスイングすると刀に変形します。

刀の性能はもちろん、打つ、叩く、殴るの三拍子そろった武器らしいです。その三つは同じ意味だとか、つつこんじゃないめらしいです。

第十七話 「鈍感にもほどがあると思います。」

「沢田はおりますか？」

そう言っ て授業中の教室に入ってきた了平。

それが今回の始まりだった。

「実は、おといにさかのぼ……………いやおとつい……………？ おととい？
……………ええいまだろっこしい！！ 沢田を出せ！！」

そう言っ て教師に詰め寄った了平を見たクラスの生徒（ツナ含む）
が、いつもと変わらないなとひそかに絶句したのを了平は知らない。

「つな、つな。返事してあげなよ」

「え、あ……………」

確かに、先ほどから周りの視線が一直線にこちらに來ている。このクラスに沢田は二人いる すなわち桃凧とツナだが。しかし、了平は桃凧の事を名前で呼んでいるため、この状況で呼ばれたのはツナだろう。

「あっあの…何か…」

「おお沢田！ 実は頼みがあっ てな……………」

ツナの蚊の鳴くような声に反して、ツナを見つけた了平はいつもの声で話しかけた。周りの迷惑なんのそのだ。京子がものすごく恥ずかしそうな顔をしているが、あの様子では見えていないだろう。

「りょーへいさん、こんにちは」

「おお！ 桃尻もいたのか。うむ、極限に久しぶりだな！！」

いやいたも何も同じクラスだからいない方がおかしいのだが。

まあ、それはともかく。了平の頼み事とは何なのだろうか。なにやらろくでもない事な気もするが。

「ええいまどろっこしい！！ 説明は後だ！！」

なにしに来たのこの人！？ と、またもやクラスの心は一つになった。

「りょーへいさん、おとつい」「じゃなくて」「おととい」「だと思います」

「そうか！！ おとつか！！」

「いやー…あの…」

「桃尻ツツ」むところそこじゃないだろ！？」

その後了平の連れてきた人物の説明により（結局了平は説明しなかった）、最近並盛では道場破りが頻発している事、それによって付近の道場が困り果てているらしい。

そのために、道場破りを何とかしてするために了平率いるボクシング部が名乗りを上げたとの事。つまりぶっちゃけツナの事をどうしてもボクシング部に入りたい了平によって巻き込まれたらしい。

しかもそれにリポーンがのっかったから話は大変だ。町の治安を守るのはファミリーの務めだとか何とか言っつてツナを無理やり道場へと連れて行ってしまった。

そして残された桃風。

道場破り撃退とかになるとどうしても自分は役に立たないし、なにができるというわけでもない。そういう理由で残ったのだが。

(……、)

ぼつん、と桃風ひとり。

いつもならひとりになることぐらいはどっつてことないのだが、さっきまで騒がしい了平がいたために余計に今の寂しさが際立つ。

いや、別にさびしいからと言ってどっつというわけではないのだが。

「……………むむ」

何か、何かが気に入らない。

おいてけぼりにされて怒るような年ごろではないし、別にどうしても道場破りの現場を見に行きたいというわけでもない。

しかし気に入らない、なぜか気に入らない、とてつもなく気に入らない。

いったい何がそこまで嫌なのか。自分の思考だということになにもわからない。

「むむむ……」

頭を悩ませながら考えるが、やはりわからない。というかこの問題はひとりでは無理なのではとまで思い始めてきた。めんどいだけかもしれないが。

だとすれば残された方法は、「人に聞く」以外にない。しかし自分の事情を話すというのも…正直言つて恥ずかしい。

「聞きたい、聞きたくない、聞きたい、聞きたくない…」

ぼん、と桃風の肩に手が置かれた。

「うひゃあ…!」

「ciao、桃風」

振り返った桃風を見ておかしそうに笑うのは、なんかしばらくぶりに会うような気がする。

「リータさん……」

なんで、この人は、

「ちょっとあっちでお茶しましょうっ?」

自分が悩んでいるときに限って、こつも絶妙のタイミングで表れるのだらう。

「ふうん……そういう事」

「…なんか、よくわかんないけど、もやもやするというか」

カフェテラスにて、興味深そうにテーブルに頬杖をついたリータに、気がつけば桃尻は全部話していた。

自分の気持ち、もやもやぐるぐるとした胸の中すべて。

「そうねえ……」

可愛らしく小首を傾げた後、なんというか、にやりというか、とにかくそんな感じの意地の悪い笑みで笑うリータ。そんな顔初めて見た。よくわからない桃尻としては果てしなく不安なのだが。

「あの…リータさん?」

「ん、ふふ」

ニコニコと笑うリータ、周りの人から見ればそれは女神の微笑みなのだろうが、今の桃凧には悪魔に見える。

「桃凧は……」

静かに紡がれた言葉を、固唾を飲んで聞く。

「皆の事大好きなのね」

「……………ふえ？」

正直言つて、「なにを言ってるんだろうこの人は」と思った。

数秒たって、頭の中にじわじわと言葉が染み込んでいくと同時に、顔が瞬く間に赤く染まる。リンゴもかくやという感じだ。

「な、ななななななにをいきなり……」

「あら、違つたかしら？」

いや、だから、どうしてそんな結論になつたのかを詳しく!!

「だって、皆が行ってしまったからそんな風になつたんでしょう？
置いてかれて寂しかったの？」

ぱくぱく、と陸に揚げられた魚のように口を開閉させる桃凧。

確かに、確かに私は皆がいなくなって寂しいとは思った、けど、置いてけぼりにされた事については別に何とも思っていないし、行きたいとも特に思わなかったし、でも、でも……！

……寂しかったのは、事実なんだ。

「~~~~~っ!!」

いきなり表れてぐるぐると思考を占領していく謎の気持ちに思わず頭を抱えてテーブルに突っ伏す桃尻。ああ、わかった、これは「恥ずかしい」だ。

それを見ながらリータは楽しそうに笑っている。鬼だ、鬼がいる。

「でも、よかったわ」

「な、なにがですか……」

「桃尻っていつもリアクション薄いでしょ？ そんな風に仲間を大事に思ってるって分かって、よかったかも」

もしかしたら自分は、相談する相手を間違えたのかもしれない。微笑むリータはとても嬉しそう。でもこちらのダメージは重大なのだ。

「……うー」

全ての力を失ったようにくたりとテーブルに身を任せる。気づいてしまった、なんかこれ以上リータの顔を見ているとんでもないへまをしてしまいそうで。

大切じゃないか、と聞かれれば、大切だ、と答えるだろう。でも、こゝ目の前で言われると何ともむずがゆいというか。今の今まで気づいていなかった己のもどかしさに穴があったら埋まりたい気分だ。

(今日は……つなにあつても絶対に口聞いてやんない……！)

などと、半分八つ当たりのように思うけど。リーたさんの言ってる事は間違つてないんだよなあ……。とまたも桃凧は途方に暮れたのだった。

その後、なぜか帰ってきたら妹が口をきいてくれなくて困り果てる兄の姿があったとか、無かったとか。

第十七話 「鈍感にもほどがあると思います。」（後書き）

本当に私は何が書きたかったのだろう…。桃尻は意外と鈍感だという事が分かりました。

リクエストの件ですが、今のところ来ているのは二つ。どんどん承りますので、よろしく願います。詳細は前の話のあとがきをどうぞ。

リクエスト1 「白」 (前書き)

まさかこんな短時間でできるとは思わなかった。

リクエスト『現代の白蘭との絡み』

リクエスト1 「白。」

初めてその人を見たときに、最初に感じたのは違和感だった。

まるで、水彩画だけの美術館に一枚だけ紛れ込んでしまった油彩画のような。たとえようもない、でも確かにそこにある違和感。

きっと、そのたった一つの油彩画である彼自身が、一番そう感じているだろう。

リクエスト1 「白。」

「ちょっといいかな？」

そう言って馬鹿みたいに甘そうなワッフルを持ってやってきた人

は、なんというか、「白」という文字がこの上なく似合う少年だった。

桃凧は辺りを見回す。お昼時のデパートの食べ物エリアで、席はほぼ満員。桃凧が座った席は二人掛けで、今日は一人で来たために一つ余っている。

そして桃凧は別に人見知りをする性質ではない。誰が来ようともそれはそれ、特に問題はないだろう。つまり、

「あー…、どうぞ?」

「そっか、アリガト」

ニコリ、と笑った後にその白い人は桃凧の目の前に座った。その手に持っていたのは、今まで誰も頼んだことがないといわれていたあの伝説の。

「練乳いちごチョコレートはちみつワッフル……」

「ん? 食べる?」

結構です。

桃凧は別に甘いものが嫌いというわけではなく、むしろ好きなのだが、さすがにそんな見てるだけで胸やけと糖尿病を起こしそうなのワッフルを食べるのはご遠慮願いたい。

「というか、なんでそんなのを選んだんだろう……」

ぼそり、と呟いたのを聞かれましたらしく、白い少年はちよつと笑いながら、

「新しい味に挑戦してみようと思って？」

「そうですか……」

だからと言ってそれを選ぶとは。

「飲み物いるようならあげるよ……？」

「あはは、大丈夫だよ。いただきます……、……うん」

桃凧は無言で、持っていたお茶を差し出した。

どうもこのデパート、屋上に遊園地があるらしい。

それを知ったのは、ふとしたきっかけで仲良くなった目の前の白い少年。白蘭びやくらんの言葉だった。

確かに幼いころの記憶を掘り返してみれば、あつたような気がしなくもない。…昔の自分にとっては、あまり好きな場所では無かったけど。

とにかく、それを話したときの白蘭のテンションがすごかった、ということと、白蘭はかなり押し押せの性格だという事。つまり、

「へへ、こんななってるんだ」

「……あつちだとティーカップ、こっちの方は観覧車、人気があるのはメリーゴーランドだよ」

連れていかれました。

自分としても会ってから数分しか経ってない人と一緒に行くのはどうかと思うのだが、不思議と、この人物には警戒心というものが湧かない。無邪気、という言葉はこの人のためにあるのではないだろうか。

まあ、白蘭の方は白蘭の方でこっちを小さな女の子だと思ってたみたいで、年を話したらニコニコ笑顔が一瞬驚き顔に変わったりした。

「ねえねえ桃尻ちゃん、何に乗ろっか？」

「好きなのに乗ったらいいと思うよ」

半分投げやりに言うと、白蘭はそのまま桃尻の手を引いてメリーゴーランドへと走って行った。心なしか、顔がきらきらしているのは気のせいではないと思う。

（なんとというか……）

子供みたいだなあ、と。

「……回り過ぎだと思っ」

「ごめんごめん、桃凧ちゃんって意外と三半規管弱いんだね」

メリーゴーランドの後にティーカップという選択がよくなかった。まさか白蘭があそこまでくるくる回り続けるとは思わなかったもの。

とりあえずベンチで一休みして、買ってきてもらったお茶を飲む。ちなみに白蘭はジュースを飲んでいる。…体大丈夫だろうか？

「んで、次は、何に乗る気…？」

「ん〜…。個人的にはもう一回ティーカップ「死ぬ」ダヨネー」

桃凧のかなり本気の呟きもあっさり流されたが、とうの白蘭は少し周りを見回して、ある一点で目をとめた。

「じゃあ、観覧車にしようか…！」

「あ〜…それくらいなら」

「桃凧ちゃんってさ、変わってるって言われな〜い？」

「なんで？」

観覧車にて、お互い向かい側の席に乗った桃凧と白蘭。

「だってさ、普通会ってすぐの人間信用しないでしょ？」

「ふむ……」

確かに、そうかもしれない。桃凧にとっての普通が周りからみると異常の部類に入るのは、なんとなくだけどわかっている。

「でも、びゃくらは大丈夫だと思ったから」

そう、つまりはそれなのだ。白蘭には悪意がない。敵意も、ましてや害意など微塵も感じられない。

「私は、私を信じてるから」

自分の目で見て、聞いて、感じた事。それがつまりは桃凧の全て、だから桃凧は幽霊とかUFOだつてもし目撃すればいると信じる。それが自分の目で見えるのならば。

そんな桃凧を見て白蘭はますます面白そうに笑った。

「アハハ、やっぱ変わってるね。そこが面白いんだけど」

「……面白い？　びゃくらは、面白い人が好きなの？」

うん、と白蘭は一回うなずいて。

「だってさ、見てると楽しくなるじゃん。そういう人。楽しい事は

大好き」

なるほど、それが白蘭の行動原理か。

しかし、ならば。

「楽しいと思うんなら、何でもやるの？」

「まさかー。ハイリスク過ぎる事はしないよ」

犯罪とか、そういうリスクが高いものはしないと。そういうことなのだろうか。逆にいえば、そのリスクが無くなったら？

それに、白蘭の言葉の端に感じるこの感じは。

「びゃくらんは……」

「ん？」

ひとりぼっちが寂しいの？

「……、面白い考えだね。なんでそう思ったの？」

「だって、」

面白い事とか、変わった事とか、普通じゃない事が好きな人って。自分が普通じゃないって自覚してるか、自分が平凡だと思ってる人だと思う。

私は昔、「自分は周りと違う」「って思った事がある。けど、びゃくらんは「周りは自分と違う」「って思ってるように見える。

それで、変わった人が好きなのは、自分と同じ存在が欲しいからじゃないのかなって。

「…私がそうだったから」

「ふうん…」

だって、馴染んでないもの。びゃくらんは、周りと。

いろんな絵の具の、白みたいに。白は、周りが綺麗だと一番目立ってしまう色だから。

「……ん〜。ちょっと違うかな。寂しくはないかも」

「でも、自分が浮いてるって自覚がある」

静まり返る。エレベーターの中のように、お互いが押し黙っていることによる沈黙。

「…桃風ちゃんはさ、どうやってその違和感を無くしたの？」

「私には、いたから。全部を受け止めてくれる人が、絶対に忘れな
いって言うてくれる人が、帰る場所が、あったから」

ツナがいたから、今の桃風は桃風でいれる。

大切な人、自分が何に変えても守りたい人。この世で一番、近くにいる人。

「友達かあ……。そういうの、作った事無かったや」

もし作る事が出来れば、僕もなにか変わるかな？

そうだった白蘭の顔は、面白いものを見つけた子供のような顔で恐らく、これから何があるうとこの愉快犯じみた性格は直らないのだろうなと思わせるものだった。

「今日は楽しかったよ」

「そっか、私も」

夕暮れのデパート前、お互いに笑いながら別れのあいさつをする。そういえば、白蘭がどこに住んでるかとか、そういったことは全然話してなかったけど。

「また会えたらいいね！ じゃねー」

そういつて白蘭は子供のように手を振りながら、彼は夕暮れの街に消えていった。子供のように、子供そのもので。

「うん…またね」

再開はきつと、とんでもないタイミングで訪れるだろう。

リクエスト1 「白。」（後書き）

はい、リクエスト一つ消化しました。現代の白蘭は、時系列的にまだ未来の事を知らないと仮定するとどのような人間になるだろうかと考えた末の『毒のない白蘭』です。正一君の手に10年バズーカがまだ渡って無いので、こんな感じになりました。私にとっての彼の第一印象が「愉快犯」だったので、イメージ的にもそれが根付いています。

リクエストしてくださったブラッディさん、ありがとうございます。内容がなかなかまとまらず、見苦しいかも知れませんが、楽しく書かせていただきました。

リクエスト2 「月夜の霧。」（前書き）

急展開、よくわからないフワフワ感。時系列的には黒曜編開始少し前。

リクエスト『骸との絡み、できれば戦闘についての教授など』

リクエスト2 「月夜の霧。」

『月は、そんなに美しいですか？

今宵、この場で会ったのも輪廻の中の巡りあわせ。

君が地面に寝てまでも見る月の美しさ、僕にも教えてくれませんか』

リクエスト2 「月夜の霧。」

ふと、目が覚めた。

「……、ゆめ」

布団から起き上がって、桃風は少し嘆息する。夢の中で、何かが起こった気がするのだが。

「……覚えてないや」

記憶に残らず消えてしまったそれ、少しだけ感じる空虚に、息を詰める。

夢の中で、月を見上げていた気がする。夢にしてはリアルで、美しかったそれに、見入っていた。でも周りの景色はどう考えても現実じゃありえないと感じられて、夢だったのだなと思った。

境界線が妖しくなる、胡蝶の夢のごとく。

「……、」

なんとなく外に目をやると、綺麗な満月。それがまたあの夢を思い起こさせる。

ふと、自分の頭によぎったいたずらな考えに、桃凧は不思議に思うことなく頷いていた。なんとなく、そうしなければならぬような気がしたのだ。

歩く、歩く。月の光が照る夜に、耳を澄ませば誰かの寝息が聞こえてきそうな静寂に、包まれながらもなお歩く。パジャマの上にかーデイガン一枚では流石に少し寒いかな、とも思ったが、そこまで寒くない。

どこに向かっているかなんてわからなかった。ただ、進まなければと思って、それでただ歩いていた。夜中に出歩くなんて、ばれてし

まったら大目玉だ。なぜそこまでして歩こうとするのか自分でもわからない。

それでも、行かなければと。

「…何処に？」

わからない。

「……何で？」

わからない。

「……いつまで？」

わからない。

もしかしたら、まだ自分は夢を見ているのかもな。と、フワフワした頭でぼんやり思う。

あえて言うのなら、

声の聞こえる方に。

ついたのは、公園だった。周りがそれなりに開けていて、ここだったら今日の月も綺麗に見えるだろう。

まるで決められていた事のように、桃風はそのまま芝生の敷かれた中央に寝そべって、月を見上げる。見上げるそれは夢とは違って少し味気ないけど、その淡泊さは悪くない。

「……はふ」

一息ついて、そのまま目を瞑る。優しい月の光は、まぶた瞼を閉じてもそのまま目の中に柔く差し込んでくる。それが心地いい。

「何を

何を見ているのですか」

声が聞こえた。いや、本当にそれは声だったのか。耳の中にすぐ入って、そのまま溶けて消えてしまいそう。

霧のような。

「月、見ているの」

「目を閉じているのに見えるのですか？」

「見えないよ」

そう答えたときに、どうやら寝ころぶ桃風の頭の近くにいらしい人の気配が止まる。呆れているのだろうか。

「でも、見えなくても、そこに月があるのはわかるから」

だから、見てるの。

少しした後、気配が揺らいで、次に押し殺したような笑い声。失礼な。

「ク、フフフ…、僕も様々な者に会って来ましたが、そのように抽象的にこの世界をとらえるものは初めてです」

「そう」

少しの沈黙。その後、桃凧は切り出した。

「私を呼んだのはあなた？」

「そうであってそうではない、と言っておきましょうか」

？ と寝ころんだまま首をかしげる桃凧に、恐らく少年であろう声の主はこぼした笑い声を隠しもせず、に言っ。

「僕も君に呼ばれたからです」

「私…呼んでないけど」

桃凧にはテレパシーとかそういう能力はないので、呼べるはずがないのだ。

しかしその言葉に彼は一つため息の音。

「呼んだでしょう、夢で見た『世界』で」

「ゆめの、せかい」

思い出すのは、起きる前に見た夢の中で見た景色。綺麗なものだけしか存在しないような、生きた人の気配がしない場所。

あそこは、夢ではない別の場所だったのか。

相変わらず目を閉じたまま、桃凧は考える。それでも、呼んだ覚えはないのだが。

「ふむ……無意識でしたか。あそこまで深いところに潜れる人間ならば……と思いましたか、偶然か……？」

くぐもった声でぶつぶつと呟いている少年と、少しだけ眠くなってきた桃凧。ああだめだ、こんなところで寝てしまったては怒られるどころじゃすまない。

ふと、気配が近くなったのを感じる。それに伴って降りてくる霧、のようなもの。本当に体が濡れたりという事はないみたいだが、霧のような感覚というか。

しかし、目を閉じているのにどうして霧だとわかるのだろうか？

「……………」

不思議に思っただけ目を開けようとしたところで、ひたりと両脇に感じる感触。皮手袋に包まれた、温かい人の手の感触。どうやら、目元に手を置かれているようだ。

「失礼」

「……………」

ふわり、と霧の気配が強くなる。それと同時に頭の中に感じる違和感。普通では感じる事の出来ない奇妙な感覚。

自分の心の中の一番深い所を優しくノックされているような、嫌ではないけど少し不快な。

「……………なるほど、そういう体質でしたか」

目元に置かれていた手が離れる。それとともに、強かった霧の気配も遠ざかって行った。

「……………どうしたの？」

目を開ける事も億劫で、疲れ果てている自分の体を不思議に思いながらも、桃凧は彼に問いかけた。

「いえ、どうやら僕は君に憑依することはできなさそうだ。乗っ取る前に君が壊れてしまう」

「ん……………」

憑依とか、乗っ取るとか、いろいろ不穏な言葉が飛び交っているが。

「あなたは、幽霊か何か？」

「僕をあのような漂うだけの低俗な存在と比べてもらっては困りま

す。それよりももっと、恐ろしいモノ、ですよ」

はぐらかされた感じがしないでもないが、どうやら幽霊ではないらしい。それよりも怖いもの、とか言われても、いまいちよくわからないが。

でもまあ、幽霊で無いのなら安心した。

「…そこで安心する理由が分かりませんが、それよりもっと恐ろしいモノですよ？」

「でも、不思議な感じがするけど怖くはないし」

安全とは断言できない存在かもしれないけど、幽霊よりはそれ以外の方がいい。彼らは色々と放っておけないせいで引きずり込まれそうになった事が多々ある。

「君が見る月は綺麗ですか」

「あなたが見る月は綺麗じゃないの？」

沈黙。の後、彼は語りだした。

「いえ…美しい、美しいと思いますよ。……人間よりは、よっぽど」

深く、深く。根付くものが全く見えない、それほどまでに暗い闇。

彼は一体、何を抱えているのか。

「それでも、僕の見る世界と君の見る世界は違うでしょう。価値観

も、見方も、全て」

「…そうだね」

同じものを見ている人間など、この世には存在しないと思う。一番近いと思う存在でさえ、まったく同じというわけではない。

だからこそ、言葉があるのだ。

「綺麗、だと思う。月の光は、優しいから」

「優しい、ですか」

うん、と桃凧は一度頷いて。

「太陽は、温かいけど、目で見ることが出来ないから。月は、見えるものだから。どっちも好きだけど、見るのなら月の方がいいの」

でも、月の光は太陽の光を反射しているものだから。太陽が嫌いというわけではないけれど。

「冷たいけど優しいのが月で、まぶしいけれど温かいのが太陽なんだよ」

これが、桃凧の世界の一端である事に、彼は気づいているだろう。

何かがいらないというわけではなく、何かが邪魔というわけではなく、ただ、何かあっても受け入れられる。

拒絶は桃凧には無い。

桃凧の世界に無いものは、桃凧を拒絶したものだだけだ。

「……君の世界は甘い。君もまた、僕とは相いれない存在ですね」

「…それは、私にはわからないよ」

あなたはそう思ってるみたいだけど、私はまだ分からないから。

「あなたが私を本当に嫌いにならないのだったら、私は別に」

「僕には理解できません、己を傷つけるかもしれない人間を受け入れるなど。ましてや、誰かのために生きたいとか、誰かの役に立ちたいとか」

それは、彼の世界には正真正銘無いものなのだろう。

それでいいと、桃凧も思う。彼がそう思うのならそれでも構わない。

でも、

「私は、寂しいと思うな」

寂しいと思う、自分の周りに誰かがいないなど。寂しくて寂しくて、自分は耐えられないだろう。

だから、その分では彼は強い、と言える存在なのだろう。

少しだけ、羨ましい。

そんな風に強く生きれる事が、少しだけ。

「クフフ。そろそろ時間のようですね」

ざわざわと、周りの空気が動いているのが分かる。

「それでは、Arrivederci。また会いましょう」

ざわりざわ、と木々が一瞬だけ大きくうごめいた後。彼の気配は、もつどこにもなくなっていた。

「……、」

桃凧は目を開ける。月は、さっきより少しだけ動いていた。

夢のような、事実、夢の続きの出会いだった。

ふとあたりを見回す。かすかに漂う、霧。

「……？」

触れようとする前にそれは空気に溶けるように消えてしまった。
不可思議な存在に首をかしげる。

「…帰る」

立ち上がって、元来た道を歩き出す。

ふらふら、ふわふわ。

桃凧としては、まだ夢の続きを見ているよう。これが本当に現実なのかと、今でも疑ってるくらいだ。

(あの時、何をしたんだろう?)

霧の気配が濃くなったと同時に、桃凧に訪れた異変。彼が何かをしたというのはわかっているのだが、何をしたのかが分からない。

いつそのこと目を開けてみればよかったか、とも思ったが、今考えると目を開けなくてよかったのかもしれない。

目を開けていたら、操られていたかもしれないから。桃凧にとつての無意識の自己防衛だったのかもしれない。なんとなく、そんな感じがする。

あの感覚を思い出す。不思議な、体の芯に響くような感覚。

結局、あれは何だったのか。

桃凧が妙な霧について考えていた時。

残っていた彼の存在のかけら、かすかに漂っていた霧が。ゆらり

と動いたのを桃凧は知らない。

リクエスト2 「月夜の霧。」（後書き）

まさかここまで二人が話が弾むとは思わなかった。

桃凧が持つてる独特な世界観、桃凧ワールドが炸裂した今作。そのザ・ワールドについていけるのは桃凧に負けず劣らず独特な世界観を持っている骸だけでした。

ちなみに、桃凧は骸の顔を見ていません。終始目を瞑っていました。ですのであのパイナツポも見ていません。というか、

骸の事を人間だと思っていけません。

妖怪とかヒトじゃないものだと思っているので、たぶん再開の時に驚くでしょう。

そして少しだけ桃凧の不思議な力を紹介。役に立つかたたないかはわかりませんが。骸君、意図せず桃凧の扉を開ける。

リクエストしてくださった骸っちゃん、どうでしたでしょうか。戦闘についての指南は骸がそこまでデレてくれなかったので、いずれ本編の方で出そうとは思いますが。リクエスト、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2197p/>

もうひとつのソラ

2011年10月6日14時19分発行